

古事記物語

鈴木三重吉

青空文庫

女^め神^{がみ}の死^し

一

世界ができたそもそものはじめ。まず天と地とができあがりますと、それといっしよにわれわれ日本人のいちばんご先祖の、天^{あめ}御^{のみ}中^な主^な神^{のかみ}とおっしゃる神さまが、天の上の高^{たか}天^か原^{まのはら}というところへお生まれになりました。そのつぎには高^{たか}皇^{みむすび}産^の霊^{かみ}神^{むすびのかみ}、神^{かみ}産^{むすび}霊^{のかみ}神^{のかみ}のお二^{ふた}方^{かた}がお生まれになりました。

そのときには、天も地もまだすっかり固^{かた}まりきらないで、両方とも、ただ油を浮^うかしたように、とろとろになって、くらげのように、ふわりふわりと浮かんでおりました。その中へ、ちようどあしの芽^めがはえ出るように、二人の神さまがお生まれになりました。

それからまたお二人、そのつぎには男^お神^{かみ}女^め神^{がみ}とお二人ずつ、八人の神さまが、つぎつぎにお生まれになった後に、伊^い弉^さ諾^な神^{のかみ}と伊^い弉^さ冉^な神^{のかみ}とおっしゃる男神女神がお生まれになりました。

天御中主神あめのみなかぬしのかみはこのお二方の神さまをお召しになつて、

「あの、ふわふわしている地を固めて、日本の国を作りあげよ」

とおっしゃつて、りっぱな矛ほこを一ふりお授けさずになりました。

それでお二人は、さつそく、天あめの浮橋うきはしという、雲の中に浮かんでいる橋の上へお出ま

しになつて、いただいた矛ほこでもつて、下のところとろしていろをかきまわして、さつ

とお引きあげになりますと、その矛の刃先はさきについた潮水しおみずが、ぽたぽたと下へおちて、そ

れが固かたまつて一つの小さな島になりました。

お二人はその島へおりていらしつて、そこへ御殿ごてんをたててお住まいになりました。そし

て、まずいちばんさきに淡路島あわじしまをおこしらえになり、それから伊予いよ、讃岐さぬき、阿波あわ、土佐とさ

とつづいた四国の島と、そのつぎには隠岐おきの島、それから、そのじぶん筑紫つくしといった今の

九州と、壱岐いさき、対島つしま、佐渡さどの三つの島をお作りになりました。そして、いちばんしまいに、

とかげの形をした、いちばん大きな本州をおこしらえになつて、それに 大日本豊秋津島おおやまととよあきつしま

というお名まえをおつけになりました。

これで、淡路の島からかぞえて、すっかりで八つの島ができました。ですからいちばん

はじめには、日本のことを、大八島国おおやしまくにと呼びよ、またの名を豊葦原水穂国とよあしはらのみずほのくにとも称えとな

ていました。

こうして、いよいよ国ができあがったので、お二人は、こんどはおおぜいの神さまをお生みになりました。それといっしょに、風の神や、海の神や、山の神や、野の神、川の神、火の神をもお生みになりました。ところがおいたわしいことには、伊弉冉神いざなみのかみは、そのおしまいの火の神をお生みになるときに、おからだにおやけどをなすって、そのためにとうとうおかくれになりました。

伊弉諾神いざなぎのかみは、

「ああ、わが妻の神よ、あの一人の子ゆえに、大事なおまえをなくするとは」とおっしやつて、それはそれはいそうお嘆きなげになりました。そして、お涙なみだのうちに、やっと、女神のおなきがらを、出雲いずもの国と伯耆ほうぎの国とのさかいにある比婆ひばの山にお葬りほうむになりました。女神は、そこから、黄泉よみの国という、死んだ人の行くまっくらな国へたっておしまいにまりました。

伊弉諾神いざなぎのかみは、そのあとで、さつそく十拳とつかの剣つるぎという長い剣を引きぬいて、女神の災わざわいのもとになった火の神を、一うちきに斬り殺してしまいいになりました。

しかし、神のおくやしきは、そんなことではお癒いえになるはずありませんでした。神

は、どうかしてもう一度、女神に会いたくおぼしめして、とうとうそのあとを追って、ま
つくらな黄泉よみの国までお出かけになりました。

二

女神めがみはむろん、もうとつくに、黄泉よみの神の御殿ごてんに着いていらっしやいました。

すると、そこへ、夫の神が、はるばるたずねておいでになったので、女神は急いで戸口
へお出迎えになりました。

伊弉いさなぎのかみ諾神は、まつくらな中から、女神をお呼びよかけになつて、

「いとしきわが妻の女神よ。おまえといつしよに作る国が、まだできあがらないでいる。
どうぞもう一度帰ってくれ」とおつしやいました。すると女神は、残念そうに、

「それならば、もつと早く迎えにいらしつてくださいますればよいものを。私はもはや、こ
の国のけがれた火で炊たいたものを食べましたから、もう二度とあちらへ帰ることはできま
すまい。しかし、せつかくおいでくださいましたのですから、ともかくいちおう黄泉よみの神
たちに相談をしてみましよう。どうぞその間は、どんなことがありましても、けつして私

の姿すがたをご覧らんにならないでくださいましな。後生ごしょうでございますから」と、女神はかたくその申しあげておいて、御殿ごてんの奥おくへおはいりになりました。

伊弉諾神いざなぎのかみは永い間戸口にじつと待つていらつしやいました。しかし、女神は、それなり、いつまでたつても出ていらつしやいません。伊弉諾神いざなぎのかみはしまいには、もう待ちどおしくてたまらなくなつて、とうとう、左のびんのくしをおぬきになり、その片かたはしの、大歯おはを一本欠かき取つて、それへ火をともして、わずかにやみの中をてらしながら、足さぐりに、御殿の中深くはいつておいでになりました。

そうすると、御殿のいちばん奥に、女神は寝ていらつしやいました。そのお姿をあかりでご覧になりますと、おからだじゆうは、もうすっかりべとべとに腐くさりくずれていて、臭くさい臭いやなにおいが、ぶんぶん鼻へきました。そして、そのべとべとに腐くさつたからだじゆうには、うじがうようよとたかつておりました。それから、頭なと、胸なと、お腹なかと、両もと、両手両足のところには、そのけがれから生まれた雷神らいじんが一人ずつ、すべてで八人で、怖おそろしい顔をしてうずくまつておりました。

伊弉諾神いざなぎのかみは、そのありさまをご覧になると、びつくりなすつて、怖ろしさのあまりに、急いいで遁にげ出しておしまになりました。

女神はむつくりと起きあがって、

「おや、あれほどお止め申しておいたのに、とうとう私のこの姿をすがたご覧になりましたね。まあ、なんという憎いにくお方かたでしょう。人にひどい恥はじをおかせになった。ああ、くやしい」と、それはそれはひどくお怒りになって、さっそく女の悪鬼わるおにたちを呼よんで、

「さあ、早く、あの神をつかまえておいで」と齒がみをしながらお言いつけになりました。女の悪鬼たちは、

「おのれ、待て」と言いながら、どんどん追っかけて行きました。

伊弉諾神いざなぎのかみは、その鬼どもにつかまってはたいへんだとおぼしめして、走りながら髪かみの飾かざりりにさしてある黒いかつらの葉を抜き取ぬっては、どんどんうしろへお投げつけになりました。

そうすると、見る見るうちに、そのかつらの葉の落ちたところへ、ぶどうの実がふさふさとなりました。女鬼どもは、いきなりそのぶどうを取って食べはじめました。

神はその間に、いっしょうけんめいにかけてだして、やっと少しばかり遁にげのびたと思いにありますと、女鬼どもは、まもなく、またじきうしろまで追いつめて来ました。

神は、

「おや、これはいけない」とお思ひになつて、こんどは、右のびんのくしをぬいて、その歯をひつ欠いては投げつけ、ひつ欠いては投げつけなさいました。そうすると、そのくしの歯が片はしからたけのこになつてゆきました。

女鬼^{おんなおに}たちは、そのたけのこを見ると、またさつそく引き抜いて、もぐもぐ食べだしました。

伊弉諾神^{いざなぎのかみ}は、そのすきをねらつて、こんどこそは、だいぶ向こうまでお遁^にげになりました。そしてもうこれならだいじようぶだろうとおぼしめして、ひよいとうしろをふりむいてご覧になりますと、意外にも、こんどはさつきの女神のまわりにいた八人の雷人^{らいじん}どもが、千五百人の鬼の軍勢をひきつれて、死にものぐるいでおっかけて来るではありませんせんか。

神はそれをご覧になると、あわてて十拳^{とつか}の剣を抜きはなして、それでもつてうしろをぐんぐん切りまわしながら、それこそいっしょうけんめいにお遁^にげになりました。そして、ようよう、この世界と黄泉^{よみ}の国との境^{さかい}になつてゐる、黄泉比良坂^{よもつひらさか}という坂の下まで遁^にげのびていらつしやいました。

三

すると、その坂の下には、ももの木が一本ありました。

神はそのももの実を三つ取って、鬼どもが近づいて来るのを待ち受けていらして、その三つのもものを力いっぱいお投げつけになりました。そうすると、雷神たちはびっくりして、みんなちりぢりばらばらに遁^にげてしまいました。

神はそのももの向かつて、

「おまえは、これから先も、日本じゅうの者がだれでも苦しい目に会っているときには、今わしを助けてくれたとおりに、みんな助けてやってくれ」とおっしゃって、わざわざ大^おおかん^{つみのみこと}つみのみこと神実命というお名まえをおやりになりました。

そこへ、女神は、とうとうじれったくおぼしめして、こんどはご自分で追っかけていらつしやいました。神はそれをご覧になると、急いでそこにあつた大きな大岩をひっかかえていらして、それを押^おしつけて、坂の口をふさいでおしまいになりました。

女神は、その岩にさえぎられて、それより先へは一足も踏^ふみ出すことができないものですから、恨^{うら}めしそうに岩をにらみつけながら、

「わが夫の神よ、それではこのしかえしに、日本じゅうの人を一日に千人ずつ絞め殺してゆきますから、そう思つていらつしやいまし」とおつしやいました。神は、

「わが妻の神よ、おまえがそんなひどいことをするなら、わしは日本じゅうに一日に千五百人の子供を生ませるから、いっこうかまわない」とおつしやつて、そのまま、どんどんこちらへお帰りになりました。

神は、

「ああ、きたないところへ行つた。急いであらだを洗つてけがれを払おう」とおつしやつて、日向の国の阿波岐原というところへお出かけになりました。

そこにはきれいな川が流れていました。

神はその川の岸へつえをお投げすてになり、それからお帯やお下ばかまや、お上衣やお冠や、右左のお腕にはまつた腕輪などを、すっかりお取りはずしになりました。そうすると、それだけの物を一つ一つお取りになるたんびに、ひよいひよいと一人ずつ、すべてで十二人の神さまがお生まれになりました。

神は、川の流れをご覧になりながら、

上の瀬は瀬が早い、
下の瀬は瀬が弱い。

とおつしやつて、ちようどいいころあいの、中ほどの瀬におおりになり、水をかぶつて、おからだじゆうをお洗いになりました。すると、おからだについたけがれのために、二人の禍の神が生まれました。それで伊弉諾神は、その神がつくりだす禍をおとりになるために、こんどは三人のよい神さまをお生みになりました。

それから水の底へもぐつて、おからだをお清めになるときに、また二人の神さまがお生まれになり、そのつぎに、水の中にこごんでお洗いになるときにもお二人、それから水上へ出ておすすぎになるときにもお二人の神さまがお生まれになりました。そしてしまいに、左の目をお洗いになると、それといつしよに、それはそれは美しい、貴い女神がお生まれになりました。

伊弉諾神は、この女神さまに天照大神というお名前をおつけになりました。そのつぎに右のお目をお洗いになりますと、月読命という神さまがお生まれになり、いちばんしまいにお鼻をお洗いになるときに、建速須佐之男命という神さまがお生まれに

なりました。

伊弉諾神いざなぎのかみはこのお三方さんかたをご覧になつて、

「わしもこれまでいくたりも子供を生んだが、とうとうしまいに、一等よい子供を生んだ」と、それはそれは大喜びをなさいまして、さつそく玉の首飾くびかざりりをおはずしになつて、それをさらさらとゆり鳴らしながら、天照大神あまてらすおおかみにおあげになりました。そして、

「おまえは天へのぼつて高天原たかまのはらを治めよ」とおっしゃいました。それから月読命つきよみのみことには、

「おまえは夜の国を治めよ」と言いつけになり、三婆んめの須佐之男命すさのおのみことには、

「おまえは大海おおみの上を治めよ」と言いわたしになりました。

あめ
天の岩屋 いわや

一

あまてらすおおかみ
天照大神と、二番目の弟さまの月読命とは、おとうさまのご命令に従って、
それぞれ大空と夜の国とお治めになりました。

ところが末のお子さまの須佐之男命だけは、おとうさまのお言いつけをお聞きになら
ないで、いつまでたつても大海をおおみを治めようとなさらないばかりか、りっぱな長いおひげ
が胸の上までたれさがるほどの、大きなおとなにおなりになっても、やっぱり、赤んぼう
のように、絶えまもなくわんわんわんわんお泣き狂いになって、どうにもこうにも手のつ
けようがありませんでした。そのひどいお泣き方といったら、それこそ、青い山々の草木
も、やかましい泣き声で泣き枯らされてしまい、川や海の水も、その火のつくような泣き
声のために、すっかり干あがったほどでした。

すると、いろんな悪い神々たちが、そのさわぎにつけこんで、わいわいとうるさくさわぎまわりました。そのおかげで、地の上にはありとあらゆる災わざわいが一どきに起こってきました。

伊弉諾命いざなぎのみことは、それをご覧らんになると、びつくりなすって、さっそく須佐之男命すさのおのみことをお呼びになつて、

「いったい、おまえは、わしの言うことも聞かないで、何をそんなに泣き狂つてばかりいるのか」ときびしくおとがめになりました。

すると須佐之男命すさのおのみことはむきになつて、

「私わたしはおかあさまのおそばへ行きたいから泣なくのです」とおっしゃいました。

伊弉諾命いざなぎのみことはそれをお聞きになると、たいそうお腹立はらだちになつて、

「そんなかつてな子は、この国へおくわけにゆかない。どこへなりと出て行け」とおっしゃいました。

命みことは平気で、

「それでは、お姉上さまにおいとま乞ごいをしてこよう」とおっしゃりながら、そのまま大空の上の、高天原たかまのはらをめざして、どんどのぼっていらつしやいました。

すると、力の強い、大男の命みことですから、力いっぱいずしんと乱暴らんぼうにお歩きになると、山も川もめりめりとゆるぎだし、世界じゅうがみしみしと震ふるい動きました。

天照大神あまてらすおおかみは、その響ひびきにびっくりなすつて、

「弟があんな勢いで**のぼ**つて来るのは、必ずただごとではない。きっと私の国わたくしを奪うばい取ろうと思つて出て来たに相違そういない」

こうおつしやつて、さつそく、お身じたくをなさいました。女神はまず急いで髪かみをといて、男まげにおゆいになり、両方のびんと両方の腕うでとに、八尺やさかの曲玉まがたまというりっぱな玉の飾かぎりをおつけになりました。そして、お背中には、五百本、千本というたいそうな矢をお負おいになり、右手に弓を取つてお突きたてになりながら、勢いこんで足を踏ふみならして待ちかまえていらつしやいました。そのきついお力ぶみで、お庭かたの堅い土が、まるで粉こなゆ雪きのようにもうもうと飛とびちりました。

二

まもなく須佐之男命すさのおのみことは大空へお着きになりました。

女神はそのお姿すがたをご覧らんになると、声を張りあげて、

「命みこと、そちは何をしに來た」と、いきなりおしかりつけになりました。すると命は、

「いえ、私はけつして悪いことをしにまいったものではございません。おとうさまが、私の泣いているのをご覧らんになって、なぜ泣くかとおとがめになったので、お母上のいらつしやるところへ行きたいからですと申しあげると、たいそうお怒りおこになって、いきなり、出て行つてしまえとおつしやるので、あなたにお別れをしにまいったのです」とお言いわけをなさいました。

でも女神はすぐにはご信用にならないで、

「それではおまえに悪い心のない証しょうこを見せよ」とおつしやいました。命は、

「ではお互たがいに子を生んであかしを立てましょう。生まれた子によって、二人の心のよしあしがわかります」とおつしやいました。

そこでごきようだいは、天安河あめのやすのかわという河かわの兩方の岸に分かれてお立ちになりました。そしてまず女神めがみが、いちばん先に、命みことの十拳とつかの劍つるぎをお取りになって、それを三つに折つて、天真名井あめのまないという井戸で洗つて、がりがりとおかみになり、ふつと霧きりをお吹きになりますと、そのお息の中から、三人の女神がお生まれになりました。

そのつぎには命が、女神の左のびんにおかけになつてゐる、八尺の曲玉の飾りをいただいて、玉の音をからからいわせながら、天真名井という井戸で洗いすすいで、それをがりがりかんで霧をお吹き出しになりますと、それといっしょに一人の男の神さまがお生まれになりました。その神さまが、天忍穗耳命です。

それからつぎには、女神の右のびんの玉飾りをお取りになつて、先と同じようにして息をお吹きになりますと、その中からまた男の神が一人お生まれになりました。

つづいてこんどは、おかずらの玉飾りを受け取つて、やはり真名井で洗つて、がりがりがんで息をお吹きになりますと、その中から、また男の神が一人お生まれになり、いちばんしまいに、女神の右と左のお腕の玉飾りをかんで、息をお吹きになりますと、そのたんに、同じ男神が一人ずつ——これですべてで五人の男神がお生まれになりました。

あまてらすおおかみ
天照大神は、

「はじめに生まれた三人の女神は、おまえの剣からできたのだから、おまえの子だ。あと
の五人の男神は私の玉飾りからできたのだから、私の子だ」とおっしゃいました。

命は、

「そうら、私が勝つた。私になんの悪心もない印には、私の子は、みんなおとなしい女

神ではありませんか。どうです、それでも私は悪人ですか」と、それはそれは大いばりにおいばりになりました。そして、その勢いに乗ってお暴れだしになって、女神がお作らせになっている田の畔をこわしたり、みぞを埋めたり、しまいには女神がお初穂を召しあがる御殿へ、うんこをひりちらすというような、ひどい乱暴をなさいました。

ほかの神々は、それを見てあきれてしまつて、女神に言いつけにまいりました。

しかし女神はちつともお怒りにならないで、

「何、ほつておけ。けつして悪い気でするのではない。きたないものは、酔つたまぎれに吐いたのであらう。畔やみぞをこわしたのは、せつかくの地面を、そんなみぞなぞにしておくのが惜しいからであらう」

こうおつしやつて、かえつて命をかばつておあげになりました。

すると命は、ますます図に乗つて、しまいには、女たちが女神のお召物を織っている、機織場の屋根を破つて、その穴から、ぶちのうまの皮をはいで、血まぶれにしたのを、どしんと投げこんだりなさいました。機織女は、びっくりして遁げ惑うはずみに、おさで下腹を突いて死んでしまいました。

女神は、命のあまりの乱暴さにとうとういたたまれなくおなりになって、天の岩屋とい

う石室いしむろの中へお隠れかくになりました。そして入口の岩の戸をぴつしりとおしめになったきり、そのままひきこもっていらつしやいました。

すると女神は日の神さまでいらつしやるので、そのお方がお姿すがたをお隠しかくになるといつしよに、高天原たかまのはらも下界の地の上也、一度にみんなまつ暗くらがりになって、それこそ、昼と夜との区別もない、長い長いやみの世界になってしまいました。

そうすると、いろいろの悪い神たちが、その暗がりにつけこんで、わいわいとさわぎだしました。そのために、世界じゅうにはありとあらゆる禍わざわいが、一度にわきあがって来ました。

そんなわけで、大空の神々たちは、たいそうお困りこまになりました、みんなで安河原やすのかわらという、空の上の河原かわらに集まって、どうかして、天照大神に岩屋からお出ましになっていただく方法はあるまいかといっしょうけんめいに、相談をなさいました。

そうすると、思おも金いかね神のかみという、いちばんかしこい神さまが、いいことをお考えつきになりました。

みんなはその神のさしずで、さつそく、にわとりをどつさり集めて来て、岩屋の前で、ひっきりなしに鳴かせました。

それから一方では、安河やすのかわの河上から固い岩をはこんで来て、それを鉄床てつどこにして、八咫やたの鏡かがみというりっぱな鏡を作らせ、八咫やたの曲玉まがたまというりっぱな玉で胸飾むなかぎりを作らせました。そして、天香具山あめのかぐやまという山からさかきを根抜きねにして来て、その上の方の枝えだへ、八咫やたの曲玉まがたまをつけ、中ほどの枝へ八咫やたの鏡かがみをかけ、下の枝へは、白や青のきれをつりさげました。そしてある一人の神さまが、そのさかきを持って天の岩屋に立ち、ほかの一人の神さまが、そのそばでのりとをあげました。

それからやはり岩屋の前へ、あきだるを伏ふせて、天宇受女命あめのうずめのみことという女神に、天香具山あめのかぐやまのかつらのつるをたすきにかけさせ、かつらの葉を髪飾かみかざりりにさせて、そのおけの上へあがつて踊りを踊らせました。

宇受女命うずめのみことは、お乳ちちもお腹なかも、もももまるだしにして、足をとんとん踏みふみしながら、まるでつきものでもしたように、くるくるくるくと踊り狂おどくるいました。

するとそのようすがいかにもおかしいので、何千人という神たちが、一度にどつとふきだして、みんなでころがりまわって笑いました。そこへにわとりは声をそろえて、コツケコー、コツケコーと鳴きたてるので、そのさわぎといったら、まったく耳もつぶれるほどでした。

天照大神は、そのたいそうなさわぎの声をお聞きになると、何ごとが起こつたのかとおぼしめして、岩屋の戸を細めにあけて、そつとのぞいてご覧らんになりました。そして宇受うすめ女命みことに向かつて、

「これこれ私わたしがここに、隠れていれば、空の上もまつくらはずなのに、おまえはなにをおもしろがって踊っているのか。ほかの神々たちも、なんであんなに笑いくずれているのか」とおたずねになりました。

すると宇受女命は、

「それは、あなたよりも、もつと貴い神さまが出ていらつしやいましたので、みんなが喜んでさわいでおりますのでございます」と申しあげました。

それと同時に一人の神さまは、例の、八咫やたの鏡かがみをつけたさかきを、ふいに大神の前へ突き出しました。鏡には、さつと、大神の顔がうつりました。大神はそのうつった顔をご覧になると、

「おや、これはだれであろう」とおつしやりながら、もつとよく見ようとおぼしめして、少しばかり戸の外へお出ましになりました。

すると、さつきから、岩屋のそばに隠かくれて待ちかまえていた、手力男命たちからおのみことという大力

の神さまが、いきなり、女神のお手を取って、すっかり外へお引き出し申しました。それといっしょに、一人の神さまは、女神のおうしろへまわって、

「どうぞ、もうこれからうちへはおはいりくださいませように」と申しあげて、そこへしめなわを張りわたしてしまいました。

それで世界じゅうは、やつと長い夜があけて、再び明るい昼が来ました。

神々たちは、それでようやく安心なさいました。そこでさつそく、みんなで相談して、
すさのおのみこと 須佐之男命 には、あんなひどい乱暴らんぼうをなすつた罰ばつとして、ご身代をすっかりさし出さ

せ、そのうえに、りっぱなおひげも切りとり、手足の爪つめまではぎとって、下界へ追いくだしてしまいました。

そのとき すさのおのみこと 須佐之男命 は、おおけつひめのみこと 大気都比売命 という女神に、何か物を食べさせよとおおせになりました。
おおけつひめのみこと 大気都比売命 は、おことばに従って、さつそく、鼻あなの穴や口の中からい

ろいろの食べものを出して、それをいろいろにお料理してさしあげました。

すると すさのおのみこと 須佐之男命 は おおけつひめのみこと 大気都比売命 のすることを見ていらして、

「こら、そんな、お前の口や鼻から出したものがおれに食えるか。無礼なやつだ」と、た
 いそうお腹立はらだちになつて、いきなり剣を抜ぬいて、
おおけつひめのみこと 大気都比売命 を一うちに切り殺してお

しまいになりました。

そうすると、その死がいの頭から、かいこが生まれ、両方の目にいねがなり、二つの耳にあわがなりました。それから鼻にはあずきがなり、おなかに、むぎとだいずがなりました。

それを神産靈神かみむすびのかみがお取り集めになつて、日本じゅうの穀物こくもつの種になさいました。
須佐之男命すさのおのみことは、そのまま下界へおりておいでになりました。

やまた おろち
八俣の大蛇

一

須佐之男命^{すさのおのみこと}は、大空から追いおろされて、出雲^{いずも}の国の、肥^ひの河^{かわ}の河上^{かわかみ}の、鳥髪^{とりかみ}と
いうところへおくだりになりました。

すると、その河^{かわ}の中にはしが流れて来ました。命^{みこと}は、それをご覧^{らん}になつて、

「では、この河^{かわ}の上の方には人が住んでいるな」とお察しになり、さつそくそちらの方へ
向かつて探^{さが}し探^{さが}しおいでになりました。そうすると、あるおじいさんとおばあさんが、
まん中に一人の娘^{むすめ}をすわらせて三人でおんおん泣^ないておりました。

命は、おまえたちは何者かとおたずねになりました。

おじいさんは、

「私は、この国の大山津見^{おおやまつみ}と申します神の子で、足名椎^{あしなずち}と申します者でございます。妻

の名は手名椎^{てなずち}、この娘の名は櫛名田媛^{くしなだひめ}と申します」とお答えいたしました。

命は、

「それで三人ともどうして泣いているのか」と、かさねてお聞きになりました。

おじいさんは涙をふいて、

「私たち二人には、もとは八人の娘^{むすめ}がおりましたのでございますが、その娘たちを、八俣^{やまた}の大蛇^{おろち}と申します怖^{おそ}ろしい大じやが、毎年出てきて、一人ずつ食べて行ってしまいまして、とうとうこの子一人だけになりました。そういうこの子も、今にその大じやが食べにまいりますのでございます」

こう言つて、みんなが泣いているわけをお話いたしました。

「いったいその大じやはどんな形をしている」と、命^{みこと}はお聞きになりました。

「その大じやと申しますのは、からだは一つでございしますが、頭と尾^おは八つにわかれておりまして、その八つの頭には、赤ほおずきのようなまっかな目が、燃えるように光っております。それからからだじゅうには、こけや、ひのきやすぎの木などがはえ茂^{しげ}っております。そのからだのすつかりの長さが、八つの谷と八つの山のすそをとりまくほどの、大きな大きな大じやでございます。その腹^{はら}はいつも血にただれてまっかになっております」と

怖ろしそうにお話いたしました。命は、

「ふん、よしよし」とおうなずきになりました。そして改めておじいさんに向かって、

「その娘はおまえの子ならば、わしのお嫁にくれないか」とおっしゃいました。

「おことばではございますが、あなたさまはどのどなただか存じませんので」とおじいさんは危ぶんで怖る怖るこう申しました。命は、

「じつはおれは天照大神の同じ腹の弟で、たった今、大空からおりて来たばかりだ」と、うちあけてお名まえをおっしゃいました。すると、足名椎も手名椎も、

「さようでございますか。これはこれはおそれおおい。それでは、おおせのままさしあげますでございます」と、両手について申しあげました。

命は、櫛名田媛をおもらいになると、たちまち媛をくしに化けさせておしまいになりました。そして、そのくしをすぐにご自分のびんの巻髪におさしになって、足名椎と手名椎に向かつておっしゃいました。

「おまえたちは、これからこめを cand、よい酒をどつきり作れ。それから、ここへぐりとかきをこしらえて、そのかきへ、八とこに門をあけよ。そしてその門のうちへ、一つずつさじきをこしらえて、そのさじきの上に、大おけを一つずつおいて、その中へ、二

人でこしらえたよい酒を一ぱい入れて待つておれ」とお言いつけになりました。

二人は、おおせのとおりに、すっかり準備をととのえて、待つておりました。そのうちに、そろそろ大じやの出て来る時間が近づいて来ました。

命は、それを聞いて、じつと待ちかまえていらつしやいますと、まもなく、二人が言つたように、大きな大きな八俣やまたの大蛇おろちが、大きなまっかな目をぎらぎら光らして、のそのそと出て来ました。

大じやは、目の前に八つの酒さかおけが並ならんでいるのを見ると、いきなり八つの頭を一つずつその中へつっこんで、そのたいそうなお酒を、がぶがぶがぶとまたたくまに飲み干ほしてしまいました。そうするとまもなくからだじゅうによいがまわつて、その場へ倒れたなり、ぐうぐう寝ねいつてしまいました。

須佐之男命すさのおのみこと

は、そつとその寢息ねいきをうかがつていらつしやいましたが、やがて、さあ今

だとお思ひになつて、十拳とつかの剣を引き抜ぬくが早いか、おのれ、おのれと、つづけさまにお切りつけになりました。そのうちに八つの尾おの中の、中ほどの尾をお切りつけになりますと、その尾の中に何か固かたい物があつて、剣の刃先はさきが、少しばかりほろりと欠けました。

命みことは、

「おや、変だな」とおぼしめして、そのところを切り裂いてご覧になりますと、中から、それはそれは刃の鋭い、りっぱな剣が出て来ました。命は、これはふしぎなものが手にはいったとお思ひになりました。その剣はのちに天照大神へご献上になりました。命はどうとう、大きな大きな大じやの胴体をずたずたに切り刻んでおしまいになりました。そして、

「足名椎、手名椎、来て見よ。このとおりだ」とお呼びになりました。

二人はがたがたふるえながら出て来ますと、そこいら一面は、きれぎれになった大じやの胴体から吹き出る血でいっぱいになっておりました。その血がどんどん肥の河へ流れこんで、河の水もまっかになつて落ちて行きました。

命はそれから、櫛名田媛とお二人で、そのまま出雲の国にお住まいになるおつもりで、御殿をおたてになるところを、そちちと、探してお歩きになりました。そして、しまいに、須加というところまでおいでになると、

「ああ、ここへ来たら、心持がせいせいしてきた。これはよいところだ」とおつしやつて、そこへ御殿をおたてになりました。そして、足名椎神をそのお宮の役人の頭になさいました。

命にはつぎつぎにお子さまお孫さまがどんどんおできになりました。その八代目のお孫さまのお子さまに、大^{おお}国^{くに}主^{ぬし}神^{のかみ}、またの名を大^{おお}穴^な牟^む遲^ち神^{のかみ}とおっしゃるりっぱな神さまがお生まれになりました。

むかでの室、へびの室

一

この大^{おお}国^{くに}主^{ぬし}神^{のかみ}には、八十^{やそ}神^{がみ}といつて、何十人というほどの、おおぜいのごきようだ
いがおありになりました。

その八十^{やそ}神^{がみ}たちは、因幡^{いなば}の国^{くに}に、八上^{やがみ}媛^{ひめ}という美しい女の人があると聞き、みんなて
んでんに、自分のお嫁^{よめ}にもらおうと思つて、一同でつれだつて、はるばる因幡へ出かけて
行きました。

みんなは、大^{おお}国^{くに}主^{ぬし}神^{のかみ}が、おとなしいかたなのをよいことにして、このかたをお供^{とも}の代わ
りに使つて、袋^{ふくろ}を背おわせてついで来させました。そして、因幡^{いなば}の氣多^{けた}という海岸まで来
ますと、そこに毛のないあか裸^{はだか}のうさぎが、地べたにころがって、苦しそうにからだじゅ
うで息をしておりました。

八十神^{やそがみ}たちはそれを見ると、

「おいうさぎよ。おまえからだに毛がはやしたければ、この海の潮^{しお}につかつて、高い山の上で風に吹かれて寝^ねておれ。そうすれば、すぐに毛がいつぱいはえるよ」とからかいました。うさぎはそれをほんとうにして、さっそく海につかつて、ずぶぬれになって、よちよちと山へのぼって、そのまま寝ころんでおりました。

するとその潮水^{しおみず}がかわくにつれて、からだじゅうの皮がひきつれて、びりびり裂^さけ破れました。うさぎはそのひりひりする、ひどい痛^{いた}みにたまりかねて、おんおん泣^なき伏^ふしておりました。そうすると、いちばんあとからお通りかかりになった、お供の大国主神がそれをご覧^{らん}になつて、

「おいおいうさぎさん、どうしてそんなに泣いているの」とやさしく聞いてくださいました。

うさぎは泣^なき泣^なき、

「私は、もと隠岐^{おき}の島におりましたうさぎでございですが、この本土へ渡^{わた}ろうと思いましたが、渡るてだてがございせんものですから、海の中のわにをだまして、いったい、おまえとわしとどっちがみうちが多いだろう、ひとつくらべてみようじゃないか、おまえは

いるだけのけん族をすっかりつれて来て、ここから、あの向こうのはての、けた気多のみさきまでずっと並ならんでみよ、そうすればおれがその背中せの上をつたわって、かぞえてやろうと申しました。

すると、わにはすっかりだまされまして、出てまいりますもまいりますも、それはそれは、うようよと、まっくろに集まってまいりました。そして、私の申しましたとおりに、この海ばたまでずらりと一列に並びました。

私は五十八と数をよみながら、その背なかの上をどんどん渡って、もう一足でこの海ばたへ上がろうといたしますときに、やあいまぬけのわにめ、うまくおれにだまされたアいとはやしたてますと、いちばんしまいにおりましたわにが、むつと怒おこって、いきなり私をつかまえて、このとおりにすっかりきものをひっぺがしてしまいました。

そこであすこのところへ伏ふしころんで泣ないておりましたら、さきほどここをお通りになりました八十神やそがみたちが、いいことを教えてやろう、これこれこうしてみろとおっしゃいましたので、そのとおりに潮水しおみずを浴びて風に吹かれておりますと、からだじゅうの皮がこわばって、こんなにびりびり裂さけてしまいました」

こう言つて、うさぎはおんおん泣きだしました。

おおくにぬしのかみ
大國主神は、話を聞いてかわいそうだとおぼしめして、

「それでは早くあすこの川口へ行つて、ま水でからだじゅうをよく洗つて、そこいらにあるかばの花をむしつて、それを下に敷いて寝ころんでいてごらん。そうすれば、ちゃんともとのとおりになおるから」

こう言つて、教えておやりになりました。うさぎはそれを聞くとたいそう喜んでお礼を申しました。そしてそのあとで言いました。

「あんなお人の悪い八十神^{やそがみ}たちは、けつして八上媛^{やがみひめ}をご自分のものになさることはできません。あなたは袋^{ふくろ}などをおしよいになつて、お供^{とも}についていらつしやいますけれど、八上媛はきつと、あなたのお嫁^{よめ}さまになると申します。みていてごらんなさいまし」と申しました。

まもなく、八十神たちは八上媛のところへ着きました。そして、代わる代わる、自分のお嫁になれなれと言いましたが、媛^{ひめ}はそれをいちいちはねつけて、

「いえいえ、いくらお言いになりました、あなたがたのご自由にはなりません。私は、あそこにいらつしやる大國主神のお嫁にしたいのです」と申しました。

八十神たちはそれを聞くとたいそう怒^{おこ}つて、みんなで大國主神を殺してしまおうという

相談をきめました。

みんなは、大国主神を、伯耆ほうきの国の手間てまの山という山の下へつれて行って、

「この山には赤いいのししがいる。これからわたしたちが山の上からそのいのししを追いおろすから、おまえは下にいてつかまえろ。へたをして遁にがしたらおまえを殺してしまうぞ」と、言いわたしました。そして急いで、山の上へかけあがって、さかんにたき火をこしらえて、その火の中で、いのししのようなかつこうをしている大きな石をまっかに焼いて、「そうら、つかまえろ」と言いながら、どしんと、転ころがし落おとしました。

ふもとで待ち受けていらした大国主神は、それをご覧になるなり、大急ぎでかけ寄つて、力まかせにお組みつきになったと思いますと、からだはたちまちそのあか焼けの石の膚はだにこびりついて、

「あッ」と言いになったきり、そのままただれ死にに死んでおしまいになりました。

二

大国主神の生みのおかあさまは、それをお聞きになると、たいそうお嘆なげきになって、泣な

き泣き大空へかけのぼつて、高天原たかまのはらにおいてになる、高皇産靈神たかみむすびのかみにお助けをお願いになりました。

すると、高皇産靈神たかみむすびのかみは、蚶貝媛きさがいひめ、蛤貝媛うむがいひめと名のついた、あかがいとはまぐりの二人の貝を、すぐに下界へおくだしになりました。

二人は大急ぎでおりて見ますと、大国主神おおくにぬしのかみはまっくらこげになって、山のすそに倒たおれていらつしやいました。あかがいはさつそく自分のからを削けずつて、それを焼いて黒い粉をこしらえました。はまぐりは急いで水を出して、その黒い粉をこねて、おちちのようにどろどろにして、二人で大国主神のからだじゅうへ塗りつけました。

そうすると大国主神は、それほどの大やけどもたちまちなおつて、もとのとおりの、きれいな若い神になつてお起きあがりになりました。そしてどんどん歩いてお家うちへ帰つていらつしやいました。

八十神やそがみたちは、それを見ると、びっくりして、もう一度みんなでひそひそ相談をはじめました。そしてまたじょうずに大国主神をだまして、こんどは別の山の中へつれこみました。そしてみんなで寄つてたかつて、ある大きなたち木を根もとから切りまげて、その切れ目へくさびをうちこんで、その間へ大国主神をはいらせました。そうしておいて、ふい

にポンとくさびを打ちはなして、はさみ殺しに殺してしまいました。

大国主神のおかあさまは、若い子の神がまたいなくなつたので、おどろいて方々さがしておまわりになりました。そして、しまいにまた殺されていらつしやるところをおみつけになると、太急ぎで木の幹を切り開いて、子の神のお死がいをお引き出しになりました。そしていっしょうけんめいに介抱かいほうして、ようようのことで再びお生きかえらせになりました。おかあさまは、

「もうおまえはうかうかこの土地においてはおかれない。どうぞこれからすぐに、須佐すさのお之男命のみことのおいでになる、根堅ねのかた国くにへ遁にげておくれ、そうすれば命みことが必ずいいようにはからつてくださるから」

こう言つて、若い子わかの神を、そのままそちらへ立つてお行かせになりました。

大国主神は、言われたとおりに、命のおいでになるところへお着きになりました。すると、命のお娘むすめこの須勢理媛すぜりひめがお取次をなすつて、

「お父上さま、きれいな神がいらつしやいました」とお言いになりました。

お父上の大神おおかみは、それをお聞きになると、急いでご自分で出てご覧になって、

「ああ、あれは、大国主という神だ」とおつしやいました。そして、さつそくお呼びいれ

になりました。

媛^{ひめ}は大国主神のことをほんとに美しいよい方だとすぐに大すきにお思ひになりました。大神には、第一それがお氣にめしませんでした。それで、ひとつこの若い神を困^{こま}らせてやろうとお思ひになつて、その晩、大国主神を、へびの室^{むろ}といつて、大へび小へびがいつばいたかつているきみの悪いおへやへお寝^ねかせになりました。

そうすると、やさしい須勢理媛^{すぜりひめ}は、たいそう氣の毒にお思ひになりました。それでご自分の、比礼^{ひれ}といつて、肩^{かた}かけのように使うきれを、そつと大国主神におわたしになつて、「もしへびがくいつきにまいりましたら、このきれを三度振^ふつて追いのけておしまいなさい」とおつしやいました。

まもなく、へびはみんなでかま首を立ててぞろぞろとむかつて来しました。大国主神^{おおくにぬしのかみ}はさつそく言われたとおりに、飾^{かざ}りのきれを三度お振^ふりになりました。するとふしぎにもへびはひとりでにひきかえして、そのままじつとかたまつたなり、一晚じゆう、なんにも害をしませんでした。若い神^{わか}はおかげで、氣らくにぐつすりおよつて、朝になると、あたりまえの顔をして、大神^{おおかみ}の前に出ていらつしやいました。

すると大神は、その晩はむかではちのいっぱいはいつているおへやへお寝^ねかせになり

ました。しかし媛^{ひめ}が、またこつそりと、ほかの首飾りのきれをわたしてくだすったので、大国主神は、その晩もそれでむかでやはちを追いはらって、また一晚じゅうらくらくとおやすみになりました。

大神は、大国主神がふた晩とも、平気で切りぬけてきたので、よし、それではこんどこそは見ておれと、心の中でおつしやりながら、かぶら矢^やと言って、矢じりに穴^{あな}があいていて、射^いるとびゅんびゅんと鳴る、こわい大きな矢を、草のぼうぼうとはえのびた、広い野原のまん中にお射こみになりました。そして、大国主神に向かって、

「さあ、今飛んだ矢を拾^{ひろ}って来い」とおおせつけになりました。

若い神は、正^{しょうじき}直^{ちき}にご命令を聞いて、すぐに草をかき分けてどんどんはいっておいでになりました。大神はそれを見すまして、ふいに、その野のまわりへぐるりと火をつけて、どんどんお焼きたてになりました。大国主神は、おやと思うまに、たちまち四方から火の手におかこまれになつて、すっかり遁げ場を失つておしまいになりました。それで、どうしたらいいかとびつくりして、とまどいをしていらつしやいますと、そこへ一ぴきのねずみが出て来まして、

「うちはほらほら、そとはすぶすぶ」と言いました。それは、中は、がらんどで、外は

すばまっている、という意味でした。

若い神は、すぐそのわけをおさとりになって、足の下を、とんときつく踏^ふんでごらんになりますと、そこは、ちゃんと下が大きな穴になっていたので、からだごとすっぽりとその中へ落ちこみました。それで、じつとそのままごまって隠れていらっしやいますと、やがてま近まで燃えて来た火の手は、その穴の上を走って、向こうへ遠のいてしまいました。

そのうちに、さっきのねずみが大神のお射になったかぶら矢をちゃんとさがし出して、口にくわえて持つて来てくれました。見るとその矢の羽根のところは、いつのまにかねずみの子供たちがかじつてすっかり食べてしまつておりました。

三

須勢理媛^{すぜりひめ}は、そんなことはちつともご存じないものですから、美しい若い神は、きつと焼け死んだものとお思いになつて、ひとりで嘆^{なげ}き悲しんでいらっしやいました。そして火が消えるとすぐに、急いでお巾^{とむち}いの道具を持つて、泣^なき泣^なきさがしにいらっしやいました。

お父上の大神の、こんどこそはだいじようぶ死んだらうとお思いになって、媛のあとからいらしつてごらんになりました。

すると^{おおくにぬしのかみ}大国主神は、もとのお姿の^{すがた}ままで、焼けあとのなかから出ていらつしやいました。そしてさつきのかぶら矢をちやんとお手におわたしになりました。

^{おおかみ}大神もこれには^{ないない}内々びつくりしておしまいになりました、しかたなくいっしよに御殿へおかえりになりました。そして大きな広間へつれておはいりになって、そこへごろりと横におなりになったと思うと、

「おい、おれの頭のしらみを取れ」と、いきなりおつしやいました。

大国主神はかしこまつて、その長い長いお髪^{ぐし}の毛をかき分けてご覧になりますと、その中には、しらみでなくて、たくさんむかだが、うようよたかっておりました。

すると、^{すぜりひめ}須勢理媛がそばへ来て、こつそりとむくの実と赤土とをわたしてお行きになりました。

大国主神は、そのむくの実を一粒^{ひとつぶ}ずつかみくだき、赤土を少しずつかみとかしては、いっしよにぷいぷいお吐^はき出しになりました。大神はそれをご覧になると、

「ほほう、むかでをいちいちかみつぶしているな。これは感心なやつだ」とお思いになり

ながら、安心して、すやすやと寝いっておしまいになりました。

大国主神は、この上ここにぐずぐずしていると、まだまだどんなめに会うかわからないとお思ひになつて、命がちようどぐうぐうおやすみになつてゐるのをさいわいに、その長いお髪をいく束にも分けて、それを四方のたる木というたる木へ一束ずつ縛りつけておいたうえ、五百人もかからねば動かせないような、大きな大きな大岩を、そつと戸口に立てかけて、中から出られないようにしておいて、大神の太刀と弓矢と、玉の飾りのついた貴い琴とをひつ抱えるなり、急いで須勢理媛を背なかにおぶつて、そつと御殿をお逃げ出しになりました。

するとまの悪いことに、抱えていらつしやる琴が、樹の幹にぶつかつて、じゃらじゃらじゃらんとたいそうなひびきを立てて鳴りました。

大神はその音におどろいて、むつくりとお立ちあがりになりました。すると、おぐしがたる木じゆうへ縛りつけてあつたのですから、大^{おおちから}力のある大神がふいにお立ちになるといつしよに、そのおへやはいきなりめりめりと倒れつぶれてしまいました。

大神は、

「おのれ、あの小僧ツ神め」と、それはそれはお怒りになつて、髪^{かみ}の毛をひと束ずつ、も

どかく解きはなしていらつしやるまに、こちらの大国主神はいつしようにけんめいにかかけつけて、すばやく遠くまで逃げのびていらつしやいました。

すると大神は、まもなくそのあとを追っかけて、とうとう黄泉比良坂よもつひらぎという坂の上までかけつけていらつしやいました。そしてそこから、はるかに大国主神を呼びかけて、大声をしぼってこうおつしやいました。

「おおいいおい、小僧ツ神。その太刀と弓矢をもつて、そちのきようだいの八十神やそがみどもを、山の下、川の中と、逃げるところへ追いつめ切り払い、そちが国の神の頭かしらになって、宇迦うかの山のふもとに御殿を立てて住め。わしのその娘むすめはおまえのお嫁よめにくれてやる。わかったか」とおどなりになりました。

大国主神おおくにぬしのかみはおおせのとおりに、改めていただいた、大神の太刀たと弓矢ゆみやを持って、八十神やそがみたちを討ちうにいらつしやいました。そして、みんながちりぢりに逃げまわるのを追っかけて、そこいらじゅうの坂の下や川の中へ、切り倒したお突き落として、とうとう一人ももらさず亡ほろぼしておしまいになりました。そして、国の神の頭かしらになって、宇迦うかの山の下に御殿ごてんをおたてになり、須勢理媛すぜりひめと二人で楽しくおくらしになりました。

四

そのうちに例の八上媛^{やがみひめ}は、大国主神をしたって、はるばるたずねて来ましたが、その大国主神には、もう須勢理媛^{すぜりひめ}というりっぱなお嫁さま^{よめ}ができていたので、しおしおと、またおうちへ帰って行きました。

大国主神はそれからなお順々に四方を平らげて、だんだんと国を広げておゆきになりました。そうしているうちに、ある日、出雲^{いずも}の国の御大崎^{みおさき}という海^{うみ}ばたにいつていらつしやいますと、はるか向こうの海の上から、一人の小さな小さな神が、お供の者たちといっしよに、どんどんこちらへ向かつて船をこぎよせて来ました。その乗っている船は、ががいもという、小さな草の実で、着ている着物は、ひとりむしの皮を丸はぎにしたものでした。

大国主神は、その神に向かつて、

「あなたはどなたですか」とおたずねになりました。しかし、その神は口を閉じたまま名まえをあかしてくれませんでした。大国主神はご自分のお供の神たちに聞いてご覧になりましたが、みんなその神がだれだかけんとうがつきませんでした。

するとそこへひきがえるがのこのこ出て来まして、

「あの神のことは久延彦くえびこならきつと存じておりますでしょう」と言いました。久延彦というのは山の田に立っているかかしでした。久延彦くえびこは足がきかないので、ひと足も歩くことはできませんでしたけれど、それでいて、この下界のことはなんでもすつかり知っております。

それで大国主神は急いでその久延彦くえびこにお聞きになりますと、

「ああ、あの神は太空中いになる神かみむすびのかみ産靈神のお子さまで、少名毘古那神すくなびこなのかみとおつしやる方でございます」と答えました。大国主神はそれでさつそく、神かみむすびのかみ産靈神にお伺いうかがになりますと、神も、

「あれはたしかにわしの子だ」とおつしやいました。そして改めて少名毘古那神に向かつて、

「おまえは大国主神ときようだいになつて二人で国々を開き固かためて行け」とおおせつけになりました。

大国主神は、そのお言葉に従つて、少名毘古那神すくなびこなのかみとお二人で、だんだんに国を作り開いておゆきになりました。ところが、少名毘古那神すくなびこなのかみは、あとになると、急に常世国とこよのくにという、

海の向こうの遠い国へ行っておしまいになりました。

おおくにぬしのかみ
大国主神はがっかりなすつて、私^{わたし}一人では、とても思いどおりに国を開いてゆくことはできない、だれか力を添^そえてくれる神はいないものかと言って、たいそうしおれていらつしやいました。

するとちやうどそのとき、一人の神さまが、海の上一面にきらきらと光を放^{はな}ちながら、こちらへ向かつて近づいていらつしやいました。それは須佐之男命^{すさのおのみこと}のお子の大年神^{おおとしのかみ}というお方でした。その神が、大国主神に向かつて、

「私をよく大事にまつておくれなら、いっしょになって国を作りかためてあげよう。おまえさん一人ではとてもできはしない」と、こう言つてくださいました。

「それではどんなふうにおまつり申せばいいのでございますか」とお聞きになりますと、
やまと みもろ
「大和の御諸の山の上にまつてくれればよい」とおっしゃいました。

ことば
大国主神はお言葉のとおり、そこへおまつりして、その神さまと二人でまただんだんに国を広げておゆきになりました。

きじのお使つかい

一

そのうちに大空の天照大神あまてらすのおおかみは、お子さまの天忍穗耳命あめのおしほみみのみことに向かって、

「下界に見える、あの豊葦原水穗国とよあしはらのみずほのくには、おまえが治めるべき国である」とおっしゃ

って、すぐにくだって行くように、お言いつけになりました。命みことはかしこまっておりますい

らっしゃいました。しかし天あめの浮橋うきはしの上までおいでになって、そこからお見おろしにな

りますと、下では勢いの強い神たちが、てんでんに暴れまわって、大さわぎをしているの

が見えました。命は急いでひきかえしていらしって、そのことを大神にお話しになりました。

それで大神と高皇産靈神たかみむすびのかみとは、さつそく天安河あめのやすのかわの河原に、おおぜいの神々をす

っかりお召めし集めになつて、

「あの水穂^{みづほ}国^{くに}は、私たちの子孫^{しそん}が治めるはずの国であるのに、今あすこには、悪強い神たちが勢い鋭く荒れまわっている。あの神たちを、おとなしくこちらの言うとおりにさせるには、いったいだれを使いによったものであろう」ところおつしやって、みんなにご相談をなさいました。

すると例のいちばん考え深い思^{おも}金^い神^{かね}が、みんなと会議をして、

「それには天^{あめ}菩^の比^ほ神^{のかみ}をおつかわしになりますがよろしゅうございましょう」と申しあげました。そこで大神は、さつそくその菩^ほ比^ひ神^{のかみ}をおくだしになりました。

ところが菩^ほ比^ひ神^{のかみ}は、下界へつくと、それなり大^{おお}国^{くに}主^{ぬし}神^{のかみ}の手下になつてしまつて、三年たつても、大空へはなんのご返事もいたしませんでした。

それで大神と高^{たか}皇^{みむすび}産^{のかみ}霊^の神^{のかみ}とは、またおおぜいの神々をお召^めしになつて、

「菩^ほ比^ひ神^{のかみ}がまだ帰つてこないが、こんどはだれをやったらよいであろう」と、おたずねになりました。

思^{おも}金^い神^{かね}は、

「それでは、天津国玉神^{あまつくにたまのかみ}の子の、天若日子^{あめのわかひこ}がよろしゅうございましょう」と、お答え申しました。

大神はその言葉に従つて、天若日子あめのわかひこにりつばな弓ゆみと矢やをお授けになつて、それを持たせて下界へおくだしになりました。

するとその若日子は天空にちやんとほんとうのお嫁よめがあるのに、下へおり着くといつしよに、大國主神おおくにぬしのかみの娘の下照比売むすめしたてるひめをまたお嫁にもらつたばかりか、ゆくゆくは水穗國みずほのくにを自分が取つてしまおうという腹はらで、とうとう八年たつても大神の方へはてんでご返事にも歸りませんでした。

大神と高皇產靈神たかみむすびのかみとは、また神々をお集めになつて、

「二度めにつかわした天若日子もまたとうとう歸つてこない。いったいどうしてこんなにいつまでも下界にいるのか、それを責めただしてこさせたいと思うが、だれをやつたものであろう」とお聞きになりました。

思金神おもいかねのかみは、

「それでは名鳴女ななきめというきじがよろしゆうございましょう」と申しあげました。大神たちお二人はそのきじをお召めしになつて、

「おまえはこれから行つて天若日子あめのわかひこを責めてこい。そちを水穗國みずほのくにへおくりだしになつたのは、この国の神どもを説き伏せるためではないか、それなのに、なぜ八年たつてもご

返事をしないのか、と言って、そのわけを聞きただしてこい」とお言いつけになりました。名鳴女は、はるばると大空からおりて、天若日子のうちの門のそばの、かえでの木の上にとまって、大神からおおせつかつたとおりをすっかり言いました。

すると若日子のところに使われている、天佐具売あめのさくめという女が、その言葉を聞いて、

「あすこに、いやな鳴き声を出す鳥がおります。早く射いておしまいなさいまし」と若日子にすすめました。

若日子は、

「ようし」と言いながら、かねて大神からいただいた来た弓ゆみと矢やを取り出して、いきなりそのきじを射殺してしまいました。すると、その当たった矢が名鳴女の胸むねを突き通つして、さかさまに大空の上まではねあがつて、天安河あめのやすのかわの河原かわらにおいでになる、天照大あまてらすおお神かみと高皇産靈神たかみむすびのかみとのおそばへ落ちました。

高皇産靈神たかみむすびのかみはその矢を手につつてご覧らんになりますと、矢の羽根に血がついておりました。

高皇産靈神は、

「この矢は天若日子あめのわかひこにつかわした矢だが」とおっしゃって、みんなの神々にお見せにな

つた後、

「もしこの矢が、若日子が悪い神たちを射たのが飛んで来たのなら、若日子にはあたるな。もし若日子が悪い心をいだいているなら、かれを射殺せよ」とおつしやりながら、さきほどの矢が通つて来た空の穴から、力いっぱいにお突きおろしになりました。

そうするとその矢は、若日子がちようど下界であおむきに寝ていた胸のまん中を、ぶすりと突き刺して一ぺんで殺してしまいました。

若日子のお嫁の下照比売は、びっくりして、大声をあげて泣きさわぎました。

その泣く声が風にはこぼれて、大空まで聞こえて来ますと、若日子の父の天津国玉神と、若日子のほんとうのお嫁と子供たちがそれを聞きつけて、びっくりして、下界へ

おりて来ました、そして泣き泣きそこへ喪屋といつて、死人を寝かせておく小屋をこしらえて、がんを供物をささげる役に、さぎをほうき持ちに、かわせみをお供えの魚取りにやとい、すずめをお供えのこめつきに呼び、きじを泣き役につれて来て、八日八晩の間、若日子の死がいのそばで楽器をならして、死んだ魂を慰めておりました。

そうしているところへ、大國主神の子で、下照比売のおあにいさまの高日子根神がお悔みに来ました。そうすると若日子の父と妻子たちは、

「おや」とびつくりして、その神の手足にとりすがりながら、

「まあまあおまえは生きていたのか」

「まあ、あなたは死なないでいてくださいましたか」と言つて、みんなでおんおんと嬉し泣きに泣きだしました。それは高日子根神の顔や姿が天若日子にそっくりだったので、みんなは一も二もなく若日子だとばかり思つてしまったのでした。

すると高日子根神は、

「何をふざけるのだ」とまっかになつて怒りだして、

「人がわざわざ悔みに来たのに、それをきたない死人などといつしよにするやつがどこにある」とどなりつけながら、長い剣を抜きはなすといつしよに、その喪屋をめちやめちやに切り倒し、足でぽんぽんけりちらかして、ぶんぶん怒つて行つてしまいました。

そのとき妹の下照比売は、あの美しい若い神は私のおあにいさまの、これこれこういう方だということを、歌に歌つて、誇りがおに若日子の父や妻子に知らせました。

あまてらすおおかみ

天照大神は、そんなわけで、また神々に向かつて、こんどというこんどはだれを遣^{つか}わしたらよいかとご相談をなさいました。

おもいかねのかみ
思金神

神とすべての神々は、

「それではいいよ、天安河^{あめのやすのかわ}の河上^{かわかみ}の、天の岩屋^{いわや}に

おられます尾羽張神^{おはばりのかみ}か、それ
でなければ、その神の子の建御雷神^{たけみかづちのかみ}か、二人のうちどちらかをお遣^{つか}しになるほかはご

ざいません。しかし尾羽張神は、天安河の水をせきあげて、道を通れないようにしてありますから、めつたな神では、ちよつと呼^よびにもまいれません。これはひとつ天迦久神^{あめのかくのかみ}をおさしむけになりまして、尾羽張神がなんと申しますか聞かせてご覧になるがようございましょう」と申しあげました。

大神はそれをお聞きになると、急いで天迦久神^{あめのかくのかみ}をおやりになつてお聞かせになりました。

そうすると尾羽張神^{おはばりのかみ}は、

「これは、わざわざもつたいない。その使いには私でもすぐにまいります、それよりも、こんなことにかけては、私の子の建御雷神^{たけみかづちのかみ}がいつとうお役に立ちますかと存じます」

こう言つて、さつそくその神を大神のご前ぜんへうかがわせました。

大神はその建御雷神に、天あめのとりふねのかみ鳥船神たけみかづちのかみという神をつけておくだしになりました。

二人の神はまもなく出雲国いずものくにの伊那佐いなさという浜にくだりつきました。そしてお互たがいに長い剣つるぎをずらりと抜き放はなして、それを海の上にあおむけに突き立てて、そのきつさきの上に

あぐらをかきながら、大國主神おおくにぬしのかみに談判をしました。

「わたしたちは天照大神あまてらすおおかみと高皇產靈神たかみむすびのかみのご命令で、わざわざお使いにまいったのである。大神はおまえが治めているこの葦原あしはらの中なかの國は、大神のお子さまのお治めになる

國だとおっしゃっている。そのおおせに従つて大神のお子さまにこの國をすっかりお譲ゆずりなさるか。それともいやだと言いか」と聞きますと、大國主神おおくにぬしのかみは、

「これは私からはなんともお答え申しかねます。私よりも、むすこの八重事代主神やえことしろぬしのかみが、とかくのご返事を申しあげますでございましょうが、あいにくたぐいま御大みおの崎さきへりよう

にまいっておりますので」とおっしゃいました。

建御雷神たけみかづちのかみはそれを聞くと、すぐに天鳥船神あめのとりふねのかみを御大みおの崎さきへやつて、事代主ことしろぬしのかみ神かみを呼よんで来させました。そして大國主神に言つたとおりのことを話しました。

すると事代主神は、父の神に向かつて、

「まことにもつたいないおおせです。お言葉ことばのとおり、この国は天空の神さまのお子さまにおあげなさいまし」と言いながら、自分の乗って帰った船を踏み傾ふかたむけて、おまじないの手打ちをしますと、その船はたちまち、青いいけがきに変わってしまいました。事代主神はそのいけがきの中へ急いでからだをかくしてしまいました。

たけみかずちのかみ
建御雷神は大国主神に向かつて、

「ただ今事代主神はあのとおりに申したが、このほかには、もうちがつた意見を持つている子はいないか」とたずねました。

大国主神は、

「私の子は事代主神のほかに、もう一人、たけみなかたのかみ建御名方神というものがおります。もうそれきりでございます」とお答えになりました。

そうしているところへ、ちょうどこのたけみなかたのかみ建御名方神が、千人もかからねば動かせないような大きな大きな大岩を両手でさしあげて出て来まして、

「やい、おれの国へ来て、そんなひそひそ話をしているのはだれだ。さあ来い、力くらべをしよう。まずおれがおまえの手をつかんでみよう」と言いながら、大岩を投げだしてそばへ来て、いきなりたけみかずちのかみ建御雷神の手をひつつかみますと、みかずちのかみ御雷神の手は、たちまち

氷の柱になつてしまいました。御名方神みなかたのかみがおやとおどろいているまに、その手はまたひよいと劍つるぎの刃になつてしまいました。

御名方神はすっかりこわくなつておずおずとしりごみをしかけますと、御雷神みかずちのかみは、「さあ、こんどはおれの番だ」と言いながら、御名方神の手くびをぐいとひつつかむが早いか、まるでえたてのあしをでも扱うように、たちまち一握にぎりに握りつぶして、ちぎれ取れた手先を、ぽうんと向こうへ投げつけました。

御名方神は、まっさおになつて、いっしょうけんめいに逃げにだしました。御雷神みかずちのかみは、「こら待て」と言いながら、どこまでもどんだんだん追っかけて行きました。そしてとうとう信濃しなのの諏訪湖すわこのそばで追いつめて、いきなり、一ひねりにひねり殺そうとしますと、建御名方神たけみなかたのかみはぶるぶるふるえながら、

「もういいいよおそれいました。どうぞ命ばかりはお助けくださいまし。私はこれなりこの信濃しなのより外へはひと足も踏み出しはいたしません。また、父や兄の申しあげましたとおりに、この葦原あしはらの中つ国は、大空の神のお子さまにさしあげますでございます」と、平たくなつておわびしました。

そこで建御雷神たけみかずちのかみはまた出雲いずもへ歸つて来て、大國主神おおくにぬしのかみに問いつめました。

「おまえの子は二人とも、大神のおおせにはそむかないと申したが、おまえもこれでいよいよ言うことはあるまいな、どうだ」と言いますと、大国主神は、

「私にはもう何も異存はございません。この中つ国はおおせのとおり、すっかり、大神のお子さまにさしあげます。その上でただ一つのおねがいは、どうぞ私の社やしろとして、大空の神の御殿ごてんのような、りっぱな、しっかりした御殿をたてていただきとうございます。そうしてくださいませば私は遠い世界から、いつまでも大神のご子孫にお仕え申します。じつは私の子は、ほかに、まだまだいくたりもありますが、しかし、事代主神ことしろぬしのかみさえ神妙にご奉公いたします上は、あとの子たちは一人も不平を申しはいたしません」

こう言つて、いさぎよくその場で死んでおしまいになりました。

それで建御雷神たけみかづちのかみは、さっそく、出雲国いずものくにの多芸志たぎしという浜にりっぱな大きなお社やしろをたてて、ちゃんと望みのとおりになりました。そして櫛八玉神くしやたまのかみという神を、お供そなえものを料理する料理人にしてつけ添そえました。

すると八玉神やたまのかみは、うになつて、海の底そこの土をくわえて来て、それで、いろんなお供えものをあげるかわらけをこしらえました。

それからある海草の茎くきで火切ひきり白うすと火切ひきり杵ぎねという物をこしらえて、それをすり合わせ

て火を切り出して、建御雷神たけみかづちのかみに向かつてこう言いました。

「私が切ったこの火で、そこいらが、大空の神の御殿のお料理場のようになり、すすでいっぱいになるまで欠かさず火をたき、かまどの下が地の底の岩のように固かたくなるまで絶えず火をもやして、りようしたちの取って来る大すずきをたくさんに料理して、大空の神の召しあがるようなりっぱなごちそうを、いつもいつもお供えいたします」と言いました。

建御雷神たけみかづちのかみはそれでひとまず安心して、大空へ帰りのぼりました。そして天照大あまてらすおお神かみと高皇産靈神たかみむすびのかみに、すっかりこのことを、くわしく奏そうじょう上じょういたしました。

笠沙のお宮

一

あまてらすおおかみ 天照大神と 高皇産靈神とは、あれほど乱れさわいでいた下界を、建御雷神たちが、ちゃんとこちらのものにして帰りましたので、さつそく天忍穗耳命をお召しになつて、

「葦原の中つ国はもはやすっかり平らいだ。おまえはこれからすぐにくだつて、さいしよ申しつけたように、あの国を治めてゆけ」とおっしゃいました。

命はおおせに従つて、すぐに出発の用意におとりかかりになりました。するとちやうどそのときに、お妃の秋津師毘売命が男のお子さまをお生みになりました。

忍穗耳命は大神のご前へおいでになつて、

「私たち二人に、世嗣の子供が生まれました。名前は日子番能邇邇芸命とつけました。中

つ国へくだしますには、この子がいちばんよいかと存じます」とおっしゃいました。

それで大神は、そのお孫さまの命みことが大きくおなりになりますと、改めておそばへ召して、

「下界に見えるあの中つ国は、おまえの治める国であるぞ」とおっしゃいました。命は、かしこまつて、

「それでは、これからすぐにくだつてまいります」とおっしゃって、急いでそのお手はずをなさいました。そしてまもなく、いよいよお立ちになろうとなさいますと、ちようど、大空のお通り道のある四つじに、だれだか一人の神が立ちはだかつて、まぶしい光をきらきらと放ちながら、上は高天原たかまのはらまでもあかあかと照らし、下は中つ国までいちめんに照り輝かがやかせておりました。

天照大神あまてらすおおかみと高皇産靈神たかみむすびのかみとはそれをご覧になりますと、急いで天宇受女命あめのうずめのみことをお

呼びになつて、

「そちは女でこそあれ、どんな荒あらくれた神に向かいあつても、びくともしない神だから、だれをもおいておまえを遣つかすのである。あの、道をふさいでいる神のところへ行つてそう言つて来い。大空の神のお子がおくだりになろうとするのに、そのお通り道を妨さまたげているおまえは何者かと、しっかり責せめただして来い」と言いつけになりました。

宇受女命うずめのみことはさつそくかけつけて、きびしくとがめたてました。すると、その神は言葉ことばをひくくして、

「私は下界の神で名は猿田彦神さるたひこのかみと申します者でございます。ただいまここまで出てまいりましたのは、太空の神のお子さまがまもなくおくだりになると承りましたので、及ばおよずながら私がお道筋すじをご案内申しあげたいと存じまして、お迎えにまいりましたのでございます」とお答え申しました。

大神はそれをお聞きになりました。そして天児屋根命あめのこやねのみこと、太玉命ふとだまのみこと、天宇受女命あめのうずめのみこと、石許理度売命いしこりどめのみこと、玉祖命たまのおやのみことの五人を、お孫さまの命のお供の頭かしらとしておつけ添えそになりました。そしておしまいにお別れになるときに、八尺の曲やさかま玉がたまという、それはそれはごりつばなお首飾くびかざりの玉と、八咫の鏡やたかがみという神々こうごうしいお鏡がたまと、かねて須佐之男命すさのおのみことが大じやの尾の中からお拾いになった、鋭い御剣みつるぎと、この三つとつとの貴いご自分のお持物を、お手ずから命にお授けになつて、

「この鏡は私の魂たましいだと思つて、これまで私に仕えてきたとおりに、たいせつに崇め祀あがまつるがよい」とおつしやいました。それから太空の神々の中でいちばんちえの深い思金神おもいかねのかみと、いちばんすぐれて力の強い手力男神たちからおのかみとをさらにおつけ添えそになつたうえ、

「思^{おも}金^{かね}神^{かみ}よ、そちはあの鏡^{かがみ}の祀^{まつ}りをひき受けて、よくとり行なえよ」とおおせつけになりました。

邇邇^{ににぎのみこと}芸命^{うねのみこと}はそれらの神々をはじめ、おおぜいのお供の神をひきつれて、いよいよ大空のお住まいをおたちになり、いく重^えともなくはるばるとわき重なっている、深い雲^{みね}の峰^{みね}をどんだんおし分けて、ご威光^{いこう}りりしくお進みになり、やがて天^{あめ}浮橋^{うきはし}をもおし渡^{わた}つて、どうどうと下界に向かつてくだつておいでになりました。そのまっさきには、天^{あめ}忍^{しの}日^ひ命^{のみこと}と、天津久米命^{あまつくめののみこと}という、よりすぐった二人の強い神さまが、大きな剣^{つるぎ}をつるし、大きな弓と強い矢とを負^おい抱^{かか}えて、勇ましくお先払いをして行きました。

命^{のみこと}たちはしまいに、日向^{ひゆうが}の国^{くに}の高千穂^{たかちほ}の山^{やま}の、串触^{くしふる}嶽^{だけ}という険^{けわ}しい峰^{みね}の上にお着きになりました。そしてさらに韓^{かん}国^{くに}嶽^{だけ}という峰^{みね}へおわたりになり、そこからだんだんと、ひら地^{ひらち}へおくだりになって、お住まいをお定めになる場所を探し探し、海の方へ向かつて出ておいでになりました。

そのうちに同じ日向^{ひゆうが}の笠沙^{かささ}の岬^{みさき}へお着きになりました。
邇邇^{ににぎのみこと}芸命^{うねのみこと}は、

「ここは朝日もま向きに射^さし、夕日もよく照つて、じつにすがすがしいよいところだ」と

おつしやつて、すっかりお氣にめました。それでとうとう最後にそこへお住まいになることにおきめになりました。そしてさつそく、地面のしつかりしたところへ、大きな広い御殿^{ごてん}をおたてになりました。

命^{みこと}は、それから例の宇受女命^{うずめのみこと}をお召^めしになつて、

「そちは、われわれの道案内をしてくれた、あの猿田彦^{さるたひこ}神とは、さいしよからの知り合いである。それでそちがつき添つて、あの神が帰るところまで送つて行つておくれ。それから、あの神のてがらを記念してやる印に、猿田彦^{さるたひこ}という名まえをおまえが継^ついで、あの神と二人のつもりで私^{わたし}に仕えよ」とおつしやいました。宇受女命^{うずめのみこと}はかしこまつて、猿田彦神を送つてまいりました。

猿田彦神は、その後、伊勢^{いせ}の阿坂^{あさか}というところに住んでいましたが、あるときりように出て、ひらふがいという大きな貝に手をはさまれ、とうとうそれなり海の中へ引き入れられて、おぼれ死にに死んでしまいました。

宇受女命^{うずめのみこと}はその神を送り届^{とど}けて帰つて来ますと、笠沙^{かささ}の海ばたへ、大小さまぎまの魚^{さかな}をすつかり追ひ集めて、

「おまえたちは大空の神のお子さまにお仕え申すか」と聞きました。そうすると、どの魚

も一ぴき残らず、

「はいはい、ちゃんとご奉公申しあげます」とご返事をしましたが、中でなまこがたった一人、お答えをしないで黙だまつておりました。

すると宇受女命うずめのみことは怒つて、

「こウれ、返事をしない口はその口か」と言いざま、手早く懐劍かいけんを抜きはなつて、そのなまこの口をぐいとひとえぐり切り裂さきました。ですからなまこの口はいまだに裂けております。

二

そのうちに邇邇ににぎのみこと芸命は、ある日、同じみさきできれいな若い女の人にお出会いになりました。

「おまえはだれの娘むすめか」とおたずねになりますと、その女の人は、
「私は大山津見神おおやまつみのかみの娘このはなの木色咲耶媛さくやひめと申す者でございます」とお答え申しました。

「そちにはきようだいがあるか」とかさねてお聞きになりますと、

「私には石長媛いわながひめと申します一人の姉がごいます」と申しました。命は、みこと

「わたしはおまえをお嫁よめにもraitたいと思うが、来るか」とお聞きになりました。すると
咲耶媛さくやひめは、

「それは私からはなんとも申しあげかねます。どうぞ父の 大山津見神おおやまつみのかみにおたずねくださいまし」と申しあげました。

命はさつそくお使いをお出しになつて、 大山津見神おおやまつみのかみに咲耶媛さくやひめをお嫁にもraitたいとお申しこみになりました。

大山津見神おおやまつみのかみはたいそう喜んで、すぐにその咲耶媛さくやひめに、姉の石長媛いわながひめをつき添そいにつけて、いろいろのお祝いの品をどつさり持たせてさしあげました。

命は非常にお喜びになつて、すぐ咲耶媛とご婚礼をなさいました。しかし姉の石長媛は、それはそれはひどい顔をした、みにくい女でしたので、同じ御殿ごてんでいっしょにおくらしになるのがおいやだものですから、そのまますぐに、父の神の方へお送りかえしになりました。

大山津見おおやまつみは恥はじ入つて、使いをもつてこう申しあげました。

「私が 木色咲耶媛このはなさくやひめに、わざわざ石長媛いわながひめをつき添そいにつけましたわけは、あなたが咲さくや

耶媛^{ひめ}をお嫁になすつて、その名のとおり、花が咲^さき誇^{ほこ}るように、いつまでもお榮えになりますばかりでなく、石長媛^{いわながひめ}を同じ御殿にお使いになりませば、あの子の名まえについておりますとおり、岩が雨に打たれ風にさらされても、ちつとも変わらずにがっしりしているのと同じように、あなたのおからだもいつまでもお変わりなくいらつしやいますようにと、それをお祈り申してつけ添えたのでございます。それなのに、咲耶媛^{さくやひめ}だけをおとめになつて、石長媛^{いわながひめ}をおかえしになつたうへは、あなたも、あなたのご子孫のつぎつぎのご寿^{じゆみょう}命^{めい}も、ちようど咲いた花がいくほどもなく散りはてるのと同じで、けつして永^{なが}くは続きませんよ」と、こんなことを申し送りました。

そのうちに咲耶媛^{さくやひめ}は、まもなくお子さまが生まれそうになりました。

それで命にそのことをお話しになりますと、命はあんまり早く生まれるので変だとおぼしめして、

「それはわしたち二人の子であろうか」とお聞きになりました。咲耶媛^{さくやひめ}は、そうおっしゃられて、

「どうしてこれが二人よりほかの者の子でございましょう。もし私たち二人の子でございませでしたら、けつして無事にお産はできますまい。ほんとうに二人の子である印^{しるし}には、

どんなことをして生みましても、必ず無事に生まれるに相違ございません」

こう言つてわざと出入口のないお家をこしらえて、その中におはいりになり、すきまというすきまをびつしり土で塗りつぶしておしまいになりました。そしていざお産をなさるといふときに、そのお家へ火をつけてお燃やしになりました。

しかしそんな乱暴な生み方をなすつても、お子さまは、ちゃんとご無事に三人もお生まれになりました。媛は、はじめ、うちじゆうに火が燃え広がって、どんどん炎をあげているときにお生まれになつた方を火照命というお名まえになさいました。それから、つぎつぎに、火須勢理命、火遠理命というお二方がお生まれになりました。火遠理命はまたの名を日子穗穗出見命ともお呼び申しました。

満潮^{みちしお}の玉、干潮^{ひしお}の玉

一

三人のごきようだいは、まもなく大きな若い人^{わか}におなりになりました。その中でおあにいさまの火照^{ほてり}命^{のみこと}は、海でりをなさるのがたいへんおじょうずで、いつもいろんな大きな魚^{さかな}や小さな魚をたくさんつってお帰りになりました。末の弟さまの火遠^{ほおりの}理^{のみこと}命^{のみこと}は、これはまた、山でりをなさるのがそれはそれはお得意で、しじゅういろんな鳥や獣をどつさりとお帰りになりました。

あるとき弟^{みこと}の命^{のみこと}は、おあにいさまに向かつて、

「ひとつためしに二人で道具を取りかえて、互^{たが}いに持ち場をかえて、りようをしてみようではありませんか」とおっしゃいました。

おあにいさまは、弟さまがそう言つて三度もお頼^{たの}みになつても、そのたんびにいやだと

言ってお聞き入れになりませんでした。しかし弟さまが、あんまりうるさくおっしゃるものですから、とうとうしまいに、いやいやながらお取りかえになりました。

弟さまは、さつそくつり道具を持って海ばたへお出かけになりました。しかし、つりのほうはまるでおかつてがちがうので、いくらおあせりになつても一ぴきもおつれになれないばかりか、しまいにはつり針はりを海の中へなくしておしまいになりました。

おあにいさまの命みことも、山のりようにはおなれにならないものですから、いつこうに獲物えものがないので、がっかりなすつて、弟さまに向かつて、

「わしのつり道具を返してくれ、海のりようも山のりようも、お互たがいになれたものでなくてはだめだ。さあこの弓矢を返そう」とおっしゃいました。

弟さまは、

「私はとんだことをいたしました。とうとう魚を一ぴきもつらないうちに、針を海へ落としてしまいました」とおっしゃいました。するとおあにいさまはたいへんにお怒りおこになつて、無理にもその針をさがして来いとおっしゃいました。弟さまはしかたなしに、身につるしておいになる長い剣つるぎを打ちこわして、それでつり針を五百本こしらえて、それを代わりにおさしあげになりました。

しかし、おあにいさまは、もとの針でなければいやだとおっしゃって、どうしてもお聞きいれになりませんでした。それで弟さまはまた千本の針をこしらえて、どうぞこれでかんばんしてくださいましと、お頼みになりましたが、おあにいさまは、どこまでも、もとの針でなければいやだとお言いはりになりました。

ですから弟さまは、困こまっておしまいになりました、ひとりで海ばたに立って、おいおい泣ないておいでになりました。そうすると、そこへ塩椎しおつちのかみ神かみという神が出てまいりました。

「もしもし、あなたは どうして そんなに泣いておいでになるのでございます」と聞いてくれしました。弟さまは、

「私わたしはおあにいさまのつり針を借りてりようをして、その針を海の中へなくしてしまったのです。だから代わりの針をたくさんこしらえて、それをお返しますと、おあにいさまは、どうしてももとの針を返せとおっしゃってお聞きにならないのです」

こう言つて、わけをお話しになりました。

塩椎しおつちのかみ神かみはそれを聞くと、たいそうお氣の毒に思いまして、

「それでは私がちゃんとよくしてさしあげましょう」と言いながら、大急ぎで、水あかが少しもはいらないように、かたく編こぶねんだ、かごの小船こぶねをこしらえて、その中へ火遠ほおりのみこと理命

をお乗せ申しました。

「それでは私が押し出しておあげ申しますから、そのままどん海のまんなかへ出ていらつしやいまし。そしてしばらくお行きになりますと、向こうの波の間によい道がついておりますから、それについてどこでも流れておいでになると、しまいにたくさんのおねが魚のうろこのように立ち並んだ、大きな大きなお宮へお着きになります。それは綿津見の神という海の神の御殿でございます。そのお宮の門のわきに井戸があります。井戸の上にかつらの木がおいかぶさっておりますから、その木の上にのぼって待っていらつしやいまし。そうすると海の神の娘が見つめて、ちゃんというようにとりはからつてくれますから」と言つて、力いっぱいその船を押し出してくれました。

二

命はそのままずんずん流れてお行きになりました。そうするとまったく塩椎神が言つたように、しばらくして大きな大きなお宮へお着きになりました。

命はさつそくその門のそばのかつらの木にのぼって待つておいでになりました。そうす

ると、まもなく、綿津見神わたつみのかみの娘の豊玉媛とよたまひめのおつきの女が、玉の器うつわを持って、かつらの木の下いどの井戸へ水をくみに来ました。

女は井戸の中を見ますと、人の姿がうつつていたので、ふしぎに思つて上を向いて見ますと、かつらの木にきれいな男の方がいらつしやいました。

命は、その女に水をくれとお願いになりました。女は急いで玉の器にくみ入れてさしあげました。

しかし命はその水をお飲みにならないで、首にかけておいでになる飾りの玉をおほどきになつて、それを口にふくんで、その玉の器の中へ吐き入れて、女にお渡しになりました。女は器を受け取つて、その玉をとり出そうとしますと、玉は器の底に固くくつついてしまつて、どんなにしても離れませんでした。それで、そのままうちの中へ持つてはいつて、

豊玉媛にその器ごとさし出しました。

豊玉媛とよたまひめは、その玉を見て、

「門口かどぐちにだれかおいでになつてゐるのか」と聞きました。

女は、

「井戸のそばのかつらの木の上にきれいな男の方がおいでになっています。それこそは、

こちらの王さまにもまさって、それはそれはけだかい貴い方とうとでございます。その方が水を

くれとおっしゃいましたから、すぐに、この器へくんでさしあげますと、水はおあがりにならないで、お首飾りの玉を中へお吐き入れになりました。そういたしますと、その玉が、

ご覧のように、どうしても底から離れないのでございます」と言いました。

媛ひめは命みことのお姿を見ますと、すぐにおとうさまの海の神のところへ行つて、

「門口にきれいな方がいらしています」と言いました。

海の神は、わざわざ自分で出て見て、

「おや、あのお方は、大空からおくだりになった、貴い神さまのお子さまだ」と言いなが

ら、急いでお宮へお通し申しました。そしてあしかの毛皮を八枚重まいかさねて敷しき、その上へま

た絹たなみの畳たたみを八枚重まいかさねて、それへすわっていただいて、いろいろごちそうをどっさり並ならべて、

それはそれはいいねいにおもてなしをしました。そして豊玉媛よめをお嫁よめにさしあげました。

それで命みことはそのまま媛ひめといっしょにそこにお住まいになりました。そのうちに、いつの

まにか三年という月日がたちました。

すると命はある晩、ふと例の針はりのことを思い出しになって、深いため息をなさいまし

た。

とよたまひめ
豊玉媛はあくる朝、そつと父の神のそばへ行つて、

「おとうさま、命みことはこのお宮に三年もお住まいになつていても、これまでただの一度もめいつたお顔をなさつたことがないのに、ゆうべにかぎつて深いため息をなさいました。なにか急にご心配なことがおできになつたのでしょうか」と言いました。

海の神はそれを聞くと、あとで命に向かつて、

「さきほど娘むすめが申しますには、あなたは三年の間こんなところにおいでになりましたも、ふだんはただの一度も、ものをお嘆なげきになつたことがないのに、ゆうべはじめてため息をなさいましたと申します。何かわけがおりになるのでございますか。いったいいちばんはじめ、どうしてこの海の中なぞへおいでになつたのでございますか」こう言つておたずね申しました。

命はこれこれこういうわけで、つり針はりをさがしに來たのですとおつしやいました。

海の神はそれを聞くと、すぐに海じゆうの大きな魚さかなや小さな魚を一ぴき残さず呼び集めて、

「この中にだれか命の針をお取り申した者はいないか」と聞きました。すると魚たちは、「こないだから雌めだいがのどにとげを立てて物が食べられないで困こまっておりますが、では

きつとお話のつり針をのんでいるに相違ございません」と言いました。

海の神はさつそくそのたいを呼んで、のどの中をさぐって見ますと、なるほど、大きなつり針を一本のんでおりました。

海の神はそれを取り出して、きれいに洗って命にさしあげました。すると、それがまさしく命のおなくしになったあの針でした。海の神は、

「それではお帰りになつて、おあにいさまにお返しになりますときには、

いやなつり針、

わるいつり針、

ばかなつり針。

とおつしやりながら、必ずうしろ向きになつてお渡しなさいまし。それから、こんどからはおあにいさまが高いところへ田をお作りになりましたら、あなたは低いところへお作りなさいまし。そのあべこべに、おあにいさまが低いところへお作りになりましたら、あなたは高いところへお作りになることです。すべて世の中の水という水は私が自由に出し入

れするのでございます。おあにいさまは針のことです。いぶんあなたをおいじめになりましたから、これからはおあにいさまの田へはちつとも水をあげないで、あなたの田にばかりどつさり入れておあげ申します。ですから、おあにいさまは三年のうちに必ず貧乏^{びんぼう}になつておしまいになります。そうすると、きつとあなたをねたんで殺しにおいでになるに相違^{ちがひ}ございません。そのときには、この満潮^{みちしほ}の玉を取り出して、おぼらしておあげなさい。この中から水がいくらでもわいて出ます。しかし、おあにいさまが助けてくれとおっしゃられておわびをなさるなら、こちらのこの干潮^{ひしほ}の玉を出して、水をひかせておあげなさいまし。ともかく、そうして少しこらしめておあげになるがようございます」

こう言つて、そのたいせつな二つの玉を命^{みこと}にさしあげました。それからけらいのわにをすつかり呼び集^よめて、

「これから大空の神のお子さまが陸の世界へお帰りになるのだが、おまえたちはいく日あつたら命をお送りして帰つてくるか」と聞きました。

わにたちは、お互いにかのだの大きさにつれてそれぞれかんじようして、めいめいにお返事^{しやく}をしました。その中で六尺^{しやく}ばかりある大わには、

「私は一日あれば行つてまいります」と言いました。海の神は、

「それではおまえお送り申してくれ。しかし海を渡るときに、けっしてこわい思いをおさせ申してはならないぞ」とよく言い聞かせた上、その首のところへ命をお乗せ申して、はるばるとお送り申して行かせました。すると、わにはうけあつたとおりに、一日のうちに命をもとの浜までおつれ申しました。

命はご自分のつるしておいでになる小さな刀をおほどきになって、それをごほうびにわにの首へくくりつけておかえしになりました。

命はそれからすぐに、おあにいさまのところへいらしって、海の神が教えてくれたとおりに、

いやなつり針^{はり}、

悪いつり針、

ばかなつり針。

と言いいい、例のつり針を、うしろ向きになってお返しになりました。それから田を作るにも海の神が言つたとおりになさいました。

そうすると、命の田からは、毎年どんどんおこめが取れるのに、おあにいさまの田には、水がちつとも来ないものですから、おあにいさまは、三年の間にすっかり貧乏^{びんぼう}になっておしまいになりました。

するとおあにいさまは、あんのじよう、命のことをねたんで、いくどとなく殺しにおいでになりました。命はそのときにはさつそく満潮^{みちしほ}の玉を出して、大水をわかせてお防ぎになりました。おあにいさまは、たんびにおぼれそうになって、助けてくれ、助けてくれとおっしゃいました。命はそのときには干潮^{ひしほ}の玉を出してたちまち水をおひかせになりました。そんなわけで、おあにいさまも、しまいには弟さまの命にはとてもかなわないとお思いになり、とうとう頭をさげて、

「どうかこれまでのことは許しておくれ。私はこれからしようがい、夜昼おまえのうちの番をして、おまえに奉公するから」と、かたくお誓い^{ちか}になりました。

ですから、このおあにいさまの命のご子孫は、後の代^よまで、命が水におぼれかけてお苦しみになったときの身振り^{みぶ}をまねた、さまざまおかしな踊り^{おど}を踊るのが、代々きまりになっております。

三

そのうちに、火遠理命ほのりのみことが海のお宮へ残しておかえりになった、お嫁さまよめの豊玉媛とよたまひめが、ある日ふいに海の中から出ていらしって、

「私はかねて身重みおもになっておりましたが、もうお産をいたしますときがまいりました。しかし大空の神さまのお子さまを海の中へお生み申してはおそれ多いと存じまして、はるばるこちらまで出てまいりました」とおっしゃいました。

それで命みことは急いで、うぶやという、お産をするおうちを、海ばたへおたてになりました。その屋根はかやの代わりに、うの羽根を集めておふかせになりました。

するとその屋根がまだできあがらないうちに、豊玉媛は、もう産けがおつきになって、急いでそのうちへおはいりになりました。

そのとき媛ひめは命に向かつて、

「すべての人がお産をいたしますには、みんな自分の国のならわしがありまして、それぞれへんなかつこうをして生みますものでございます。それですから、どうぞ私がお産をいたしますところも、けつしてご覧らんにならないでくださいましな」と、かたくお願いしてお

きました。命は媛がわざわざそんなことをおつしやるので、かえって変だとおぼしめして、あとでそつと行つてのぞいてご覧になりました。

そうすると、たつた今まで美しい女であつた豊玉媛が、いつのまにか八ひろもあるような恐ろしい大わになつて、うんうんうなりながらはいまわつていました。命はびつくりして、どんどん逃げ出しておしまいになりました。

豊玉媛はそれを感じいて、恥ずかしくて恥ずかしくてたまらないものですから、お子さまをお生み申すと、命に向かつて、

「私はこれから、しじゅう海を往来して、お目にかかりにまいりますつもりでおりましたが、あんな、私の姿をご覧になりましたので、ほんとうにお恥ずかしくて、もうこれきりおうかがいできません」こう言つて、そのお子さまをあとにお残し申したまま、海の中の通り道をすつかりふさいでしまつて、どんどん海の底へ歸つておしまいになりました。そしてそれなりとうとう一生、二度と出ていらつしやいませんでした。

お二人の中のお子さまは、うの羽根の屋根がふきおえないうちにお生まれになつたので、それから取つて、うがやふきあえずのみこと鵜茅草葺不合命よとお呼びになりました。

ひめ媛は海のお宮にいらしても、このお子さまのことが心配でならないものですから、お

妹さまの玉依媛たまよりひめをこちらへよこして、その方の手で育てておもらいになりました。媛は夫の命が自分のひどい姿をおのぞきになったことは、いつまでたっても恨めうらしくてたまりませんでしたが、それでも命のことはやっぱり恋しくおしたわしくて、かたときもお忘れわすになることができませんでした。それで玉依媛にことづけて、

赤玉は、

緒おさえ光れど、

白しら玉たまの、

君きみが装よそおし、

貴とうとくありけり。

という歌をお送りになりました。これは、

「赤い玉はたいへんにりっぱなもので、それをひもに通して飾かぎりにすると、そのひもまで光って見えるくらいですが、その赤玉にもまさった、白玉のようにうるわしいあなたの貴すがたいお姿を、私はしじゅうお慕したわしく思っております」という意味でした。

命みことはたいそうあわれにおぼしめして、私もおまえのことはけっして忘わすれはしないという意味の、お情けのこもったお歌をお返しになりました。

命は高千穂たかちほの宮というお宮に、とうとう五百八十のお年までお住まいになりました。

やたがらす
八咫鳥

一

うがやふきあえずのみこと
鵜茅草葺不合命は、ご成人の後、玉依媛たまよりひめを改めてお妃きさきにお立てになって、四人の男のお子をおもうけになりました。

この四人のごきようだいのうち、二番めの稲氷命いなひのみことは、海をこえてはるばると、常とこよ世国のくにという遠い国へお渡りになりました。ついで三番めの若御毛沼命わかみけぬのみことも、お母上のお国の、海の国へ行っておしまいになり、いちばん末の弟さまの神倭伊波礼毘古命かみやまといわれひこのみことが、高千穂たかちほの宮にいらして、天下をお治めになりました。しかし、日向ひゅうがはたいへんにへんまつりごとで、政をお聞きすのにひどくご不便でしたので、命みことはいちばん上のおあにいさまの五い瀬命つせのみこととお二人でご相談のうえ、

「これは、もつと東の方へ移ったほうがよいであろう」とおっしゃって、軍勢を残らずめ

しつれて、まず筑前国ちくぜんのくにに向かつておたちになりました。その途中、豊前ぶぜんの宇佐うさにお着きになりますと、その土地の宇佐都比古うさつひこ、宇佐都比売うさつひめという二人の者が、御殿ごてんをつくつてお迎え申し、てあつくおもてなしをしました。

命はそこから筑前ちくぜんへおはいりになりました。そして岡田宮おかだのみやというお宮に一年の間ご滞在になった後、さらに安芸あきの国へおのぼりになって、多家理宮たけりのみやに七年間おとどまりになり、ついで備前びぜんへお進みになって、八年の間高島宮たかしまのみやにお住まいになりました。そしてそこからお船をつらねて、波の上を東に向かつておのぼりになりました。

そのうちに速吸門はやすいのかどというところまでおいでになりますと、向こうから一人の者が、かめの背なかに乗つて、魚さかなをつりながら出て来まして、命みことのお船を見るなり、両手をあげてしきりに手招きてまねをいたしました。命はその者を呼びよせて、

「おまえは何者か」とお聞きになりますと、

「私はこの地方の神で宇豆彦うずひこと申します」とお答えいたしました。

「そちはそのへんの海路を存じているか」とおたずねになりますと、

「よく存じております」と申しました。

「それではおれのお供につくか」とおっしゃいますと、

「かしこまりました。ご奉公申しあげます」とお答え申しましたので、命はすぐにおそばの者に命じて、さおをさし出させてお船へ引きあげておやりになりました。

みんなは、そこから、なお東へ東へとかじを取って、やがて摂津の浪速の海を乗り切つて、河内国の、青雲の白肩津という浜へ着きました。

するとそこには、大和の鳥見というところの長髓彦という者が、兵をひきつれて待ちかまえておりました。命は、いざ船からおおりになろうとしますと、かれらが急にどつと矢を射向けて来ましたので、お船の中から盾を取り出して、ひゆうひゆう飛んで来る矢の中をくぐりながらご上陸なさいました。そしてすぐにどどん戦をなさいました。

そのうちに五瀬命が、長髓彦の鋭い矢のために大きずをお受けになりました。命はその傷をおおさえになりながら、

「おれたちは日の神の子孫でありながら、お日さまの方に向かって攻めかかったのがまちがいである。だからかれらの矢にあたつたのだ。これから東の方へ遠まわりをして、お日さまを背なかに受けて戦おう」とおっしゃって、みんなをめし集めて、弟さまの命といっしよにもう一度お船におめしになり、大急ぎで海のまん中へお出ましになりました。

その途中で、命はお手についた傷の血をお洗いになりました。

しかしそこから南の方へまわって、紀伊^{きのくに}国の男^おの水門^{みなと}までおいでになりますと、お傷^{いた}の痛み^{いた}がいよいよ激しくなりました。命^{いのち}は、

「ああ、くやしい。かれらから負わされた手傷で死ぬるのか」と残念そうなお声でお叫びになりながら、とうとうそれなりおかくれになりました。

二

神倭伊波礼毘古命^{かみやまといわれひこのみこと}は、そこからぐるりとおまわりになり、同じ紀伊^{きの}の熊野^{くまの}という村にお着きになりました。するとふいに大きな大ぐまが現われて、あつというまにまたすぐ消えさつてしまいました。ところが、命^{みこと}もお供の軍勢もこの大ぐまの毒氣にあたつて、たちまちぐらぐらと目がくらみ、一人のこらず、その場に氣絶してしまいました。

そうすると、そこへ熊野^{くまの}の高倉下^{たかくらじ}という者が、一ふりの太刀^{たち}を持って出て来まして、伏^ふし倒^{たお}れておいでになる伊波礼毘古命^{いわれひこのみこと}に、その太刀をさしだしました。命はそれといつしよに、ふと正氣^{しょうき}におかえりになつて、

「おや、おれはずいぶん長寝^{ながね}をしたね」とおつしやりながら、高倉下^{たかくらじ}がささげた太刀^{たち}を

お受けとりになりますと、その太刀に備わっている威光でもって、さっきのくまをさし向けた熊野の山の荒くれた悪神わるがみどもは、ひとりでにばたばたと倒れて死にました。それといつしよに命の軍勢は、まわった毒から一度にさめて、むくむくと元氣よく起きあがりしました。

命はふしぎにおぼしめして、高倉下たかくらじに向かつて、この貴い剣とうとつるぎのいわれをおたずねになりました。

高倉下たかくらじは、うやうやしく、

「実はゆうべふと夢を見ましたのでございます。その夢の中で、天照大神あまてらすおおかみと高皇産靈神たかみむすびのかみのお二方ふたかたが、建御雷神たけみかづちのかみをおめしになりまして、葦原中国あしはらのなかつくには、今しきりに乱れ騒みださわいでいる。われわれの子孫たちはそれを平らげようとして、悪神わるがみどもから苦しめられている。あの国は、いちばんはじめそちが従えて来た国だから、おまえもう一度くだって平らげてまいれとおっしゃいますと、建御雷神たけみかづちのかみは、それならば、私がまいりませんでも、ここにこの前あすこを平らげてまいりましたときの太刀たちがございますから、この太刀をくだしましょう。それには、高倉下たかくらじの倉くらのむねを突きやぶって落としてしましうと、こうお答えになりました。

それからその建御雷神は、私に向かつて、おまえの倉のむねを突きとおしてこの刀を落とすから、あすの朝すぐに、大空の神のご子孫にさしあげよとお教えくださいました。目がさめまして、倉へまいって見ますと、おおせのとおりに、ちゃんとただいまのその太刀がございましたので、急いでさしあげにまいりましたのでございます」

こう言つて、わけをお話し申しました。

そのうちに、高皇産靈神は、雲の上から伊波礼毘古命に向かつて、

「大空の神のお子よ、ここから奥へはけつてはいつてはいけませんよ。この向こうには荒らくれた神たちがどっさりいます。今これから私が八咫鳥をさしくだすから、そのからすの飛んで行く方へついておいでなさい」とおさとしになりました。

まもなくおおせのとおり、そのからすがおりて来ました。命はそのからすがつれて行くとおりに、あとについてお進みになりますと、やがて大和の吉野河の河口へお着きになりました。そうするとそこにやなをかけて魚をとっているものがおりました。

「おまえはだれだ」とおたずねになりますと、

「私はこの国の神で、名は贄持の子と申します」とお答え申しました。

それから、なお進んでおいでになりますと、今度はおしりにしっぽのついている人間が、

井戸いどの中から出て来ました。そしてその井戸がぴかぴか光りました。

「おまえは何者か」とおたずねになりますと、

「私はこの国の神で井冰いひか鹿と申すものでございます」とお答えいたしました。

命みことはそれらの者を、いちいちお供ともにおつれになつて、そこから山の中を分けていらつしやいますと、またしつぽのある人にお会いになりました。この者は岩をおし分けて出て来たのでした。

「おまえはだれか」とお聞きになりますと、

「わたしはこの国の神で、名は石押いわおし分の子と申します、ただいま、大空の神のご子孫がおいでになると承りまして、お供に加えていただきにありがとうございましたのでございます」と申しあげました。命は、そこから、いよいよ険けわしい深い山を踏ふみ分けて、大和やまとの宇陀うたというところへおでましになりました。

この宇陀には、兄宇迦斯えうかし、弟宇迦斯おとうかしというきょうだいの荒あらくれ者がおりました。命はその二人のところへ八咫鳥やたがらすを使いにお出しになつて、

「今、大空の神のご子孫がおこしになつた。おまえたちはご奉公申しあげるか」とお聞かせになりました。

すると、兄の兄宇迦斯はいきなりかぶら矢を射かけて、お使いのからすを追いかえしてしまいました。兄宇迦斯は命がおいでになるのを待ち受けて討ってかかろうと思ひまして、急いで兵たいを集めにかかりましたが、とうとう人数がそろわなかったものですから、いつそのこと、命をだまし討ちにしようと思ひまして、うわべではご奉公申しあげますと言ひこしらえて、命をお迎え申すために、大きな御殿をたてました。そして、その中に、つり天じようをしかけて、待ち受けておりました。

すると弟の弟宇迦斯が、こつそりと命のところへ出て来まして、命を伏し拝みながら、「私の兄の兄宇迦斯は、あなたさまを攻め亡ぼそうとたくらみまして、兵を集めにかかりましたが、思うように集まらないものですから、とうとう御殿の中につり天じようをこしらえて待ち受けております。それで急いでおしらせ申しにあげました」と申しました。そこで道臣命と大久米命の二人の大將が、兄宇迦斯を呼びよせて、

「こりや兄宇迦斯、おのれの作つた御殿にはおのれがまずはいって、こちらの命をおもてなしする、そのもてなしのしかたを見せろ」とどなりつけながら、太刀のえをつかみ、矢をつがえて、無理やりにその御殿の中へ追ひこみました。兄宇迦斯は追ひまくられて逃げこむはずみに、自分のしかけたつり天じようがどしんと落ちて、たちまち押し殺されてし

まいしました。

二人の大將は、その死がいを引き出して、ずたずたに切り刻んで投げ捨てました。

命は弟宇迦斯が、献上したごちそうを、けらい一同におくだしになって、お祝いの大宴会をお開きになりました。命はそのとき、

「宇陀の城にしぎなわをかけて待つていたら、しぎはかからないうで大きくじらがかかり、わなはめちやめちやにこわれた。ははは、おかしや」という意味を、歌にお歌いになって、兄宇迦斯のはかりごとの破れたことを、喜びお笑いになりました。

それからまたその宇陀をおたちになつて、忍坂というところにお着きになりますと、そこには八十建といつて、穴の中に住んでいる、しつぽのはえた、おおぜいの荒くれた悪者どもが、命の軍勢を討ち破ろうとして、大きな岩屋の中に待ち受けておりました。

命はごちそうをして、その悪者たちをお呼びになりました。そして前もつて、相手の一人に一人ずつ、お給仕につくものをきめておき、その一人一人に太刀を隠しもたせて、合い図の歌を聞いたら一度に切つてかかれと言ひ含めておおきになりました。

みんなは、命が、

「さあ、今だ、うて」とお歌いになると、たちまち一度に太刀を抜き放つて、建どもをひ

とり残さず切り殺してしまいました。

しかし命は、それらの賊たちよりも、もつともつとにくいのはおあにいさまの命のお命みことを奪うばった、あの鳥見とみの長髓彦ながすねひこでした。命はかれらに對しては、ちようどしやうがを食べたあと、口がひりひりするように、いつまでも恨みうらをお忘れわすになることができませんでした。命は、畑のにらを、根も芽めもいっしよに引き抜くように、かれらを根こそぎに討ち亡ぼしてしまいたい、海の中の大きな石に、きしやごがまつくろに取りついているように、かれらをひしひしと取りまいて、一人残さず討ち取らなければおかまいという意味を、勇ましい歌にしてお歌いになりました。そして、とうとうかれらを攻め亡ぼしておしまになりました。

そのとき、長髓彦ながすねひこの方に、やはり大空の神のお血すじの、邇邇速日命にぎはやひのみことという神がいました。

その神が命みことのほうへまいって、

「私は大空の神の御子がおいでになったと承りまして、ご奉公に出ましてございます」と申しあげました。そして大空の神の血筋ちすじだという印しるしの宝物を、命に獻けんじよう上じようしました。

命はそれから兄師木えしき、弟師木おとしきというきようだいのもををご征伐になりました。その戦いくさで、

命の軍勢は伊那佐いなさという山の林の中に盾を並べて戦っているうちに、途中でひょうろうがなくなつて、少し弱りかけて来ました。命はそのとき、

「おお、私も飢え疲れた。このあたりのうを使う者たちよ。早くたべ物を持って助けに来い」という意味のお歌をお歌いになりました。

命はなおひきつづいて、そのほかさまさまの荒びる神どもをなつけて従わせ、刃向かうものをどんどん攻め亡ぼして、とうとう天下をお平らげになりました。それでいよいよ大和の橿原宮で、われわれの一番最初の天皇のお位におつきになりました。神武天皇とはすなわち、この貴い伊波礼毘古命のことを申しあげるのです。

三

天皇は、はじめ日向においでになりますときに、阿比良媛という方をお妃に召して、多芸志耳命と、もう一方男のお子をおもうけになつていましたが、お位におつきになつてから、改めて、皇后としてお立てになる、美しい方をおもとめになりました。

すると大久米命が、

「それには、やはり、大空の神のお血をお分けになった、伊須氣依媛いすけよりひめと申す美しい方がおいでになります。これは三輪みわの社やしろの大物主おおものぬしのかみ神が、勢夜陀多良媛せやだたらひめという女の方のおそばへ、朱塗しゆぬりの矢に化けておいでになり、媛ひめがその矢を持っておへやにおはいりになりますと、矢はたちまちものりっぱな男の神さまになって、媛のお婿むこさまにおなりになりました。伊須氣依媛いすけよりひめはそのお二人の中にお生まれになったお媛さまでございます」と申しあげました。

そこで天皇は、大久米命をおつれになって、その伊須氣依媛いすけよりひめを見においでになりました。すると同じ大和やまとの、高佐士野たかさしのという野で、七人の若い女の方が野遊びをしているのにお出会いになりました。するとちょうど伊須氣依媛いすけよりひめがその七人の中にいらつしやいました。

大久米命はそれを見つけて、天皇に、このなかのどの方をおもらいになりますかということ、歌に歌ってお聞き申しますと、天皇はいちばん前にいる方を伊須氣依媛いすけよりひめだとすぐにおさとりになりました、

「あのいちばん前にいる人をもらおう」と、やはり歌でお答えになりました。大久米命は、その方のおそばへ行つて、天皇のおおせをお伝えしようとしますと、媛は、大久米命が大きな目をぎろぎろさせながら来たので、変だとおぼしめして、

あめ、つつ、

ちどり、ましとと、

など裂ける利目。^{とめ}

とお歌いになりました。それは、

「あめという鳥、つつという鳥、ましととという鳥やちどりの目のように、どうしてあんな大きな、鋭い目を光らせているのであろう」という意味でした。

大久米命は、すぐに、

「それはあなたを見つげ出そうとして、さがしていた目でございます」と歌いました。

媛^{ひめ}のおうちは、狹井川^{さいがわ}という川のそばにありました。その川原^{かわら}には、やまゆりがどつ

さり咲いていました。天皇は、媛のおうちへいらして、ひと晩とまってお帰りになりました。

した。媛はまもなく宮中におあがりになって、貴い皇后^{とうと}におなりになりました。お二人の

中には、日子八井命^{ひこやいのみこと}、神八井耳命^{かみやいのみこと}、神沼河耳命^{かぬかわのみこと}と申す三人の男のお子がお生

まれになりました。

天皇は、後におん年百三十七でおかくれになりました。おなきがらは畝火山^{うねびやま}にお葬り^{ほうむ}申しあげました。

するとまもなく、さきに日向^{ひゅうが}でお生まれになった多芸志耳命^{たぎしみみのみこと}が、お腹^{はら}ちがいの弟さま^{ひこやいのみこと}の日子八井命^{ひこやいのみこと}たち三人をお殺し申して、自分ひとりがかつてなことをしようとお企て^{くわだ}になりました。

お母上の皇后はそのはかりごとをお見ぬきになつて、

「畝火山^{うねびやま}に昼はただの雲らしく、静かに雲がかかっているけれど、夕方になれば荒れ^あが来て、ひどい風が吹き出すらしい。木の葉がそのさきぶれのように、ざわざわさいでいる」という意味の歌をお歌いになり、多芸志耳命^{たぎしみみのみこと}が、いまに、おまえたちを殺しにかかるぞということを、それとなくおさとしになりました。

三人のお子たちは、それを聞いてびつくりなさいまして、それでは、こつちから先に命^{みこと}を殺してしまおうとご相談なさいました。

そのときいちばん下の神沼河耳命^{かんぬかわみみのみこと}は、中のおあにいさまの神八井耳命^{かんやいみみのみこと}に向かつて、

「では、あなた、命^{みこと}のところへ押し^おいって、お殺しなさい」とおっしゃいました。

それで 神八井耳命^{かんやいみみのみこと}は刀^{かたな}を持つてお出かけになりましたが、いざとなるとぶるぶるふるえ出して、どうしても手出しをなさることができませんでした。そこで弟さまの神沼^{かんぬか}河耳命^{わみみのみこと}がその刀をとつてお進みになり、ひといきに命を殺しておしまいになりました。

神八井耳命^{かんやいみみのみこと}はあとで弟さまに向かつて、

「私はあのかたきを殺せなかったけれど、そなたはみごとに殺してしまった。だから、私は兄だけれど、人のかみに立つことはできない。どうぞそなたが天皇の位について天下を治めてくれ、私は神々をまつる役目をひき受けて、そなたに奉公をしよう」とおつしやいました。それで、弟の命はお二人のおあにいさまをおいてお位におつきになり、大和^{やまと}の葛城^{かつらぎ}宮^{のみや}にお移りになって、天下をお治めになりました。すなわち第二代、綏靖^{すいぜいてんのう}天皇さまでいらつしやいます。

天皇はご短命で、おん年四十五でお隠^{かく}れになりました。

赤い盾、黒い盾

一

綏靖天皇から御七代をへだてて、第十代目に崇神天皇がお位におつきになりました。
た。

天皇にはお子さまが十二人おありになりました。その中で皇女、豊鉏入媛が、はじめて伊勢の天照大神のお社に仕えて、そのお祭りをお司りになりました。また、皇子倭日子命がおなくなりになったときに、人がきといって、お墓のまわりへ人を生きながら埋めてお供をさせるならわしがはじまりました。

この天皇の御代には、はやり病がひどくはびこって、人民という人民はほとんど死に絶えそうになりました。

天皇は非常にお嘆きになって、どうしたらよいか、神のお告げをいただこうとおぼしめ

して、御身をおんみ潔めて、慎んでつつしお寢床の上にすわっておいでになりました。そうするとその夜のお夢に、三輪の社の大物主神が現われていらしって、

「こんどのやく病はこのわしがはやらせたのである。これをすっかり亡ほろぼしたいと思うならば、大多根子というものにわしの社を祀まつらせよ」とお告げになりました。天皇はすぐに四方へはやうまのお使いをお出しになつて、そういう名まえの人をおさがしになりますと、一人の使いが、河内の美努村というところでその人を見つけてつれてまいりました。

天皇はさつそくご前にお召めしになつて、

「そちはだれの子か」とおたずねになりました。

すると大多根子は、

「私は大物主神のお血筋をひいた、建甕槌命と申します者の子でございます」

とお答えいたしました。

それというわけは、大多根子から五代もまえの世に、陶都耳命という人の娘で活玉まよりひめ依媛よりひめというたいそう美しい人がおりました。

この依媛があるとき、一人の若い人をお婿むこさまにしました。その人は、顔かたちから、いずまいの美しいけだかいことといったら、世の中にくらべるものもないくらい、りっぱ

な、りりしい人でした。

媛^{ひめ}はまもなく子供が生まれそうになりました。しかしそのお婿さんは、はじめから、ただ夜だけ媛のそばにいるきりで、あけがたになると、いつのまにかどこかへ行ってしまうて、けっしてだれにも顔を見せませんし、お嫁さんの媛にさえ、どこのだれかということすらも、うちあけませんでした。

媛のおとうさまとおかあさまとは、どうかして、そのお婿さんを、どこの何びとか突きとめたいと思ひまして、ある日、媛^{ひめ}に向かつて、

「今夜は、おへやへ赤土をまいておおき、それからあさ糸のまりを針^{はり}にとおして用意しておいて、お婿^{むこ}さんが出て来たら、そつと着物のすそにその針をさしておおき」と言いました。

媛はその晩、言われたとおりに、お婿さんの着物のすそへあさ糸をつけた針をつきさしておきました。

あくる朝になつて見ますと、針についているあさ糸は、戸のかぎ穴^{あな}から外へ伝わっていました。そして糸のたまは、すっかり繰りほどけて、おへやの中には、わずか三まわり輪^わに巻けた長さしか残っておりませんでした。

それで、ともかくお婿さんは、戸のかぎ穴から出はいりしていたことがわかりました。媛はその糸の伝わっている方へずんずん行つて見ますと、糸はしまいに、三輪山のお社にはいつて止まっていました。それで、はじめて、お婿さんは大物主神でいらしたことがわかりました。

おたねこ
 大多根子はこのお二人の間に生まれた子の四代目の孫でした。

天皇は、さつそくこの大多根子を三輪の社の神主にして、大物主神のお祭りをおさせになりました。それといっしょに、お供えものを入れるかわらけをどつきり作らせて、大空の神々や下界の多くの神々をおまつりになりました。その中のある神さまには、とくに赤色の盾や黒塗の盾をおあげになりました。

そのほか、山の神さまや川の瀬の神さまにいたるまで、いちいちもなくお供えものをおあげになって、ていちようにお祭りをなさいました。そのために、やく病はやがてすっかりとまって、天下はやつと安らかになりました。

天皇はついで大毘古命おおひこのみことを北陸道ほくろくどうへ、その子の建沼河別命たけぬかわわけのみことを東山道とうさんどうへ、そのほか強い人を方々へお遣しつかわになつて、ご命令に従わない、多くの悪者どもをご征伐になりました。

大毘古命おおひこのみことはおおせをかしこまつて出て行きましたが、途中で、山城やましろうの幣羅坂へらざかというところへさしかかりますと、その坂の上に腰ぬこしのばかりを身につけた小娘こむすめが立つていて、

これこれ申し天子さま、

あなたをお殺し申そうと、

前の戸に、

裏の戸うらに、

行つたり来たり、

すきを狙ねらっている者が、

そこにいるとも知らないで、

これこれ申し天子さま。

と、こんなことを歌いました。

おおひこのみこと大毘古命は変だと思ひまして、わざわざうまをひきかえして、

「今言つたのはなんのことだ」とたずねました。

すると小娘は、
こむすめ

「私はなんにも言ひはいたしません。ただ歌を歌つただけでございます」と答えるなり、もうどこへ行つたのか、ふいに姿がすがた見えなくなつてしまいました。

おおひこのみこと大毘古命は、その歌の言葉がしきりに氣になつてならないものですから、とうとう

そこからひきかえしてきて、天皇にそのことを申しあげました。すると天皇は、

「それは、きつと、山城やましろにいる、私の腹わしはらちがいの兄、たけはにやすのみこと建波邇安王が、悪くみをして

いる知らせに相違あるまい。そなたはこれから軍勢をひきつれて、すぐに討うちとりに行つ

てくれ」とおつしやつて、彦国夫玖命ひこくにぶくのみことという方を添そえて、いっしょにお遣つかわしになりました。

した。

二人は、神々のお祭りをして、勝利を祈つて出かけました。そして、山城やましろの木津川きつがわま

で行きますと、たけはにやすのみこと建波邇安王は案のじよう、天皇におそむき申して、兵を集めて待ち受け

ていらつしやいました。両方の軍勢は川を挟んで向かい合いに陣取りました、彦国夫ひこくにぶくのみことは、敵に向かつて、

「おおい、そちらのやつ、まずかわきりに一矢射てみよ」とどなりました。敵の大將の建た波邇安王けはにやすのみこは、すぐにそれに応じて、大きな矢をひゅうと射放しましたが、その矢はだ

れにもあたらないで、わきへそれてしまいました。それでこんどはこちらから国夫玖くにぶくのみこと命が射かけますと、その矢はねらいたがわず建波邇安王たけはにやすのみこを刺し殺してしまいました。

敵の軍勢は、王が倒れておしまいになると、たちまち総くずれになって、どんどん逃げだしてしまいました。国夫玖命くにぶくのみことの兵はどんどんそれを追っかけて、河内の国のある川の渡しのところまで追いつめて行きました。

すると賊兵のあるものは、苦しまぎれにうんこが出て下ばかまを汚しました。

こちらの軍勢はそいつらの逃げ道をくいとめて、かたっぱしからどんどん切り殺してしまいました。そのたいそうな死がいが川に浮かんで、ちようど、うのように流れくだって行きました。

大毘古命おおひこのみことは天皇にそのしだいをすっかり申しあげて、改めて北陸道へ出発しました。

そのうちに大毘古命おおひこのみことの親子をはじめ、そのほか方々へお遣つかしになった人々が、みんなおおせつかった地方を平らげて帰りました。そんなわけで、もういよいよどこにも天皇におさからいする者がなくなつて、天下は平らかに治まり、人民もどんどん裕福ゆうふくになりました。それで天皇ははじめて人民たちから、男から弓端ゆはずの調みつぎといつて、弓矢でとつた獲え物ものの中のいくぶんを、女からは手末たなすえの調みつぎといつて、紡つむいだり、織おつたりして得たもののいくぶんを、それぞれ貢物みつぎものとしておめしになりました。

天皇はまた、人民のために方々へ耕作用の池をお作りになりました。天皇の高いお徳は、後の代よからも、いついつまでも永ながくおほめ申しあげました。

おしの皇子おうじ

一

崇神天皇すじんてんのうのおあとには、お子さまの垂仁天皇すいにんてんのうがお位をお継ぎになりました。天皇は、沙本毘古王さほひこのみこという方のお妹さまで沙本媛さほひめとおっしゃる方を皇后にお召めしになって、大和やまとの玉垣たまがきの宮にお移りになりました。

その沙本毘古王さほひこのみこが、あるとき皇后に向かつて、

「あなたは夫と兄とはどちらがかわいいか」と聞きました。皇后は、

「それはおあにいさまのほうがかわゆうございます」とお答えになりました。すると王みこは、用意していた鋭い短刀をそつと皇后にわたして、

「もしおまえが、ほんとうに私わしをかわいいと思うなら、どうぞ、この刀で天皇がおよつていらつしやるところを刺さし殺しておくれ。そして二人でいつまでも天下を治めようではな

いか」と言つて、無理やりに皇后を説き伏せてしまいました。

天皇は二人がそんな怖ろしいたくらみをしているとはご存じないものですから、ある晩、なんのお気もなく、皇后のおひざをまくらにしてお眠りになりました。

皇后はこのときだと思ひになつて、いきなり短刀を抜き放して、天皇のお首をま下にねらつて、三度までお振りかざしになりましたが、いよいよとなると、さすがにおいたわしくて、どうしてもお手をおくだしになることができませんでした。そしてとうとう悲しさに堪えきれないで、おんおんお泣きだしになりました。

その涙が天皇の顔にかかつて流れ落ちました。天皇はそれといつしよに、ひよいとお目ざめになつて、

「おれは今きたいな夢を見た。沙本の村の方からにわかには大雨が降つて来て、おれの顔にぬれかかった。それから、にしき色の小さなへびがおれの首へ巻きついた。いったいこんな夢はなんの兆であらう」と、皇后に向かつておたずねになりました。皇后はそうおつしやられると、ぎくりとなすつて、これはとても隠しきれないとお思ひになつたので、おあにいさまとお二人のおそれ多いたくらみをすっかり白状しておしまいになりました。

天皇はそれをお聞きになると、びつくりなすつて、

「いやそれは危くばかな目を見るところであつた」とおつしやりながら、すぐに軍勢を集めになつて、沙本毘古さほひこを討ちとりにおつかわしになりました。

すると沙本毘古さほひこのほうでは、いねたばをぐるりと積みあげて、それでとりでをこしらえて、ちゃんと待ち受けておりました。天皇の軍勢はそれをめがけて撃つてかかりました。

皇后はそうになると、こんどはまたおあにいさまのことがおいたわしくおなりになつて、じつとしておいでになることができなくなりました。それで、とうとうこつそり裏口うらくちのご門から抜け出して、沙本毘古さほひこのとりでの中へかけつけておしまいになりました。

皇后はそのときちょうど、お腹なかにお子さまをお持ちになつていらつしやいました。

天皇は、もはや三年もごちよう愛になつていた皇后でおありになるうえに、たまたまお身持ちでいらつしやるものですから、いつそうおかおいそうにおぼしめして、どうか皇后のお身におけがないようにと、それから、とりでもただ遠まきにして、むやみに攻め落とさないように、とくにご命令をおくだしになりました。

そんなことで、かれこれ戦も長びくうちに、皇后はおあにいさまのとりでの中で皇子をお生みおとしになりました。

皇后はそのお子さまをとりでのそとへ出させて、天皇の軍勢の者にお見せになり、

「この御子みこをあなたのお子さまとおぼしめしてくださいさるならば、どうぞひきとつてご養育なすってくださいまし」と、天皇にお伝えさせになりました。

天皇はそのことをお聞きになりますと、ついでにどうかして皇后をもいつしよに取りかえたいとお思いになりました。それは、兄の沙本毘古さほひこに対しては、刻み殺きざしてもたりないくらい、お憤りいきんになつておりますが、皇后のことだけは、どこまでもおいたわしくおぼしめしていらつしやるからでした。

それで味方の兵士の中で、いちばん力の強い、そしていちばんすばしっこい者をいく人かお選びになつて、

「そちたちはあの皇子を受け取るときに、必ず母の后きさきをもひきさらつてかえれ。髪でも手でも、つかまりしだいに取りつかまえて、無理にもつれ出して来い」とお言いつけになりました。

しかし皇后のほうでも、天皇がきつとそんなお企くわだてをなさるに違いないと、ちゃんとお感

づきになつていましたので、そのときの用意に、前もつてお髪をすっかりおそり落としになつて、そのお毛をそのままそつとお被りになり、それからお腕先のお玉飾りも、わざと、つなぎの緒を腐らして、お腕へ三重にお巻きつけになり、お召物もわざわざ酒で腐らしたのをおめしになつて、それともなげに皇子を抱えて、とりでの外へお出ましになりました。

待ちかまえていた勇士たちは、そのお子さまをお受け取り申すといつしよに、皇后をも奪い取ろうとして、すばやく飛びかかつてお髪をひつつかみますと、髪はたちまちすらりとぬげ落ちてしまいました。

「おや、しまった」と、こんどはお手をつかみますと、そのお手の玉飾りの緒もぶつりと切れたので、難なくお手をすり抜いてお逃げになりました。こちらはまたあわてて追いがりながら、ぐいとお召物をつかまえました。すると、それもたちまちぼろりとちぎれてしまいました。その間に皇后は、さつと中へ逃げこんでおしまいになりました。

勇士どもはしかたなしに、皇子一人をお抱え申して、しおしおと帰つてまいりました。

天皇はそれらの者たちから、

「お髪をつかめばお髪がはなれ、玉の緒もお召物も、みんなぶすぶす切れて、とうとう

おとりにがし申しました」とお聞きになりますと、それはそれはいそうお悔^{くや}みになりました。

天皇はそのために、宮中の玉飾りの細^{さい}工^{いく}人^{にん}たちまでお憎^{にく}みになって、それらの人々が知行^{ちぎよう}にいたでいた土地を、いきなり残らず取りあげておしまいになりました。

それから改めて皇后の方へお使いをお出しになって、

「すべて子供の名は母がつけるものときまつているが、あの皇子は、なんという名前にしようか」とお聞きかせになりました。

皇后はそれに答えて、

「あの御^み子^こは、ちようどとりでが火をかけられて焼けるさいちゆうに、その火の中でお生まれになったのでございますから、本^{ほん}牟^む智^ち別^わ王^{みこ}とお呼び申したらよろしゅうございましょう」とおっしゃいました。そのほむちというのは火のことでした。

天皇はそのつぎには、

「あの子には母がないが、これからどうして育てたらいいか」とおたずねになりますと、「ではうばをお召^めし抱^かえになり、お湯をおつかわせ申す女たちをもおおきになって、それらの者にお任^ませになればよろしゅうございます」とお答えになりました。

天皇は最後に、

「そちがいなくなつては、おれの世話はだれがするのだ」とお聞きになりました。すると皇后は、

「それには、丹波たんばの道能宇斯王みちのうしのみこの子に、兄媛えひめ、弟媛おとひめというきょうだいの娘むすめがございます。これならば家柄いえがらも正しい女たちでございますから、どうかその二人をお召めしなさいまし」とおつしやいました。

天皇はもういよいよしかたなしに、一氣にとりでを攻め落として、沙本毘古さほひこを殺させておしまいになりました。

皇后も、それといつしよに、えんえんと燃えあがる火の中に飛びこんでおしまいになりました。

三

お母上のない本牟智別王ほむちわけのみこは、それでもおしあわせに、ずんずんじようぶにご成長になりました。

天皇はこの皇子のために、わざわざ尾張の相津というところにある、二またになった大きなすぎの木をお切らせになって、それをそのままくって二またの丸木船をお作らせになりました。そして、はるばると大和まで運ばせて、市師の池という池にお浮かべになり、その中へごいっしょにお乗りになって、皇子をお遊ばせになりました。

しかしこの皇子は、後にすっかりご成人になって、長いお下ひげがお胸先にたれかかるほどにおなりになつても、お口がちつともおきけになりませんでした。

ところがあるとき、この鳥が、空を鳴いて飛んで行くのをご覧になって、お生まれになつてからはじめて、

「あわわ、あわわ」とおおせになりました。

天皇は、さつそく、山辺大鷹という者に、

「あの鳥をとつて来てみよ」とおいいつけになりました。

大鷹はかしこまつて、その鳥のあとをどこまでも追つかけて、紀伊国、播磨国へとくだつて行き、そこから因幡、丹波、但馬をかけまわった後、こんどは東の方へまわつて、近江から美濃、尾張をかけぬけて信濃にはいり、とうとう越後のあたりまでつけて行きました。そして、やつとこのことで和那美という港でわな網を張つて、ようやく、そのこ

うの鳥をつかまえました。そして大急ぎで都へ歸つて、天皇におさし出し申しました。

天皇は、その鳥を皇子にお見せになったら、おものがおっしゃれるようになりに
はしないかとおぼしめして、わざわざとりにおつかわしになったのでした。しかし皇子は、
やはりそのまま一言もおものおつしやいませんでした。

天皇はそのために、いつもどんなにお心をおいたためになつていたかしれませんでした。

そのうちに、ある晩、ふと夢の中で、

「私のお社を天皇のお宮のとおりにりっぱに作り直して下さるなら王は必ず口がきけるよ
うにおなりになる」と、こういうお告げをお聞きになりました。

天皇は、どの神さまのお告げであらうかと急いで占いの役人に言いつけて占わせてごら
んになりますと、それは出雲の大神のお告げで、皇子はその神のおたたりでおしにお生
まれになったのだとわかりました。

それで天皇は、すぐに皇子を出雲へおまいりにお出しになることになりました。

それにはだれをつけてやったらよかろうと、また占わせてごらんになりますと、曙立
王という方が占いにおあたりになりました。

天皇は、その曙立王にお言いつけになつて、なお念のために、うかがいのお祈りを立

てさせてごらんになりました。

王^{みこ}はおおせによつて、さぎの巢^すの池のそばへ行つて、

「あの夢のお告げのとおり、出雲の大神を拝^{おが}んでおしるしがあるならば、その証^{しょうこ}拠^こにこの池のさぎどもを死なせて見せてくださるよう」とお祈りをしますと、そのまわりの木の上にとまっていた池じゅうのさぎが、いつせいにぱたぱたと池に落ちて死んでしまいました。そこでこんどは祈りを返して、

「あのさぎがことごとく生きかえりますように」と言いますと、いったん死んだそれらのさぎが、またたちまちものとおりに生きかえりました。そのつぎには古^{ふる}櫟^{かし}の岡^{おか}という岡の上に茂^{しげ}つている、葉の大きなかしの木も、曙立王^{けたつのみこ}の祈りによつて、同じように枯^かれたりまた生きかえつたりしました。

そんなわけで、お夢のことままったく出雲の大神^{おおかみ}のお告げだということがいよいよたしかになりました。

天皇はすぐに曙立王^{けたつのみこ}と兎上王^{うがみのみこ}との二人を本牟智別王^{ほむちわけのみこ}につけて、出雲へおつかわしになりました。

そのご出立^{しゅつたつ}のときにも、どちらの道を選べばよいかとお占^{うらな}わせになりました。する

と、奈良街道ならかいどうからでは、途中でいざりやめくらに会うし、大阪口おおさかぐちから行つても、やはりめくらやいざりに会うので、どちらとも旅立ちには不吉ふきつである、脇道わきみちの紀井街道きいかいどうをとおつて行けば、必ずさきさい先がよいと、こう占いに出了ました。一同はそのとおりにして立つておいでになりました。

天皇は皇子のお名前を永く後の世までお伝えになるために、その途中のいたるところに、本牟智部ほむちべという部族をおこしらえさせになりました。

皇子は、いよいよ出雲にお着きになつて、大神おおかみのお社やしろにおまいりになりました。

そしてまた都みやこへお帰りになろうとなさいますと、その出雲の国をおあずかりしている、くにのみやつこ国造くにのみやつこという、いちばん上の役人が、肥ひの河かわの中へ仮かりのお宮をつくり、それへ、細木ほそきを編あんだ橋を渡して、その宮で、皇子を、ごちそうしておもてなし申しあげました。

そのとき川下の方には、皇子のお目を慰なぐさめるために、青葉で、作りものの山がこしらえてありました。

皇子はそれをご覧らんになつて、

「あの川下に、山のように見えている青葉は、あれはほんとうの山ではないだろう。神かみ主ぬたちが大國主神おおくにぬしのかみのお祭りをする場所でもあるのか」と突然こうお聞きになりま

した。

お供の曙立王けたつのみこや兎上王うがみのみこたちは、皇子がふいにおものをおつしやれるようになったので、びつくりして喜んで、すぐに早うまのお使いを立てて、そのことを天皇にお知らせ申しました。

皇子はそれからほかのお宮へお移りになって、肥長媛ひながひめという人をお妃きさきにおもらいになりました。

ところがあとでご覧らんになりますと、それはへびが女になって出て来たのだとわかりました。皇子はびつくりなすって、みんなとごいっしょに船に乗ってお逃げにになりました。

するとへびの媛ひめは、皇子のおあとを慕したって、急いで別の船をしたてて、海の上をきらきらと照らしながら、どんどん追っかけて来ました。皇子はいよいよ気味きみが悪くおなりになって、あわてて船をひきあげさせて、それをひっぱらせて山の間をお越こえになり、またその船をおろして海をお渡りわたになつたりなすって、やっと無事に都みやこへ逃げておかえりになりました。

曙立王けたつのみこは天皇におめえをして、

「おおせのとおりに大神をお拝おがみになりますと、まもなく、急にお口がおきけになるよう

になりましたので、一同でお供をして帰ってまいりました」と申しあげました。

天皇は、それはそれは言うに言われないほどお喜びになりました。そしてすぐに兎上^{うがみの}王^{みこ}をまた再び出雲^{いずも}へおくだしになって、大神のお社^{やしろ}をりっぱにご造営^{ぞうえい}になりました。

四

天皇はそれですっかりご安心になったので、こんどはご不自由がちな、おそばのご用を
おいいつけになるために、かねて皇后がおつしやつてお置きになったように、丹波^{たんば}から兄^え
媛^{ひめ}たちのきようだい四人をおめしよせになりました。

しかし下の二人はたいそうみにくい子でしたので、天皇は兄媛^{えひめ}とそのつぎの弟媛^{おとひめ}とだ
けをお抱え^{かか}になつて、あとの二人はそのまま家へかえしておしまいになりました。

すると、いちばん下の円野媛^{まどのひめ}は、四人がいつしよにおめしに会つて伺^{うかが}いながら、二人
だけは顔が汚^{きた}ないためにご奉公ができないでかえされたと言え、近所の村々への聞こえ
も恥ずかしく、とても生きてはいられないと言つて、途中の山城^{やましろ}の乙訓^{おとくに}というところ
までかえりますと、あわれにも、その深いふちに身を投げて死んでしまいました。

それから天皇はある年、多遲摩毛理たじまもりという者に、常世国とこよのくにへ行つて、香かおりの高いたちばなの実みを取つて来いとおおせつけになりました。

多遲摩毛理たじまもりはかしこまつて、長い年月としつきの間いっしょうけんめいに苦心して、はてしない大海おおうみの向こうの、遠い遠いその国へやつとたどり着きました。そしておおせのたちばなの実の、枝葉えだはのままついたのを八つ、実ばかりのを八つもぎ取つて、また長い間かかつて、ようよう都へ歸つて来ました。しかし天皇はその前に、もうとつくにおかくなつていました。

多遲摩毛理たじまもりはそのことを承ると、それはそれはがっかりして、葉つきの実を四つと、葉のないのを四つとを、天皇のおそばにお仕え申していた兄媛えひめにさしあげたうえ、あとの四つづつを天皇のお墓にお供え申しました。そして泣き泣き大声を張りあげて、

「ご覧らんくださいまし。このとおりおおせの実を取つてまいりました。どうぞご覧くださいまし」とそのたちばなを両手にさしあげて、繰くりかえし繰りかえし、いつまでもそのお墓の前で叫び続けて、とうとうそれなり叫び死にに死んでしまいました。

白い鳥

一

第十二代景行天皇は、お身の丈が一丈二寸、おひざから下が四尺一寸もおありになるほどの、偉大なお体格でいらつしやいました。それからお子さまも、すべてで八十人もお生まれになりました。

天皇はその中で、後におあとをお継ぎになつた若帯日子命と、小碓命とおつしやる皇子と、ほかにもう一方とだけをおそばにお止めになり、あとの七十七人の方々をことごとく、地方地方の国造、別稻置、県主という、それぞれの役におつけになりました。

あるとき天皇は、美濃の、神大根王という方の娘で、兄媛弟媛という姉妹が、二人ともたいそうきりようがよい子だという評判をお聞きになつて、それをじつさいにお

確^{たし}かめになつたうえ、さつそく御^ご殿^{てん}にお召^め使いになるおつもりで、皇子の大^{おお}確^{おう}命^{すのみこと}にお言いつけになつて、二人を召^めしのお遣^{つか}わしになりました。

すると、大^{おお}確^{おう}命^{すのみこと}は、その二人の者をご自分のお召^め使いに取つておしまいになり、別に二人の姉^き妹^{ようだい}の女を探^{さが}し出して、それを兄^え媛^{ひめ}、弟^{おと}媛^{ひめ}だといつわつて、天皇にお目通りをおさせになりました。

天皇はそれがほかの女であるということ、ちゃんとお見抜きになりました。しかしうわべでは、あくまでだまされていらつしやるようにお見せかけになつて、二人をそのまま御^ご殿^{てん}にお置きになりました。その代わりお手^て近^{ぢか}のご用は、わざとほかの者にお言いつけになつて、それとなく二人をおこらしめになりました。

大^{おお}確^{おう}命^{すのみこと}はそんな悪いことをなすつてからは、天皇の御^ご前^{ぜん}へお出ましになるのをうしろぐらくおぼしめして、さつぱりお顔をお見せになりませんでした。

天皇はある日、弟^{おうじ}さまの皇子^{おうすのみこと}の小^お確^{おう}命^{すのみこと}に向かつて、

「そちが兄は、どういうわけで、このせつ朝夕の食事のときにも出て来ないのであろう。おまえ行つて、よく申し聞かせよ」とおつしやいました。

しかし、それから五日もたつても、大^{おお}確^{おう}命^{すのみこと}は、やっぱりそのままお顔出しをなさ

らないものですから、天皇はおうすのみこと小碓命を召して、

「兄はどうして、いつまでもしよくじ食事に出て来ないのか。おまえはまだ言わないのではないか」とお聞きになりました。

「いいえ、申し聞かせました」と命はみことお答えになりました。

「では、どういふうに話したのか」

「ただ朝早く、おあにいさまがかわやにはいますところを待ち受けて、つかみくじき、手足をむしりとり、死体をこもにくるんでうちやりました」と、命はみことまるでむぞうさにこう言つて、すましていらつしやいました。

天皇はそれ以来、小碓命おうすのみことのきつい荒いあらご気性きしょうを怖ろしくおぼしめして、どうかしてそれとなく命をおそばから遠ざけようとお考えになりました。それでもまもなく命を召めして、

「実は西の方に熊襲建くまそたけるという者のきようだいがいる。二人とも私の命令に従わない無礼なやつである。そちはこれから行つて、かれらを打ちとつてまいれ」とおおせになりました。それで命は、急いで伊勢いせにおくだりになつて、大神宮だいじんぐうにお仕えになつて、おんおば上の倭媛やまとひめにお別れをなさいました。

するとお婆上からは、ご料のお上着と、おはかま着と、懐劍とを、お別れのお印にお
 くだしになりました。

命はそれからすぐに、今の日向、大隅、薩摩の地方へ向かっておくだりになりました。
 た。そのとき命は、まだお髪をお額にお結いになっている、ただほんの一少年でいらつし
 やいました。

二

命は、その土地にお着きになり、熊襲建のうちへ近づいて、ようすをおうかがいにな
 りますと、建らは、うちのまわりへ軍勢をぐるりと三重に立て囲わせて、その中に住まっ
 ておりました。そして、たまたまちようどその家ができあがったばかりで、近々にそのお
 祝いの宴会をするというので、大さわぎでしたくをしているところでした。

命はそのあたりをぶらぶら歩きまわって、その宴会の日が来るのを待ちかまえていら
 っしやいました。そして、いよいよその日になりますと、今までお結いになっていたお髪
 を、少女のようにすきさげになさり、おんお婆上からおさずかりになったご衣裳を召し

て、すっかり小女こおんなの姿すがたにおなりになりました。そして、ほかの女たちの中にまじつて、建たけるどもの宴会えんかいのへやへはいつておいでになりました。

すると熊襲建くまとけるきようだいは、命をほんとうの女だとはかり思いこんでしまいまして、その姿のきれいなのがたいそう氣にいったので、とくに自分たち二人の間にすわらせて、大喜びで飲みさわぎました。

命は、みんながすっかり興きように入つたところを見はからつて、そつと懷ふところから劍つるぎをお取り出しになつたと思いますと、いきなり片手で兄の建たけるのえり首をつかんで、胸むねのところをひと突つきに突き通しておしまいになりました。

弟の建たけるはそれを見ると、あわててへやの外へ逃げ出そうとしました。

命みことは、それをもすかさず、階段かいだんの下に追いつめて、手早く背中せなかをひつつかみ、ずぶりとおしりをお突き刺さしになりました。

建たけるはそれなりじたばたしやうともしないで、

「どうぞその刀をしばらく動かさなideくさいますし。一言ひとこと申しあげたいことがござい
ます」と、言いました。それで命みことは刀をお刺さしになつたなり、しばらく押おし伏ふせたままに
していらつしやいますと、建たけるは、

「いったいあなたはどなたでございます」と聞きました。

「おれは、やまと大和のひしろ日代のみや宮にてんか天下を治めておいでになる、おおたらしひこてんのう大帯日子天皇の皇子、名は

やまとおくなのみこ倭童男王という者だ。なんじら二人とも天皇のおおせに従わず、無礼なふるまいばかりしているので、ちよくめい勅命によつて、ちゆう伐にまいったのだ」と、みこと命はおおしくお名乗

りになりました。

たける建はそれを聞いて、

「なるほど、そういうお方に相違ございますまい。この西の国じゆうには、私ども二人より強い者は一人もおりません。それにひきかえやまと大和には、われわれにもまして、すばらしい

お方がいられたものだ。おそれながら私がお名まえをさしあげます。これからあなたの

お名まえは、やまとたけるのみこと倭建命とお呼び申したい」と言いました。

たける命は建がそう言いおわるといつしよに、そのあら荒くれ者を、まるで熟したまくわうりを切るように、ずぶずぶと切りほうつておしまいになりました。

それ以来、だれもかれも命のご武勇をおほめ申して、お名まえを、やまとたけるのみこと倭建命と申し

あげるようになりました。

命は、それからやまと大和へおひきかえしになる途中で、いろいろな山の神や川の神や、あなど穴戸の

神と称えて、方々の險阻なところにててもっている悪神どもを、片はしからお従えになつた後、出雲の国へおまわりになつて、そのあたりで幅をきかせている、出雲建という悪者をお退治になりました。

命はまずその建の家へたずねておいでになつて、その悪者とごこうさいをお結びになりました。そして、そのあとで、こつそりとあかひのきという木を刀のようにお削りになり、それをりっぱな太刀のように飾りをつけておつるしになつて、建をさそい出して、二人で肥の河の水を浴びにいらつしやいました。そして、いいかげんなころを見はからつて、ご自分の方が先におあがりになり、ごじょうだんのように建の太刀をお身におつけになりながら、

「どうだ、二人でこの刀のとりかえつこをしようか」とおつしやいました。建はあとからのそのそあがつて来て、

「よろしい取りかえよう」と言いながら、うまくだまされて命のにせの刀をつるしました。命は、

「さあ、ひとつ二人で試合をしよう」とお言いになりました。そして二人とも刀を抜き放すだんになりますと、建のはにせの刀ですから、いくら力を入れても抜けようはずがあり

ません。命は建たけるがそれでまごしているうちに、すばやくほんものの刀を引き抜いて、たちまちその悪者を切り殺しておしまいになりました。そして、そのあとで、建たけるが抜けない刀を抜こうとして、まごまごとあわてたおかしさを、歌につくってお笑いわらになりました。

三

命みことはこんなにして、お道筋みちすじの賊ぞくどもをすっかり平たいらげて、大和やまとへおかえりになり、天皇にすべてをご奏そうじょう上うなさいました。

すると天皇は、またすぐにひき続いて、命に、東の方の十二か国の悪い神々や、おおせに従わない悪者どもを説とき従えてまいれとおおせになって、ひいらぎの矛ほこをお授さずけになり、御鉏友耳建日子みすきともみみたけひこという者をおつけ添そえになりました。

命はお言いつけを奉じて、またすぐにおでかけになりました。そして途中で伊勢いせのお宮におまいりになって、おんおぼ上の倭やまと媛ひめに再度さいどのお別れをなさいました。そのとき命はおんおぼ上に向かつておつしやいました。

「天皇は私を早くなくならせようとでもおぼしめすのでしょう。でも、こないだまで西の

方の賊を討ちにまいっておりまして、やっと、たつた今かえつたと思いますと、またすぐに、こんどは東の方の悪者どもを討ちとりにお出しになるのはどういいうわけでございましょう。それもほとんど軍勢というほどのものもくだらないのです。こんなことからおして考えてみますと、どうしても私を早く死なせようというお心持としか思われません」命はこうおっしゃって涙ながらにお立ちになろうとしました。

おんおば上は、命のそのお恨みをおやさしくおなだめになつたうえ、もと神代のときに、すさのおのみこと須佐之男命が大じやの尾の中からお拾いになった、あの貴いお宝物の御剣と、ほかに袋を一つお授けになり、まん一、急なことが起こつたら、この袋の口をお解きなさい、とおおせになりました。

命はそれから尾張へおはいりになつて、その国造の娘の美夜受媛のおうちにおとまりになりました。そして、かえりにはまた必ず立ち寄るからとお言いのこしになつて、さらに東の国へお進みになり、山や川に住んでいる、荒くれ神や、そのほか天皇にお仕えない悪者どもをいちいちお説き従えになりました。そしてまもなく相模の国へお着きになりました。

するとその国造が、命をお殺し申そうとたくらんで、

「あすこの野中に大きな沼ぬまがございます。その沼の中に住んでおります神が、まことに乱ら暴んぼうなやつで、みんな困こまっております」と、おだまし申しました。

命はそれをお受けになつて、その野原の中へはいつておいでになりますと、くにのみ国造やつこは、ふいにその野へ火をつけて、どんどん四方から焼きたてました。

命ははじめて、あいつにだまされたかとお気づきになりました。その間まにも火はどんどんま近せまに迫せまつて来て、お身あやうが危あやうくなりました。

命はおんおば上のおおせを思い出して、急いで、例の袋のひもといてらん覧になりますと、中ひうちには火打ひうちがはいつておりました。

命はそれで、急いでお宝たからもの物の御剣みつるぎを抜ぬいて、あたりの草をどんどんおなぎ払いになり、今の火打ひうちでもつて、その草へ向かい火をつけて、あべこべに向こうへ向かつてお焼きたてになりました。命はそれでようやく、その野原からのがれ出ていらつしやいました。そしていきなり、その悪い国くにのみやつこ造やつこと、手下てしたの者どもを、ことごとく切り殺して、火をつけて焼いておしまいになりました。

それ以来そのところを焼津やいづと呼びました。それから、命が草をお切りはらいになつた御み剣つるぎを草薙くさなぎの剣と申しあげるようになりました。

命はその相模さがみの半島はんとうをおたちになつて、お船で上総かずさへ向かつてお渡りわたになろうとしました。すると途中で、その海の神がふいに大波おおなみを巻きあげて、海一面を大荒れおおあに荒れさせました。命の船はたちまちくるくるまわり流されて、それこそ進むこともひきかえすこともできなくなつてしまいました。

そのとき命がおつれになつていたお召使めしつかいの弟橘媛おとたちばなひめは、

「これはきつと海の神のたたりに相違ちがひございません。私があなたのお身代わりになりました、海の神をなだめましょう。あなたはどうぞ天皇のお言いつけをおしとげくださいまして、めでたくあちらへおかえりくださいまし」と言いながら、すげの畳たたみを八枚まい、皮畳かわだたみを六枚に、絹きぬ畳だたみを八枚重ねて、波の上に投げおろさせるやいなや、身をひるがえして、その上へ飛びおりました。

大波おおなみは見るまに、たちまち媛ひめを巻きこんでしまいました。するとそれといつしよに、今まで荒れ狂つていた海が、ふいにぱつたりと静まって、急に穏かなおだやなぎになつてきました。

命はそのおかげでようやく船を進めて、上総かずさの岸へ無事にお着きになることができました。

それから七日目に、橘たちばなひめ媛ひめのくしがこちらの浜へうちあげられました。命はそのくしを拾わせて、あわれな媛のためにお墓をお作らせになりました。

橘たちばなひめ媛が生前に歌った歌に、

さねさし、

さがむの小野おぬに、

もゆる火の、

火中ほなかに立ちて、

問いしきみはも。

これは、相模さがみの野原で火攻めにお会いになったときに、その燃える火の中にお立ちになつていた、あの危急なときにも、命は私のことをご心配くださつて、いろいろに慰め問うてくださった、ほんとに、お情け深い方よと、そのもったいないお心持を忘れぬ印しるしに歌つたのでした。

命はそこから、なおどんどんお進みになつて、いたるところで手におえない悪者どもを

ご平定^{へいてい}になり、山や川の荒^{あら}くれ神をもお従えになりました。

それでいよいよ、再び^{ふたたび}大和^{やまと}へおかえりになることになりました。

そのお途中で、足柄^{あしがら}山^{やま}の坂の下で、お食事をなすつておいでになりますと、その坂の

神が、白いしかに姿をかえて現われて、命を見つめてつつ立つておりました。

命^{みこと}は、それをご覧^{らん}になると、お食べ残しのにらの切^きはしをお取りになって、そのしかを

めがけてお投げつけになりました。すると、それがちょうど目にあたって、しかはばかりと倒^{たお}れてしまいました。

命はそれから坂の頂上へおあがりになり、そこから東の海をおながめになって、あの哀^{あわ}れな橘^{たちばな}媛^{ひめ}のことを、つくづくとお思いかえしになりながら、

「あずまはや」（ああ、わが女よ）とお嘆^{なげ}きになりました。それ以来そのあたりの国々をあずまと呼^よぶようになりました。

四

命は、そこから甲斐^{かい}の国へお越^こえになりました。そして酒折^{さかおりの}宮^{みや}という御殿^{ごてん}におとま

りになったときに、

にいはり、つくばを過ぎて、

いく夜よか寝ねつる。

とお歌いになりますと、あかりのたき火についていた一人の老人が、すぐにそのおあとを受けて、

かなべて、

夜よには九このよ夜、

日には十とおか日を。

と歌いました。それは、

「蝦夷えびすどもをたいらげながら、常陸ひたちの新治にいばりや筑波つくばを通りすぎて、ここまで来るのに、いく夜寝たであろう」とおっしゃるのに対して、い

「かぞえて見ますと、九ここのよ夜とわかめ寝て十日目を迎えましたのでございます」という意味でした。命はその答えの歌をおほめになつて、そのごほうびに、老人を東あづまのくにのみやつこ国造という役におつけになりました。

それから信濃しなのへおはいりになり、その国境くにぎかいの地の神を討ち従えて、ひとまずもとの尾張おわりまでお帰りになりました。

命はお行きがけにお約束をなすつたとおり、美夜受媛みやすひめのおうちへおとまりになりました。そして草薙くさなぎの宝剣ほうけんを媛ひめにおあずけになつて近江おうみの伊吹山いぶきやまの、山の神を征伐せいぼつにしないでになりました。

命はこの山の神ぐらいは、す手でも殺すとおっしゃつて、どんどんのぼつておいでになりました。すると途中で、うしほどもあるような、大きな白いのししが現われました。命は、

「このいのししに化ばけて出たのは、まさか山の神ではあるまい。神めしつかいの召使の者であろう。こんなやつは今殺さなくとも、かえりにしとめてやればたくさんである」とおいばりになつて、そのままのぼつておいでになりました。

そうすると、ふいに大きなひょうがどつと降りだしました。命みことはそのひょうにお襲おそわれ

になるといっしょに、ふらふらとお目まいがして、ちやうどものにお酔よいになったように、お気分が遠くおなりになりました。

それというのは、さきほどの白いのししは、山の神の召使ではなくて、山の神自身が化けて出たのでした。それを命があんなにけいべつして広言こうげんをお吐はきになったので、山の神はひどく怒おこって、たちまち毒氣どくきを含ふくんだひようを降らして、命をおいじめ申したのでした。

命は、ほとんどほうにくれておしまいになりましたが、ともかく、ようやくのことで山をおくだりになって、玉倉部たまくらべというところにわき出ている清水しみずのそばでご休息をなさいました。そして、そのときはじめて、いくらかご気分がたしかにおなりになりました。しかし命はどうとうその毒氣のために、すっかりおからだをこわしておしまいになりました。

やがて、そこをお立ちになって、美濃みのの当芸野たぎのという野中までおいでになりますと、

「ああ、おれは、いつもは空でも飛んで行けそうに思っていたのに、今はもう歩くこともできなくなった。足はちやうど船のかじのように曲がってしまった」とおっしゃって、お嘆なげきになりました。そしてそのまままた少しお歩きになりましたが、まもなくひどく疲つかれました。

ておしまいになったので、とうとうつえにすがって一足一足お進みになりました。

そんなにして、やっと伊勢の尾津の崎という海ばたの、一本まつのところまでおかえりになりますと、この前お行きがけのときに、そのまつの下でお食事をお取りになって、つい置き忘れていらした太刀が、そのままくならないで、ちゃんと残っておりまして。
命は、

「おお一つまつよ、よくわしのこの太刀の番をしていてくれた。おまえが人間であつたら、ほうびに太刀をさげてやり、着物を着せてやるのだけれど」と、こういう意味の歌を歌ってお喜びになりました。それからなおお歩きになって、ある村までいらつしやいました。

命は、そのとき、

「わしの足はこんなに三重に曲がつてしまった。どうもひどく疲れて歩けない」とおつしやいました。しかしそれでも無理にお歩きになって、能褒野という野へお着きになりました。

命は、その野の中でつくづく、おうちのことをお思いになり、

あの青山にとりかこまれた、

美しい大和やまとが恋しい。

しかし、ああ私わたしは、

その恋しい土地へも、

帰りつくことはできない。

命いのちあるものは、

これからがいせんして、

あの平群へぐりの山の、

くまがしの葉を、

髪かみに飾かざって祝い楽しめよ。

という意味をお歌いになり、

はしけやし、

わぎへの方かたよ、

雲くもいたち来くも。

(おおなつかしや、

わが家^やのある、

はるかな大和^{やまと}の方から、

雲が出て来るよ。)

と、お歌いになりました。

そして、それといっしょにご病^{びょう}勢^{せい}もどつとご危篤^{きとく}になってきました。

命^{みこと}は、ついに、

おとめの、

床^{とこ}のべに、

わがおきし、

剣^{つるぎ}の太刀^{たち}。

その太刀はや。

と、あの美夜受媛みやすひめのおうちにおいていらした宝剣ほうけんも、とうとう再び手ふたたにとることもできなにかとお歌いになり、そのお歌の終わるのとともに、この世をお去りになりました。

早うまのお使いは、このことを天皇に申しあげにかけつけました。

大和やまとからは、命のお妃きさきやお子さまたちが、びつくりしてくだっただっておいでになりました。

そして、命のご陵りようをお作りになって、そのぐるりの田の中に伏ふしまろんで、おんおんおんおんと泣いていらつしやいました。

するとおなくなりになった命は、大きな白い鳥になって、お墓の中からお出ましになり、空へ高くかけのぼって、浜辺はまべの方へ向かって飛んでおいでになりました。

お妃きさきやお子さまたちは、それをご覧らんになると、すぐに泣き泣きそのあとを追いたって、ささの切り株かぶにお足を傷つけて血だらけにおなりになっても、痛いたさを忘わすれて、いっしょうけんめいにかけておいでになりました。

そしてしまいには、海の中にまではいつて、ぎぶぎぶと追っかけていらつしやいました。白い鳥はその人々をあとにおいて、海の中のいそからいそにと伝わって飛んで行きまし

た。
お妃きさきは潮の中を歩きなやみながら、おんおんお泣きになりました。

その鳥は、とうとう伊勢いせから河内かわちの志紀しきというところへ来てとまりました。それで、そこへお墓を作つて、いったんそこへお鎮めしず申しましたが、しかし鳥は、あとにまた飛び出して、どんどん空をかけて、どこへともなく逃げ去つてしまいました。

五

命みことには、お子さまが男のお子ばかり六人おいでになりました。その中の、帶中津日たらしなかつひ子命みこととおつしやる方は、後にお祖父上そふうえの天皇のおつぎの成務天皇せいむてんのうのおあとをお継つぎになりました。すなわち仲哀天皇ちゆうあいてんのうでいらつしやいます。

命が諸方を征伐せいぱつしておまわりになる間は、七拳脛ななつかはぎという者が、いつもご料理番としてお供について行きました。

御父上おんちちうえの景行天皇けいこうてんのうは、おん年百三十七でおかくれになりました。

朝鮮征伐ちようせんせいばつ

一

仲哀天皇ちゆうあいてんのうは、ある年、ご自身で熊襲くまそをお征伐せいばつにおくだりになり、筑前ちくぜんの香椎かしいの宮というお宮におとどまりになつていらつしやいました。

そのとき天皇は、ある夜、戦いくさのお手だてについて、神さまのお告げをいただくとおぼしめして、大臣の武内宿禰たけのうちのすくねをお祭場まつりばへお坐らせになり、御自分はお琴ことをおひきになりながら、お二人でお祈りいのりをなさいました。そうすると、どなたか一人の神さまが、皇后おきながたらしひめの息長帯媛おきながたらしひめのおからだにお乗りうつりになり、皇后のお口をお借りになつて、

「これから西の方にあるひとつの国がある、そこには金銀をはじめ、目もまぶしいばかりの、さまざまの珍しい宝めずらしいたからがどつさりある。つまらぬ熊襲くまその土地よりも、まずその国をあなたのものにしてあげよう」とおつしやいました。

「しかし、高いところへ登つて西の方を見ましても、そちらの方はどこまでも大海おおうみばかりで、国などはちつとも見えないではありませんか」と、天皇はお答えになりました。そしてお心のうちでは、

「これはほんとうの神さまではあるまい。きっといつわりを言う神が乗りうつたにちがいない」とおぼしめして、それなりお琴ことをおしのけて、だまつておすわりになっていました。

すると神さまはたいそうお怒りいかになつて、

「そんな、わしの言葉ことばをうたぐつたりするものには、この国も任せてはおかれない。あなたはもう、さつさと死んでおしまいなさるがよい」と、おおせになりました。

宿禰すくねはその言葉を聞くと、びつくりして、

「これはたいへんでございます。陛下よ、どうぞもつとお琴をおひきあそばしませ」と、あわててご注意申しあげました。

天皇は仕方なしに、しづしづお琴をおひき寄せになつて、しばらくの間、申しわけばかりにぼつぽつひいておいでになりましたが、そのうちにまもなく、ふツつりとお琴の音ねがとだえてしまいました。

宿禰すくねはへんだと思つて、灯ひをさし上げて見ますと、天皇はもはやいつのまにかお息が絶えて、その場にお倒れたおになつていらつしやいました。

皇后も宿禰すくねも、神さまのお罰ばつに驚き怖れて、急いでそのお空なき骸がらを飯のお宮へお移し申しました。そしてまず第一番に、神さまのお怒りをおなだめ申すために、そのあたりの国じゆうで生きた獣けものの皮を剥はいだり、獣を逆さかはぎにしたものをはじめとして、田の畔くろをこわしたものの、溝みぞをうめたもの、汚きたないものをひりちらしたものの、そのほか言うも穢けがらわしいような、さまざまの汚ない罪を犯したものをたちをいちいちさがし出させて、御幣ごへいをとつて、はらい清めて、国じゆうのけがれをすっかりなくしておしまいになりました。そして、宿禰すくねが再びお祭場に坐すわつて、改めて神さまのお告げをお祈り申しました。

すると神さまからは、この前おつしやつた西の国のことについて、同じようなおおせがありました。

「それからこの日本の国は、今、皇后のお腹なかにいらつしやるお子がお治めになるべきものだ」とおつしやいました。

皇后は、そのときちようどお身重みおもでいらつしやいました。宿禰すくねはそのおおせを聞いて、「では、恐れおそながら、今、皇后のお腹においでになりますお子さまは、男のお子さまと女

のお子さまと、どちらでいらつしやりましたよう」とうかがいますと、

「お子はご男子なんしである」とお告げになりました。

宿禰すくねはなお、すべてのことをうかがつておこうと思ひまして、

「まことにおそれいますが、かようにいちいちお告げを下さいますあなたさまは、どなたさまでいらつしやいますか。どうぞお名まえをおあかしく下さいまし」と申しあげました。神さまは、やはり皇后のお口を通して、

「これはすべて天照大神あまてらすおおかみのおぼしめしである。また、底筒男命そこつつおのみこと、中筒男命なかつつおのみこと、上筒男命うわつつおのみことの三人の神も、いっしよに申し下くだしているのだ」と、そこではじめてお名まえをお告げになりました。

神さまはなお改めて、

「もしそなたたちが、ほんとうにあの西の国を得ようと思うならば、まず大空の神々、地上の神々、また、山の神、海の神、海と河かわとの神々にことごとくお供えを奉たてまつり、それから私たち三人の神の御魂みたまを船のうえに祀まつつたうえ、まきの灰はいを瓠ひさごに入れ、また箸はしと盆ぼんとをたくさんこしらえてそれらのものを、みんな海の上に散らし浮かべて、その中を渡わたつて行くがよい」とおつしやつて、くわしく征伐せいばつの手順てじゆんをおしえてくださいました。

それで、皇后はすぐ軍勢をお集めになり、神々のお言葉ことばのとおり、すべてご用意を整えととのになつて、仰ぎようさん山さんなお船をめしつらねて、勇ましく大海のまん中へお乗り出でになりました。

そうすると海じゅうの、あらゆる大小の魚が、のこらず駈かけよつて来て、すつかりのお船をみんなで背せなか中にお担かつぎ申しあげて、わツしよいわツしよいと、威勢いせいよく押おしはこんで行きました。そこへ、ちようどつごうよく、追い手の風がどんどん吹き募つつて来ました。ですから、それだけのお船がみんな、かけ飛ぶように走つて行きました。

そのうちに、そのたいそうな大船に押しまくられた大浪おおなみが、しまいには大きな、すさまじい大海嘯おおつなみとなつて、これから皇后がご征伐になろうとする、今の朝ちよう鮮せんの一部分の新羅しんらの国へ、ふいにどんと打ち上げました。そして、あつという間まに、国じゅうを半分までも巻まき込こんでしまいました。

皇后の軍勢は、その大海嘯と入れちがいに、息もつかせずうわあツと攻めせこみました。すると新羅しんらの王はすつかり怖れおそれちぢこまつて、すぐに降参こうさんしてしまいました。

国王は、

「私どもはこれからいついつまでも、天皇のおおせのままに、おうま飼かいの下郎げろうとなりまし

て、いつしようにけんめいにご奉公申しあげます。そして毎年船をどつきり仕立てまして、その船底の乾くときもなく、棹や櫂の乾くまもないほどおうかがわせ申しまして、絶えず貢物を奉り天地が亡びますまで無久にお仕え申しあげます」と、平蜘蛛のようになつておちかいをいたしました。

それで皇后はさつそくお聞き届けになりまして、新羅の王をおうま飼ということにおきめになり、その隣の百済をもご領地にお定めになりました。そしてそのお印に、お杖を、新羅の王宮の門のところに突き刺してお置きになりました。

それから最後に、お社をお作りになつて、今度のご征伐についていちいちお指図をしてくださった、底筒男命以下三人の神さまを、この国の氏神さまにお祀りになつた後、ご威風堂々と新羅をおひき上げになりました。

二

おん母上の皇后はその前に、まだご征伐のお途中でお腹のお子さまがお生まれになろうとしました。それで、どうぞ今しばらくの間はご出産にならないようにとお祈りになつて、

そのお呪まじないに、お下着のお腰こしのところへ石ころをおつるしになり、それでもつて当分お腹をしずめておおきになりました。

するとお子さまは、ちゃんと筑紫へお凱旋がいせんになってからご無事にお生まれになりました。それはかねて神さまのお告げのとおりりっぱな男のお子さまでいらつしやいました。この小さな天皇には、ご誕生たんじょうのときに、ちようと、軛ともといって弓ゆみを射るときに左の臂ひじにつける革具かわぐのとおりの形をしたお盛肉もりにくが、お腕うでに盛りあがっておりました。皇后はこれをお名まえにお取りになつて、大軛おおとも命とお名づけになりました。すなわち後にお呼び申す応神天皇おうじんてんのうさまです。その軛とものお肉のことをうけたまわったものたちは、天皇がお母上のお腹なかのうちから、すでに天下をお治めになつていたということは、これでもわかると言つて、みんな畏れ入おそりました。

また、皇后はご出征のまえに、肥前ひぜんの玉島たましまというところにおいでになつて、その川のほとりでお食事をなさつたことがありました。

それがちようど四月で、あゆが取れるころでした。皇后はためしにその川中の石の上にお下りになつて、お下袴したばかまの糸をぬいて釣糸つりいとになされ、お食事のおあとのご飯粒はんつぶを餌えさにして、ただでも決して釣つることができないあゆをちゃんとおつり上げになりました。

ですからこの地方では、その後いつも四月のはじめになりますと、女たちがみんな下袴かまの糸をぬいて、飯粒めしつぶを餌にしてあゆを釣り、ながく皇后のお徳をかたりつたえる印しるしにしておりました。

三

おん母上の皇后は、ついで熊襲くまそをも難なくご平定になって、いよいよ大和やまとにおかえりになることになりました。

しかし、大和には、香坂王かごさかのみこ、忍熊王おしくまのみことおっしゃる、お二人のお腹はらちがいの皇子などがおいでになるので、うっかりしていると、天皇がお小さいのにつけ入ってどんな悪い事をお企たくらみになるかわからないとお気づかいになりました。

それで皇后は、ちゃんとお策さくりやく略をお立てになって、喪船もふねを一そうお仕立てになり、お小さな天皇をその中へお乗せになりました。

そして天皇はもはやとくにお亡なくなりになったとお言いふらしになり、そのお空骸なきがらをつれておかえりになるていにして、筑紫つくしをお立ちになりました。

こちらは香坂、忍熊の二皇子は、それをお聞きになりますと、案のとおり、ご自分たちがあとを取ろうとおかかりになりました。それでまず第一番に皇后の軍勢を待ちうけて討ち亡ぼそうとおぼしめして、にわかには兵を集めて、摂津の斗賀野というところまでご進軍になりました。

皇子たちは、その野原でためしに獵をして、その獲物によつて、さいさきを占つてみようとなさいました。

香坂皇子は、くぬぎの木に上つて、その獵の有様を見ていらつしやいました。すると、ふいにそこへ、手傷を負つた大きないのししがあらわれて、そのくぬぎの木の根もとをどんどん掘りにかかりました。そしてまもなくすとんと掘り倒したと思ひますと、いきなり香坂皇子に飛びかかつて、ががつ皇子を食べてしまいました。

しかし、弟さまの忍熊皇子は、そんな悪い前兆にもとんじやくなしに、そのまま軍勢をおひきつれになり、海ばたまで押しかけて、待ちかまえていらつしやいました。

そのうちに、皇后がたのお船が見えて来ました。忍熊王は、その中の喪船には、兵たいたちが乗つていないはずなので、まずまづ先にその船を目がけてお討ちかからせになりました。

ところがその船の中には、前もってちゃんとよりすぐりの兵が忍ばせてありました。その兵士たちは船がつくなり、ふいに、うわツと飛び下りて、たちまち、はげしい戦をはじめました。

そのとき、忍熊王の軍勢には、伊佐比宿禰というものが総大将になっていました。それに対して皇后方からは建振熊命という強い人が將軍となつて攻めかけました。

建振熊命は見る見るうちに宿禰の軍勢を負かし崩して、ぐんぐんと、どこまでも追つかけて行きました。すると敵は山城でふみ止まつて、頑固に防ぎ戦をしました。建振熊命は、何を言いながら、死にもの狂いで攻めかけ攻めかけしました。しかし、どんなにあせつても敵はそれなりひと足も退こうとはしませんでした。

建振熊命は、しまいには、これでは果てしがないと思ひ直して、急に味方の兵をひきまとめるといふしよに、向かうの軍勢に向かつて、

「実は皇后が急におなくなりになつたので、われわれはもう戦をする気はない」と申し入れながら、その目の前で全軍の兵士たちに弓の弦をことごとく断ち切らせて、さもほんとうのように、伊佐比宿禰に降参をしました。

すると伊佐比宿禰いさひのすくねはそれですっかり気をゆるして、自分のほうもひとまずみんなに弓の弦つるをはずさせ、いっさいの戦道具いくさをも片づけかたさせてしまいました。

建振熊命たけふるくまのみことはそれを見すまして、

「それッ」と合い図をしますと、部下の兵たちは、髪かみの中に隠かくしていた、かけがえの弦を取り出して瞬またたくまに弓を張つて、

「うわッ」と、哄ときを上げて攻めかかりました。

敵はまんまと不意を討うたれて、総くずれになってにげ出しました。建振熊命たけふるくまのみことは勝

に乗じてどんどんと追いまくって行きました。

すると敵勢てきぜいは近江おうみの逢坂おうさかというところまでにげのびて、そこでいったん踏み止ふとどまつて戦いましたが、また攻めくずされて、ちりぢりににげて行きました。

建振熊命たけふるくまのみことは、とうとうそれと同じ近江おうみの篠波ささなみというところで追いつめて、敵の

兵たいという兵たいを一人ものこさず斬きり殺してしまいました。

そのとき忍熊王おしくまのみこと伊佐比宿禰いさひのすくねとは、危あやうく船に飛び乗って、湖水の中へにげ出しました。

しかしぐずぐずしていると今につかまってしまうのが目に見えていましたので、皇子おうじは

宿禰すくねに向かつて、

さあ、おまえ、

振熊ふるくまに殺されるよりも、

鳩かいつぶり鳥のように、

この湖水にもぐつてしまおうよ。

とお歌いになり、二人でぎんぶと飛び込こんで、それなり溺れ死おほにに死んでおしまいになりました。

四

皇后はそれでいよいよめでたく大和やまとへおかえりになりました。
しかし武内宿禰たけのうちのすくねだけは、お小さな天皇をおつれ申して、穢けがれ払いはらの禊みそぎということを
しに、近江おうみや若狹わかさをまわつて、越前えちぜんの鹿角つぬがというところに仮のお宮を作り、しばらくの

間そこに滞在たいざいしておりました。

するとその土地に祀まつられておいでになる伊奢沙和氣大神いささわけのおおかみという神さまが、あるばん宿禰すくねの夢に現われていらしつて、

「わしの名を、お小さい天皇のお名と取りかえてくれぬか」とおっしゃいました。
宿禰すくねは、

「それはもつたいないとおせでございます。どうもありがとうございます」とお答え申しました。大神おおかみは、「それでは、明日あすお供をして海うみばたへ来るがよい。名を取りかえてくださったお礼を上げようから」とおっしゃいました。

それであくる朝早く、天皇をおつれ申して海岸へ出て見ますと、みんな鼻の先に傷きずをうけた、それはそれはいそうな海豚いるかが、浜じゆうへいつぱいうち上げられておりました。

宿禰すくねはさっそくお社やしろへお使いをたてて、

「食さべ料のお魚かなをどつさりありがとうございますと存じます」とお礼を申しあげました。

天皇はそれから大和やまとへおかえりになりました。

お待ち受けになつていたお母上の皇后は、それはそれは大喜びをなすつて、さっそくご用意のお酒を出させて、お祝いのおさかもりをなさいました。

皇后は、

このお酒は、わたし私がかもした酒ではない。

薬の神のすくなひこなのかみ少名彦名神があなたのご運をお祝いして、

喜びさわいでつくつてくだされたお酒だから、

のこさず、すっかりめし上がってください。

さあさあどうぞ。

という意味をお歌いになりました。

すくね宿禰は天皇に代わって、

このお酒をつくつた人は、

つづみうす鼓を臼の上に立てて、

歌いながら、舞まいながら、

喜び喜びつくつたせいでございますか、

それはそれはいそうよいお酒で、
いただきますとひとりでに歌いたく、
舞いたくなつてまいります。

ああ楽しや。

とお答えの歌を歌いながら、ともどもお喜び申しました。

後の世の人は、この母上の皇后の、いろんな雄々^{おお}しい大きなお手柄^{てがら}をおほめ申しあげて、
お名まえを特に神功皇后^{じんぐうこうごう}とおよび申しております。

赤い玉

一

神功皇后のお母方のご先祖については、こういうお話が伝わっています。

それは、この時分から、もともとも昔、新羅の国の阿具沼という沼のほとりで、ある日一人の女が昼寝をしておりました。すると、ふしぎなことには、日の光がにじのようになつて、さつと、その女のお腹へ射しました。

それをちように通りかかった一人の農夫が見て、へんなこともあるものだと思いながら、それから、いつもその女のそぶりに目をつけていますと、女はまもなくお腹が大きくなつて、一つの赤い玉を生み落としました。農夫はその玉を女からもらつて、物につつんで、いつも腰につけていました。

この農夫は谷間に田を作つておりました。ある日農夫は、その田で働いている人たちの

たべ物を、うしに負わせて運んで行きますと、その谷間で、あめのひほこ天日矛という、この国の王子に出会いました。

王子は農夫がへんなどころへうしを引いて行くのを見て、

「これこれ、そちはどうしてそのうしへたべ物などを乗せてこんなところへはいって来たのだ。きつと人に隠かくれてそのうしも殺して食おうというのであらう」と言いながら、いきなり農夫をつかまえてろうやへつれて行こうとしました。農夫は、

「いえいえ私はけつしてこのうしを殺そうなどとするのではございません。ただこうして百ひやくしやう姓せいたちのたべ物を運んでまいりますだけです」と、ほんとうのままを話しました。それでも王子は、

「いやいや、うそだ」と言つて、なかなかゆるしてくれないので、農夫は腰こしにつけている例の赤い玉を出して、それを王子にあげて、やつとのことで放してもらいました。

王子はその玉をおうちへ持つて帰つて、床とこの間に置いておきました。すると赤い玉が、ふいに一人の美しい娘になりました。王子はその娘を自分のお嫁よめにもらいました。

そのお嫁は、いつもいろいろの珍めずらしいお料理をこしらえて、王子に食べさせていましたが、王子はだんだんにわがままを出して、しまいにはお嫁をひどくののしりとばすように

なりました。

するとお嫁のほうではとうとうたまりかねて、

「わたし私はもうこれぎり親たちの国へ帰つてしまいます。もともと私は、あなたのような方のお嫁になつてばかりにされるような女ではありません」と言いながら、そのうちをぬ抜け出して、小船に乗つて、はるばるとせつつ摂津の難波なにわの津まで逃げて来ました。この女の人は後に阿あ加流媛かろひめという神さまとしてその土地にまつられました。

王子の天日矛あめのひぼこは、そのお嫁のあとを追つかけて、とうとう難波なにわの海まで出て来ましたが、その海の神がさえぎつて、どうしても入れてくれないものですから、しかたなしにひきかえして、但馬たじまの方へまわつて、そこへ上陸しました。そして、しばらくそこに暮らしているうちに、後にはとうとうその土地の人をお嫁にもらつて、そのままそこへいつくことにしました。

この天日矛あめのひぼこの七代目の孫にあたる高たか額媛ぬひめという人がお生み申したのが、すなわち神功皇后じんぐうこうごうのお母上でいらつしやいました。例の垂すい仁にん天皇てんのうのお言いつけによつて、常世国とよのくにへたちばなの実を取りに行つたあのだ遅摩毛理たじまもりは、日矛ひぼこの五代目の孫の一人でした。日矛ひぼこはこちらへ渡わたつて来るときに、りつばな玉や鏡なぞの宝物ほうもつを八品持やしなつて来しました。

その宝物は、伊豆志の大神いずしのおおかみという名まえの神さまにしてまつられることになりました。

二

この宝物をまつった神さまに、伊豆志乙女いずしおとめという女神めがみが生まれました。この女神を、いろんな神々たちがお嫁にもらおうとなさいましたが、女神はいやがって、だれのところへも行こうとはしませんでした。

その神たちの中に、秋山の下氷男したびおとこという神がいました。その神が弟の春山はるやまの霞かすみ男おとこという神に向かつて、

「私わたしはあの女神をお嫁にしようと思つても、どうしても来てくれない。どうだ、おまえならもらつてみせるか」と聞きました。

「私わたしならわけなくもらつて来ます」と弟の神は言いました。

「ふふん、きつとか。よし、それではおまえがりっぱにあの女神めがみをもらつて見せたら、そのお祝いに、わしの着物をやろう。それからわしの身の丈たけほどの大がめに酒を盛もつて、海山の珍めづしいごちそうをそろえて呼よんでやろう、しかし、もしもらいそこねたら、あんな広こ

うげん
言を吐いた罰に、今わしがしてやろうと言ったとおりをわしにしてくれるか」と言いました。

弟の神は、おお、よろしい、それではかけをしようと誓いました。そして、おうちへ帰って、そのことをおかあさまにお話しますと、おかあさまの女神は、一晩のうちに、ふじのつるで、着物からはかまから、くつからくつ下まで織ったり、こしらえたりした上に、やはり同じふじのつるで弓をこしらえてくれました。

弟の神はその着物やくつをすっかり身につけて、その弓矢を持って、例の女神のおうちへ出かけて行きました。すると、たちまち、その着物やくつや弓矢にまで、残らず、一度にぱつとふじの花が咲きそろいました。

弟の神はその弓矢を便所のところへかけておきますと、女神はそれを見つけて、ふしぎに思いながら取りはずして持つて行きました。弟の神は、すかさず、そのあとについて女神のへやにはいつて、どうぞ私のお嫁になつてくださいと言いました。そして、とうとうその女神をもらつてしまいました。

二人の間には一人子供までできました。

弟の神は、それで兄の神に向かつて、

「私はあのとおり、ちゃんと女神めがみをもらいました。だから約束のとおり、あなたの着物をください。それからごちそうもどつさりしてください」と言いました。すると兄の神は、弟の神のことをたいそうねたんで、てんで着物もやらないし、ごちそうもしませんでした。弟の神は、そのことを母上の女神に言いつけました。すると女神は、兄の神を呼よんで、「おまえはなぜそんなに人をだますのです。この世の中に住んでいる間は、すべてりっぱな神々のなさるとおりをしなければいけません。おまえのように、いやしい人間のまねをする者はそのままにはしておかれない」と、ひどく怒おこりつけました。それから、そこいらの川の中の島にはえているたけを伐きつて来て、それで目の荒あらいあらかごを作り、その中へ、川の石に塩をふりかけて、それをたけの葉につつんだのを入れて、

「この兄の神のようなくそつきは、このたけの葉がしおれるようにしおれてしまえ。この塩がひるようにひからびてしまえ。そして、この石が沈しずむように沈み倒たおれてしまえ」とのろつて、そのかごをかまどの上に置かせました。

すると兄の神は、そのたたりで、まる八年の間、ひからびしおれ、病やみつかれて、それは苦しい目を見ました。それでとうとう弱り果はてて泣く泣く母上の女神におわびをしました。

女神はそのときやつとのろいをといてやりました。そのおかげで兄の神は、またもとの
とおりのじょうぶなからだにかえりました。

宇治うじの渡わたし

一

お小さな応仁おうじんてんのう天皇も、そのうちにすっかりご成人になって、大和やまとの明あきの宮みやで、ご自身まつりごとに政をお聞きになりました。

あるとき、天皇は近江おうみへご巡幸じゆんこうになりました。そのお途中で、山城やましの宇治野うじのにお立ちになって、葛野かつのの方をご覧らんになりますと、そちらには家々も多く見え、よい土地もどつさりあるのがお目にとまりました。

天皇はそのながめを歌にお歌いになりながら、まもなく木幡こばたというところまでおいでになりますと、その村のお道筋で、それはそれは美しい一人の少女にお出会いになりました。

天皇は、

「そちはだれの娘むすめか」とおたずねになりました。

「私は比布礼能意富美ひふれのおおみと申します者の子で、
宮主矢河枝媛みやぬしやかわえひめと申します者でございます」
と、その娘はお答え申しました。

すると、天皇は

「ではあす帰りにそちのうちへ行くぞ」とおっしゃいました。

媛ひめはおうちへ帰って、すべてのことをくわしくおとうさまに話しました。

おとうさまの意富美おおみは、

「それではそのお方は天子さまだ。これはこれはもったいない。そちも十分気をつけて失礼のないようによくおもてなし申しあげよ」と言いきかせました。そしてさつそくうちじゆうを、すみずみまですっかり飾かざりつけて、ちゃんとお待ち申ししておりました。

天皇のおおせのとおり、あくる日お立ちになりました。意富美おおみらは怖おそれかしこみながら、ごちそうを運んでおもてなしをしました。

天皇は矢河枝媛やかわえひめが奉たてまつるさかずきをお取りになつて、

この料理のかには、

越前えちぜん敦賀つるがのかにが、

横よこざまにはって、

近江おうみを越こえて来たものか。

わしもその近江おうみから来て、

木幡こばたの村でおまえに会った。

おまえのうしろすがた後姿は、

盾たてのようにすりりとしている。

おまえのきれいな歯はなみ並は、

しいの実みのように白く光っている。

顔には九邇坂わにざかの土を、

その土は、

上土うわつちは赤く、

底土そこつちは赤黒いけれど、

中土なかつちの、

ちように色のよいのを

まゆずみ
眉墨にして、

こまゆ
色濃く眉をかいている。

おまえはほんとうにきれいな子だ。

とこういう意味のお歌を歌っておほめになりました。

天皇は、この美しい矢河枝媛やかわえひめを、後にお妃きさきにお召めしになりました。このお妃から、宇うじ

治わかいらつこ若郎子とおつしやる皇子がお生まれになりました。

天皇には、すべてで、皇子が十一人、皇女が十五人おありになりました。

その中で、天皇は、矢河枝媛やかわえひめのお生み申した若郎子皇子わかいらつこおうじを、いちばんかわいくおぼし

めしていらつしやいました。

あるとき天皇は、その若郎子皇子わかいらつこおうじとはそれぞれお腹はらちがいのお兄上でいらつしやる大

山守命おやまりのみこととおおささぎのみこと
と大雀命おおささぎのみことのお二人をお召めしになって、

「おまえたちは、子供は兄と弟とどちらがかわいいものと思うか」とお聞きになりました。

おおやまりのみこと
大山守命は、

「それはだれでも兄のほうをかわいくおもいます」と、どうさもなくお答えになりました。

しかしお年下の^{おおささぎのみこと}大雀命は、お父上がこんなお問いをおかけになるのは、わたしたち二人をおいて、弟の^{わかいらつこ}若郎子にお位をお譲り^{ゆず}になりたいというおぼしめしに相違ない^{そうい}と、ちゃんと、天皇のお心持をおさとりになりました。それでそのおぼしめしに添^そうように、「私は弟のほうがかわいいだろうと思います。兄のほうは、もはや成人しておりますので、何の心配もございませんが、弟となりますと、まだ子供でございますから、かわいそうでございます」とお答えになりました。

天皇は、

「それは雀^{さざぎ}の言うとおりである。わしもそう思っている」とおおせになり、なお改めて、「ではこれから、そちら二人と^{わかいらつこ}若郎子と三人のうち、^{おおやまもり}大山守は海と山とのことを^{つかさど}司れ、雀^{さざぎ}はわしを助けて、そのほかのすべての政をとり行なえよ。それから^{わかいらつこ}若郎子には、後にわしのあとを継^ついで天皇の位につかせることにしよう」と、こうおっしゃって、ちゃんと、お三人のお役わりをお定めになりました。

^{おおやまもりのみこと}大山守命は、後に、このお言いつけにおそむきになって、^{わかいらつこおうじ}若郎子皇子を殺そうとさえなさいましたが、ひとり^{おおささぎのみこと}大雀命だけは、しまいまで天皇のご命令のとおりにおつくしになりました。

二

天皇は日向ひゆうがの諸もろ郡あがたぎみ君みという者の子に、髪かみ長なが媛ひめという、たいそうきりよしのよい娘むすめがあるとお聞きになりました、それを御ご殿てんへお召めし使つかいになるつもりで、はるばるとお召めしのぼせになりました。

皇子おうじの大おお雀ささぎ命のみことは、その髪かみ長なが媛ひめが船ふねで難な波なみの津つへ着ついたところをらん覧らんになり、その美しいのに感心しておしまになりました。それで武たけ内のうちの宿すく禰ねに向むかって、「こんど日ひ向ゆうがからお召めしよせになったあの髪かみ長なが媛ひめを、お父上ちちのうへに願ねがいして、私わたしのお嫁よめにもらつてくれないか」とお頼たのみになりました。

宿すく禰ねはかしこまって、すぐにそのことを天皇に申しあげました。

すると天皇は、まもなくお酒さかもり盛もりのお席まきへ大おお雀ささぎ命のみことをお召めしになりました。そして、美しい髪かみ長なが媛ひめにお酒をつぐかしわの葉をお持もたせになって、そのまま命みことにおくだしになりました。

天皇はそれといっしよに、

わしが、子どもたちをつれて、
のびるをつみに通り通りする、
あの道ばたのたちばなの木は、
上の枝々^{えだえだ}は鳥に荒^{あら}され、
下の枝々は人にむしられて、
中の枝にばかり花がさいている。
そのひそかな花の中に、
小さくかくれている実のような、
しとやかなこの乙女^{おとめ}なら、
ちようどおまえに似^にあっている。
さあつれて行け。

という意味をお歌に歌ってお祝いになりました。

皇子^{おうじ}はとうから評判にも聞いていた、このきれいな人を、天皇のお許^{きさき}しでお妃^{きさき}におもら

いになったお嬉しさを、同じく歌にお歌いになって、大喜びで御前をおさがりになりました。

三

この天皇の御代には、新羅の国の人がどつさり渡つて来ました。武内宿禰はその人々を使つて、方々に田へ水を取る池などを掘りました。

それから百済の国の王からは、おうま一頭、めうま一頭に阿知吉師という者をつけて献上し、また刀や大きな鏡なずをも献じました。

天皇は百済の王に向かつて、おまえのところに賢い人があるならばよこすようにとおおせになりました。王はそれでさつそく和邇吉師という学者をよこしてまいりました。

そのとき和邇は、十巻の論語という本と、千字文という一巻の本とを持って来て献上しました。また、いろいろの職工や、かじ屋の卓素という者や、機織の西素という者や、そのほか、酒を造ることのじょうずな仁番という者もいっしょに渡つて来ました。

天皇はその仁番、またの名、須須許理のこしらえたお酒をめしあげました。そして、

「ああ酔^よった、須^す須^ず許^こ理^りがかもした酒に心持よく酔った。おもしろく酔った」
 という意味の歌をお歌いになりながら、お宮の外へおでましになって、河^{かわ}内^{うち}の方へ行く道
 のまん中にあつた大きな石を、おつえをあげてお打ちになりますと、その石がびつくりし
 て飛びのきました。

四

天^{てん}皇^{のう}は後にとうとうおん年百三十でおかくれになりました。

それで大^{おお}雀^{ささぎ}命^{のみこと}は、かねておおせつかつていらつしやるとおり、若^{わか}郎^{いらつこ}子^こをお位に

おつけしようとなさいました。

ところがお兄上の大^{おお}山^{やま}守^{まも}命^{りのみこと}は、天皇のおおせ残しにそむいて、若^{わか}郎^{いらつこ}子^こを殺して

自分で天下を取ろうとおかかりになり、ひそかに兵をお集めになりました。

大^{おお}雀^{ささぎ}命^{のみこと}は、そのことを早くもお聞きつけになったので、すぐに使いを出して、若^わ

郎^ら子^うにお知らせになりました。

若^わ郎^ら子^うはそれを聞くとびつくりなすつて、大急ぎでいろいろの手はずをなさいました。

皇子はまず第一に、宇治川のほとりへ、こつそりと兵をしのばせておおきになりました。それから、宇治の山の上に絹の幕を張り、とぼりを立てまわして、一人のご家来を、りっぱな皇子のようにしたてて、その姿が山の下からよく見えるように、とぼりの一方をあげて、その中のいすにかけさせておおきになりました。そして、そこへいろいろの家来たちを、うやうやしく出たりはいったりおさせになりました。

ですから、遠くから見ると、だれの目にも、そこには若郎子ご自身がお出むきになっているように見えました。

皇子はそれといっしよに、大山守命が下の川をおわたりになるときに、うまくお乗せするように、船をわざとたつた一そうおそなえつけになり、その船の中のすのこには、さなかつらというつる草をついてべとべとの汁にしたものをいちめんに塗りつけて、人が足を踏みこむとたちまち滑りころぶようなしかけをさせてお置きになりました。

そしてご自分自身は、粗末なぬのの着物をめし、いやしい船頭のようにじょうずにお姿をお変えになつて、かじを握つて、その船の中に待ち受けておいでになりました。

すると大山守命は、おひきつれになつた兵士を、こつそりそこいらへ隠れさせておおきになり、ご自分は、よろいの上へ、さりげなく、ただのお召物をめして、お一人

で川の岸へ出ておいでになりました。

するとそちらの山の上にりっぱな絹のとぼりなどが張りつらねてあるのがすぐにお目にとまりました。

みこと

命はそのとぼりの中にかめしくいすにかけている人を、若郎わかいらつこ子だと思いこんでおしまいになりました。それでさつそくその船にお乗りになって、向こうへおわたりになりました。

命は船頭に向かって、

「おい、あすこの山に大きなおいじしがいるという話だが、ひとつそのししをとりたいものだね。どうだ、おまえとつてくれぬか」とお言いになりました。

船頭の皇子は、

「いえ、それはとてもだめでございます」とお答えになりました。

「なぜだめだ」

「あのししは、これまでいろんな人がとうとうとしましたが、どうしてもとれません。ですから、いくらあなたが欲しいとおぼしめしても、とてもだめでございます」

こうお答えになるうちに、船はもはやちょうど川のまん中あたりへ来ました。すると皇お

子^{うじ}はいきなり、そこでどしんと船^{かたむ}を傾けて、命^{みこと}をざんぶと川の中へ落としこんでおしまいになりました。

命はまもなく水の上へ浮き出て、顔だけ出して流され流されなさりながら、

ああわしは押^おし流される。

だれかすばやく船を出して、

助けに来てくれよ。

という意味をお歌いになりました。

するとそれといつしよに、さきに若郎子^{わかいらつこ}が隠^{かく}しておおきになつた兵士たちが、わあツと一度に、そちこちからかけだして来て、命を岸へ取りつかせないように、みんなで矢^やをつがえ構^{かま}えて、追い流し追い流しました。

ですから命はどうすることもおできにならないで、そのまま訶^{かわ}和^わ羅^{らの}前^{さき}というところまで流れていらしって、とうとうそこでおぼれ死^しにに死んでおしまいになりました。

若郎子^{わかいらつこ}の兵士たちは、ぶくぶくと沈^{しず}んだ命^{みこと}のお死^しがい^{みこと}を、かぎで探^{さぐ}りあててひきあげ

ました。

若郎子わかいらつこはそれをご覧になりながら、

「わしは伏せ勢ふぜいの兵たちに、もう矢を射放いはなさせようか、もう射殺させようかと、いくども思い思いたけれど、一つにはお父上のことを思いかえし、つぎには妹たちのことを思い出して、同じお一人のお父上の子、同じあの妹たちの兄でありながら、それをむざむざ殺すのはいたわしいので、とうとう矢一本射放すこともできないでしまった」という意味をお歌いになり、そのまま大和やまとへおひきあげになりました。

そしてお兄上のお死なりがいを奈良の山にお葬ほうむりになりました。

五

大雀命おおささぎのみことは、それでいよいよお父上のおおせのとおり、若郎子皇子わかいらつこおうじにお位におつきになることをおすすめるになりました。

しかし皇子は、お父上のおあとはおあにいさまがお継つぎになるのがほんとうです。おあにいさまをさしおいてお位にのぼるなぞということは、私にはとてもできません。どうぞ

お許しくださいとおつしやつて、どこまでもお兄上の命みことの顔をお立てになろうとなさいました。

しかし命は命で、いかなることがあつても、お父上のお言いつけにそむくことはできないとお言いとおしになり、長い間お二人でお互たがいに譲ゆずり合つていらつしやいました。

そのときある海人あまが、天皇へ献けんじょう上する物を持つてのぼつて来しました。

その海人が、大雀命おおささぎのみことのところへ伺うかがいますと、命みことは、それは若郎子皇子わかいらつこおうじに奉たてまつれ、

あの方が天皇でいらつしやるとおつしやつて、お受けつけになりますし、それではと言つて皇子の方へうかがえば、それはお兄上の方へ献けんぜよとおおせになりました。

海人あまはあつちへ行つたり、こつちへ来たり、それが二度や三度ではなかつたので、とうとう行つたり来たりにくたびれて、しまいにはおんおん泣なきだしてしまいました。そのために、「海人ではないが、自分のものをもてあまして泣く」ということわざえでできました。

お二人はそれほどになすつて、ごめいめいにお義理をつくしていらつしやいました。が、そのうちに、若郎子皇子わかいらつこおうじがふいにお若死わかじにをなすつたので、大雀命おおささぎのみこともやむをえず、ついにお位におつきになりました。後の代から仁徳天皇にんとくてんのうとお呼び申よすのがすな

わちこの天皇でいらつしやいます。

難波のお宮

一

仁徳天皇はお位におのぼりになりますと、難波の高津の宮を皇居にお定めになり、葛城の曾都彦という人の娘の岩野媛という方を改めて皇后にお立てになりました。

天皇がまだ皇子大雀命でいらつしやるとき、ある年摂津の日女島という島へおい

でになつて、そこでお酒盛をなすつたことがありました。すると、たまたまその島にがらが卵をうんでおりました。皇子は、日本でがらが卵をうんだということは、これまで一度もお聞きになつたことがないものですから、たいそうふしぎにおぼしめして、あとで武

内宿禰を召して、

「そちは世の中にまれな長命の人であるが、いったい日本でがらが卵をうんだという話を聞いたことがあるか」とこういう意味を歌に歌つておたずねになりました。

すくね
宿禰は、

「なるほど、それはごもつものおたずねでございます。私もこれほど長生きをいたして
おりますが、今日まで、かつてそういうためしを聞きましたことがございません」と、同
じように歌に歌って、こうお答え申しあげた後、おそばにあつたお琴ことをお借り申して、
「これはきつと、あなたさまがついに天下をお治めになるというめでたい先づれに相違さういご
ざいません」と、こういう意味の歌をお琴ことをひいて歌いました。皇子おうじはそのとおり、十五
人もいらしたごきようだいの中から、しまいにお父上の天皇のおあとをお継つぎになりま
した。

ご即位そくいになつた後、天皇は、あるとき、高い山におのぼりになつて四方の村々をお見し
らべになりました。そしてうちしおれておおせになりました。

「見わたすところ、どの村々もただひっそりして、家々からちつとも煙があがっていない。
これではいたるところ、人民たちが炊たいて食べる物がないほど貧窮ひんきゆうしているらしい。
どうかこれから三年の間は、しもじもから、いっさい租税そぜいをとるな。またすべての働きに
使うのを許してやれ」とおおせになりました。

それでそのまる三年の間というものは、宮中きゆうちゆうへはどこからも何一つお納物おさめものをし

ないので、天皇もそれはそれはひどいご不自由をなさいました。たとえばお宮が破れこわれても、お手もとにはそれをおつくりになるご費用もおありになりませんでした。しかし天皇はそれでも寸分すんぶんもおいといにならないで、雨がひどく降るたんびには、おへやの中へおけをひき入れて、ざあざあもと漏り入る雨あまもれをお受けになり、ご自分自身はしずくのおちないところをお見つけになって、御座所ござしよを移し移ししておしのぎになりました。

それから三年の後に、再び山にのぼってご覧になりますと、こんどはせんとはすっかりうって変わって、お目の及ぶ限りおよかぎ、どの村々にも煙がいつぱい、勢いよく立ちのぼっております。天皇はそれをご覧になって、みなのも、もうすっかりゆたかになったとおっしゃって、ようやくご安心なさいました。そして、そこではじめて租税そぜいや夫役ふうえきをおおせつけになりました。

すると人民は、もう十分にたくわえもできていましたので、お納物おさめものをするにも、使働しどうきにあがるのにも、それこそ楽々とご用うけたまわを承ることができました。

天皇はしもじもに對して、これほどまでに思いやりの深い方でいらつしやいました。ですから後の代よからも永くながお慕したい申しあげてそのご一代いちだいを聖帝せいいていの御代みよとお呼よび申しております。

二

この天皇の皇后でいらした岩野媛いわのひめは、それはそれは、たいへんにごしつとのはげしいお方で、ちよつとのことにも、じきに足ずりをして、火がついたようにお騒さわぎたてになりました。それですから、宮中きゆうちゆうに召めし使めわれている婦人たちは、天皇のおへやなぞへは、うつかりはいることもできませんでした。

あるとき天皇はそのころ吉備きびといつていた、今の備前びぜん、備中びちゆう地方の、黒崎くろさきというところに、海部直あまのあたえという者の子で、黒媛くろひめというたいそうきりよしのよい娘むすめがいるとお聞きになり、すぐに召めしのぼせて宮中でお召し使めいになりました。

ところが皇后がことごとにつけて、あまりにねたみおいじめになるものですから、黒媛くろひめはたまりかねてとうとうお宮を逃にげ出でしておうちへ帰かへつてしまいました。

そのとき天皇は、高殿たかどのにお上りになつて、その黒媛くろひめの乗のりつてゐる船ふねが難波なにわの港みなとを出でて行くのをご覧らんになりながら、

かわいそうに、あそこに黒媛くろひめがかえつて行く。

あの沖おきに、たくさんの小船こふねにまじつて、あの女の船が出て行くよ。

とこういう意味のお歌をお歌いになりました。

すると皇后は、そのことをお聞きになつて、ひどく怒おこつておしまいになり、すぐに人をやつて、黒媛くろひめをむりやりに船からひきおろさせて、はるかな吉備きびの国まで、わざと歩いておかえしになりました。

天皇はその後、黒媛くろひめのことをしじゅうあわれに思ひ思ひお暮らしになつていました。そんなわけで、天皇はついにある日、淡路島あわじしまを見に行くとおっしゃつて皇后のお手前をおつくろいになり、いったんその島へいらしたうえ、そこから、黒媛くろひめをたずねて、こつそり吉備きびまで、おくだりになりました。

黒媛くろひめは天皇を山方やまかたというところへおつれ申しました。そして、召めし上がり物にあつたものをこしらえてさしあげようと思ひまして、あおなをつみに出ました。すると天皇もいっしょに出てご覧になり、たいそうお興きよう深くおぼしめして、そのお心持をお歌にお歌いになりました。

天皇がいよいよお立ちになるときには、黒媛くろひめもお別れの歌を歌いました。媛ひめは天皇がわざわざそんなになすつて、隠かくれ隠れてまでおたずねくだすったもったいなさを、一生お忘れ申わすすことができませんでした。

三

皇后はその後、ある宴えん会かいをおもよおしになるについて、そのお酒をおつぎになる御みづな綱がし柏わというかしわの葉をとり、わざわざ紀伊きのくに国までお出かけになったことがありました。

そのおるすの間、天皇のおそばには八田やたのわかい若郎女いらつめという女官じよかんがお仕え申しておりました。

皇后はまもなく御綱みつな柏がしわの葉をお船につんで、難波なにわへ向かつて帰つていらつしやいました。そのお途中で、お供の中のある女たちの乗っている船が、皇后のお船におくれて行きするうちに、難波なにわの大渡おおわたりという海まで来ますと、向こうから一そこの船が来かかりました。その中には、高津たかつのお宮のお飲み水を取る役所で働いていた、吉備きびの生まれの、

ある身分みづんの低い仕丁よぼろで、おいとまをいただいておうちへ帰るのが、乗り合わせておりました。その者が船のすれちがいに、

「天皇さまは、このごろ やたのわかいらつめ 八田若郎女がすっかりお気に入り、それはそれはたいそうごちよう愛になつてゐるよ」としやべつて行きました。それを聞いた女どもはわざわざ大急ぎで皇后のお船に追いついて、そのことを皇后のお耳に入れました。

そうすると、例のご気性きしょうの皇后は、たちまちじりじりなすつて、せつかくそこまで持つておかえりになつた御綱みつな柏かしわの葉を、すっかり海へ投げすてておしまいになりました。それからまもなく船はこちらへ帰りつきましたが、皇后は若郎女わかいらつめのことをお考えになればなるほどおくやしくて、そのお腹立ちはらだまぎれに、港へおつけにならないで、ずんずん船を堀江ほりえへお入れになり、そこから淀川よどがわをのぼつて山城やましろまで行つておしまいになりました。

その時皇后は、

「私はあんまりにくらしくてたまらないので、こんなにあてもなく山城やましろの川をのぼつて来たものの、思えばやつぱり天皇のおそばがなつかしい。今この目の前の川べりには、鳥さ葉樹しづのきがはえている。その木の下には、茂しげつた、広葉ひろはのつばきがてかてかとまっかに咲さい

ている。ああ、あの花のように輝かがやきに充みち、あの広葉のようにお心広く、おやさしくいら
つしやる天皇を、どうして私はおしたわしく思わないでいられよう」とこういう意味のお
歌をお歌いになりました。

しかしそれかといつてこのまま急にお宮へお帰りになるのも少しいましくおぼしめ
すので、とうとう船からおあがりになつて、大和やまとの方へおまわりになりました。

そのときにも皇后は、

「私わたしはとうとう山城やましろ川をのぼり、奈良ならや小楯おだてをも通りすぎて、こんなにあちこちさまよ
つてはいるけれど、それもどこをひとつ見たいのでもない。見たいのは高津たかつのお宮よりほ
かにはなんにもない」という意味をお歌いになりました。

それからまた山城やましろへひきかえして、筒木つつぎというところへおいでになり、そこに住まっ
ている朝鮮ちようせんの帰化人きかじんの奴里能美ぬりのみという者のおうちへおとどまりになりました。

天皇はすべてのことをお聞きになりますと、鳥山とりやまという舎人とねりに向かつて、

「おまえ早く行つて会つてこい」という意味をお歌でおつしやつて、皇后のところへおつ
かわしになりました。そのつぎには、丸邇臣わにのおみくちこ口子くちこという者をお召めしになつて、

「皇后はあんなにいつまでもすねて、お宮へもかえつて来ないけれど、しかし心の中では

わしのことを思っているに相違ない。二人の間であるものを、そんなに意地を張らないでもよいであろうに」という意味を二つのお歌にお歌いになって、また改めて口子をお迎えにおやりになりました。

お使いの口子は、奴里能美のおうちへ着きますと、天皇のそのお歌をかたときも早く皇后に申しあげようと思ひまして、御座所のお庭先へうかがいました。

そのときにちようどひどい大雨がざあざあ降っておりまして。口子はその雨の中をものとわず、皇后のおへやの前の地びたへ平伏しますと、皇后は、つんとして、いきなり後ろの戸口の方へ立つて行っておしまいになりました。口子は怖る怖るそちらがわにまわつて平伏しました。そうすると皇后はまたついと前の方の戸口へ来ておしまいになりました。口子はあつちへ行つたりこつちへ来たりして土の上にひざまずいているうちに、雨はいよいよどしやぶりに降りつつ、そのたまり水が腰まで浸すほどになりました。口子は赤いひものついた、あい染めの上着を着ておりましたが、そのひもがびしよびしよになって赤い色がすっかり流れ出したので、しまいには青い着物もまっかに染まってしまうました。そのとき皇后のおそばには、口子の妹の口媛という者がお仕え申しておりました。口媛はおにいさまのそのありさまを見て、

「まあおかawaiiそうに、あんなにまでしておものを申しあげようとしているのに、見ている私には涙がこぼれてくる」

という意味を歌に歌いました。

皇后はそれをお聞きになつて、

「兄とはだれのことか」とおたずねになりました。

「さつきから、あすこに、水の中にひれ伏しておりますのが私の兄の口子でございます」

と、口媛は涙をおさえてお答え申しました。

口子はそのあとで、口媛と奴里能美の二人に相談して、これはどうしても天皇にこち

らへいらしつていただくよりほかには手だてがあるまいと、こう話を決めました。そこで

口子は急いでお宮へかえつて申しあげました。

「まいりまして、すっかりわけをお聞き申しますと、皇后さまがあちらへお出向きになりましたのは、奴里能美のうちに珍しい虫を飼つておりますので、ただそれをご覧になるためにおでかけになりましたのでございます。そのほかにはけつしてなんのわけもおありにはなりません。その虫と申しますのは、はじめはう虫でいますのが、つきには卵になり、またそのつきには飛ぶ虫になりました、順々に三度姿をかえる、きたいな虫だそうでござ

います」と、口子くちこは子供でも心得ているかいこのことを、わぎと珍めづしそうに、じょうずにこう申しあげました。

すると天皇は、

「そうか、そんなおもしろい虫がいるなら、わしも見に行こう」とおっしゃって、すぐにお宮をお出ましになり、奴里能美ぬりのみのおうちへ行幸ぎようこうになりました。

奴里能美ぬりのみは、口子くちこが申しあげたとおりの三みとおりの虫を、前もって皇后に献けんじよう上しておきました。

天皇は皇后のおへやの戸の前にお立ちになって、

「そなたがいつまでも怒おこつたりしているので、とうとうみんながここまで出て来なければならなくなつた。もうたいていにしてお帰りなさい」とお歌いになり、まもなくおともどもに難波なにわのお宮へご還幸かんこうになりました。

天皇はそれといつしよに、八田若郎女やたのわかいらつめにおいとまをおつかわしになりました。しかしそのかわりには、郎女いらつめの名まえをいつまでも伝え残すために、八田部やたべという部族をおこしえになりました。

四

それからあるとき天皇は、女鳥王めとりのみこという、あるお血筋ちすじの近い方を宮中きゆううちゆうにお召めしかかえになろうとして、弟さまの速総別王はやぶさわけのみこをお使いにお立てになりました。

王みこはさつそくいらしつて、そのおぼしめしをお伝えになりますと、女鳥王めとりのみこはかぶりをふつて、

「いえいえ私は宮中きゆううちゆうへはお仕え申したくございません。皇后さまがあんなにごしつと深くいらつしやるので、八田若郎女やたのわかいらつめだつてご奉公ができないでさがつてしまいましたではございませんか。それよりもこんな私でございしますが、どうぞあなたのお嫁よめにしてくださいまし」とお頼たのみになりました。

それで王みこはその女鳥王めとりのみこをお嫁になさいました。そして天皇に対しては、いつまでもご返事を申しあげないままでいらつしやいました。

すると天皇は、しまいにご自分で女鳥王めとりのみこのおうちへお出かけになり、戸口のしきいの上にお立ちになつてのぞいてご覧になりますと、王みこはちようど中でお機はたを織はつていらつしやいました。

天皇は、

「それはだれの着物を織っているのか」とお歌に歌ってお聞きになりました。すると女^{めとり}鳥王^{のみに}もやはりお歌で、

「これは速^{はやぶさ}総^{さわけ}別^{のみに}王^{のみに}にお着せ申しますのでございます」とお答えになりました。

天皇はそれをお聞きになつて、二人のことをすっかりおさとりになり、そのままお宮へおかえりになりました。

女鳥王^{めとりのみに}はそのあとで、まもなく速^{はやぶさ}総^{さわけ}別^{のみに}王^{のみに}が出ていらつしやいますと、

「もし。あなたさまよ。ひばりでさえもどんどん大空へかけのぼるではございませんか。

あなたはお名まえもたかの中のはやぶさと同じでいらつしやるのに、さあ早くささぎをと

り殺しておしまいなさい」とこういう意味をお歌いになりました。それはいうまでもなく、

天皇のお名が^{おおささぎのみにこと}大^お雀^{おそ}命^そなので、それをささぎにかよわせて、一ときも早く天皇をお殺

し申してご自分でお位におつきになるようにと、怖^{おそ}ろしい入れぢえをなすつたのでした。

そうすると、そのお歌のことが、いつのまにか天皇のお耳にはいりました。天皇はすぐ

に兵をあつめて速^{はやぶさ}総^{さわけ}別^{のみに}王^{のみに}を殺しにおつかわしになりました。

速^{はやぶさ}総^{さわけ}別^{のみに}王^{のみに}はそれと感づくと、びっくりして、女鳥王^{めとりのみに}といつしよにすばやく大和^{やまと}へ

逃げ出しておしまいになりました。そのお途中、倉橋山くらはしやまという険しい山をお越えになる
ときに、かわいい女鳥王めとりのみこはたいそうご難渋なんじゆうをなすつて、夫の王みこのお手にすがりすが
りして、やつと上までお上りになりました。

お二人はそこからさらに同じ大和やまとの曾爾そにというところまでいらつしやいますと、天皇の
兵がそこまで追いついて、お二人を刺し殺してしまいました。

そのとき軍勢ひきを率いて来たのは山辺大楯連やまべのおおだてのむらじというつわものでした。連は女鳥王
のお死がいのお手首に、りっぱなお腕飾うでかざりがついているのを見て、さつそくそれをはぎ
取つて、自分の家内かないに持つてかえつてやりました。

そのうちに宮中にあるご宴会えんかいがあつて、臣下の者の妻女たちが、おおぜいお召しにあ
ずかりました。すると大楯連おおだてのむらじの妻は、女鳥王めとりのみこのお腕飾うでかざりを得意とくいらしく手首に飾つ
てまいりました。皇后はそれらの女たちへ、お手ずから、お酒を盛もるかしわの葉をおくだ
しになりました。みんなはかわるがわる御前ごぜんへ出て、それをいただいてさがりました。

皇后はそのときに、ふと、連の妻の腕飾むらじにお目がとまりました。するとそれはかねて
お見覚えみおぼのある女鳥王めとりのみこのお持物もちものでしたので皇后はにわかにお顔色をお変えになり、こ
の女にばかりはかしわの葉をおくだしにならないで、そのまますぐにご宴席えんせきから追い出

しておしまいになりました。そしてさつそく夫の連をお呼びつけになつて、
「そちは人の腕飾りをぬすんで来て家内にやつたろう。あの速総別と女鳥の二人は、天皇に対して怖ろしい大罪を犯そうとしたのだから、かれたちが殺されたのはもとよりあたりまえである。しかしそちなぞからいえば、二人とも目上の王たちではないか。その人が身につけている物を、死んでまだ膚のあたかいうちにはぎとつて、それをおのれの妻に与えるなぞと、まあ、よくもそんなひどいことができたね」とおっしゃつて、ぐんぐんおいじめつけになつたうえ、ようしやなくすぐ死刑に行なわせておしまいになりました。

五

この天皇の御代に、兎寸川というある川の西に、大きな大きな大木が一本立っておりました。いつも朝日がさすたんびに、その木の影が淡路の島までとどき、夕日が当たると、河内の高安山よりもつと上まで影がさしました。

土地の者はその木を切つて船をこしらえました。するとそれはそれはいそがしく早く走れる船ができました。みんなその船に「枯野」という名前をつけました。そして朝晩それに

乗つて、淡路島^{あわじしま}のわき出るきれいな水をくんで来ては、それを宮中^{きゆうちゆう}のお召し料^めにさしあげておりました。

後にみんなは、その船が古びこわれたのを燃やして塩を焼き、その焼け残った木で琴^{こと}を作りました。その琴をひきますと、音が遠く七つの村々まで響^{ひび}いたということです。

天皇はついにおん年八十三でおかくれになりました。

おおすずこすず
大鈴小鈴

一

仁徳天皇には皇子が五人、皇女が一人おありになりました。その中で伊邪本別、水齒別、若子宿禰のお三方がつぎつぎに天皇のお位におのぼりになりました。

いちばんのお兄上の伊邪本別皇子は、お父上の亡きおあとをおつぎになって、同じ難波のお宮で、履仲天皇としてお位におつきになりました。

そのご即位のお祝いのときに、天皇はお酒をどっさり召しあがって、ひどくお酔いになったままおやすみになりました。

すると、じき下の弟さまの中津王が、それをしおに天皇をお殺し申してお位を取ろうとおぼしめして、いきなりお宮へ火をおつけになりました。火の手は、たちまちぼうぼうと四方へ燃え広がりました。お宮じゅうの者はふいをくって大あわてにあわて騒ぎました。

天皇は、それでもまだ前後もなくおよつていらつしやいました。それを阿知直あちのあたえという者が、すばやくお抱かかえ申しあげ、むりやりにうまにお乗せ申して、大和やまとへ向かつて逃にげ出して行きました。

お酔いつぶれになつていた天皇は、河内かわちの多遅比野たじひのというところまでいらしたとき、やつとおうまの上でお目ざめになり、

「ここはどこか」とおたずねになりました。阿知直あちのあたえは、

「中津王なかつのみこがお宮へ火をお放ちになりましたので、ひとまず大和やまとの方へお供ともをしてまいりますとここでございます」とお答え申しました。

天皇はそれをお聞きになつて、はじめてびつくりなさり、

「ああ、こんな多遅比たじひの野の中に寝ねるのだとわかつていたら、夜風よかぜを防ぐたてごもなりと持つて来ようものを」

と、こういう意味のお歌をお歌いになりました。

それから埴生坂はにうさかという坂までおいでになりました、そこから、はるかに難波なにわの方をふりかえつてご覧らんになりますと、お宮の火はまだ炎々えんえんとまっかに燃え立っております。

天皇は、

「ああ、あんなに多くの家が燃えている。わが妃きさきのいるお宮も、あの中に焼けているのか」という意味をお歌いになりました。

それから同じ河内かわちの大坂おおさかという山の下へおつきになりますと、向こうから一人の女が通りかかりました。その女に道をおたずねになりますと、女は、

「この山の上には、戦道いくさどうぐ具を持った人たちがおおぜいで道をふさいでおります。大和やまとの方へおいでになりますのなら、当麻道たじまじからおまわりになりましたほうがよろしゅうございましょう」と申しあげました。

天皇はその女の言うとおりになすつて、ご無事に大和やまとへおはいりになり、石上いそのかみの神かみ宮みやへお着きになって、仮にそこへおとどまりになりました。

すると二ばんめの弟さまの水齒みずはけ別王わけのみこが、その神宮へおうかがいになって、天皇におめみえをしようとなさいました。天皇はおそばの者をもって、

「そちもきつと中津王なかつのみこと腹はらを合せているのであらう。目どおりは許されないとおおせになりました。王みこは、

「いえいえ私はそんなまちがった心は持つておりません。けっして中津王なかつのみこなどと同腹どうふくではございません」とお言いになりました。天皇は、

「それならば、これから難波^{なにわ}へかえって、中津王^{なかつのみこ}を討ちとってまいれ。その上で対面しよう」とおっしゃいました。

二

水齒^{みずは}別王^{わけのみこ}は、大急ぎでこちらへおかえりになりました。そして中津王^{なかつのみこ}のおそばに仕えている、曾婆加里^{そばかり}というつわものをお召^めしになって、

「もしそちがわしの言うことを聞いてくれるなら、わしはまもなく天皇になって、そちを大臣にひきあげてやる。どうだ、そうして二人で天下を治めようではないか」とじょうずにおだましかけになりました。すると曾婆加里^{そばかり}は大喜びで、

「あなたのおおせなら、どんなことでもいたします」

と申しあげました。皇子^{おうじ}はその曾婆加里^{そばかり}にさまざまのお品物をおくだしになったうえ、

「それでは、そちが仕えているあの中津王^{なかつのみこ}を殺してまいれ」とお言いつけになりました。曾婆加里^{そばかり}は、

「かしこまりました」と、どうさもなくおひき受けして飛んでかえり、王^{みこ}がかわやにおは

いりになろうとするとところを待ち受けて、一刺しに刺し殺してしまいました。

水齒^{みずは}別王^{わけのみこ}は、曾婆加里^{そばかり}とごいつしよに、すぐに大和^{やまと}へ向かつてお立ちになりました。その途中、例の大坂^{おおさか}の山の下までおいでになったとき、命^{みこと}はつくづくお考えになりました。

「この曾婆加里^{そばかり}めは、私^{わし}のためには大きな手柄^{てがら}を立てたやつではあるが、かれ一人からいえば、主人を殺した大悪人である。こんなやつをこのままおくと、さきざきどんな怖^{おそ}ろしいことをしだすかわからない。今のうちに手早くかたづけてしまつてやろう。しかし、手柄^{がら}だけはどこまでも賞^ほめておいてやらないと、これから後、人が私^{わし}を信じてくれなくなる」
こうお思いになつて急にその手だてをお考えさだめになりました。それで曾婆加里^{そばかり}に向かつて、

「今^{こん}晩^{ばん}はこの村へとまることにしよう。そしてそちに大臣の位をさずけたうえ、あすあちらへおうかがいをしよう」とおつしやつて、にわかになそこへ仮のお宮をおつくりになりました。そしてさかななご宴^{えんかい}会をお開きになつて、そのお席で曾婆加里^{そばかり}を大臣の位につけになり、すべての役人たちに言いつけて礼拝をおさせになりました。

曾婆加里^{そばかり}はこれでいよいよ思いがかなつたと言つて大得意^{だいとくい}になつて喜びました。水^{みず}

齒別王は、わけのみこ

「それでは改めて、大臣のおまえと同じさかずきで飲み合おう」とおっしゃりながら、わざと人の顔よりも大きなさかずきへなみなみとおつがせになりました。そして、まず自分で一口めしあがつた後、曾婆加里そばかりにおくだしになりました。曾婆加里そばかりはそれをいただいて、がぶがぶと飲みはじめました。

王は曾婆加里そばかりの目顔めがおがそのさかずきで隠れるといつしよに、かねてむしろの下にかくしておおきになった剣つるぎを抜き放して、あッというまに曾婆加里そばかりの首を切り落としておしまいになりました。

それからあくる日そこをお立ちになり、大和やまとの遠飛鳥とおあすかという村までおいでになって、そこへまた一晩おとまりになったうえ、けがれ払いのお祈りをなすつて、そのあくる日石い上そのかみの神宮へおうかがいになりました。そしておおせつけのとおり、中津王なかつのみこを平らたいげてまいりましたとご奏そうじょう上みこになりました。

天皇はそれではじめて王を御前みこへお通しになりました。それから阿知直あちのあたえに対しても、ごほうびに蔵くらの司つかさという役におつけになり、たいそうな田地でんちをもおくだしになりました。

三

天皇は後に大和の若桜宮にお移りになり、しまいにおん年六十四でおかくれになりました。そのおあとは、弟さまの水齒別王がお継ぎになりました。後に反正天皇とお呼び申すのがこの天皇のおんことです。

天皇はお身のたけが九尺二寸五分、お齒の長さが一寸、幅が二分おありになりました。そのお齒は上下とも同じようによくおそろいになって、ちようど玉をつないだようにおきれいでした。河内の多遲比の柴垣宮で、政をおとりになり、おん年六十でおかくれになりました。

四

反正天皇のおあとには、弟さまの若子宿禰王が允恭天皇としてお位におつきになり、大和の遠飛鳥宮へお移りになりました。

天皇は、もとからある不治のご病氣がおありになりましたので、このからだでは位にの

ぼることはできないとおっしゃって、はじめには固くご辞退になりました。しかし、皇后やすべての役人がしいておねがい申すので、やむなくご即位になったのでした。

するとまもなく新羅国から、八十一艘の船で貢物を献じて来しました。そのお使いにわたって来た金波鎮、漢起武という二人の者が、どちらともたいそう医薬のことに通じておりまして、天皇の永い間の病気を、たちまちおなおし申しあげました。そのために天皇はついにおん年七十八までお生きのびになりました。

天皇は日本じゅうの多くの部族の中で、めいめいいいかげんなかってな姓を名のっているものが多いのをお嘆きになり、大和のある村へ玖討瓮といつて、にえ湯のたぎっているかまをおすえになつて、日本じゅうのすべての氏姓を正しくお定めになりました。そのにえ湯の中へ一人一人手を入れさせますと、正直にほんとうの姓を名のっている者は、その手がどうにもなりません、偽りを申し立てているものは、たちまち手が焼けただれてしまうので、いちいちうそとほんとうとを見わけることができました。

五

天皇がおかれになったあとにはいちばん上の皇子の、木梨輕皇子がお位におつきになることにきまっております。ところが皇子はご即位になるまえに、お身持ちの上について、ある言うに言われないまちがいごとをなすつたので、朝廷のすべての役人やしもじもの人民たちがみんな皇子をおいとい申して、弟さまの穴穗王のほうへついでしました。

輕皇子はこれでは、うつかりしていると、穴穗王方からどんなことをしむけるかわからないとお怖れになり、大前宿禰、小前宿禰という、きょうだい二人の大臣のうちへお逃げこみになりました。そしてさつそくいくさ道具をおととのえになり、輕矢といつて、矢の根を銅でこしらえた矢などをも、どつさりこしらえて、待ちかまえていらつしやいました。

それに対して、穴穗王のほうでもぬからず戦の心配りをなさいました。こちらでも穴穗矢といつて、後の代の矢と同じように鉄の矢じりのついた矢を、どんどんおこしらえになりました。そしてまもなく王ご自身が軍務をおひきつれになって、大前、小前の家をお攻め囲みになりました。

王はちようどそのとき急に降り出したひようの中を、まっ先に突進して、門前へ押し

よせていらつしやいました。

「さあ、みんなもわしのとおり進んで来い。ひよりの雨は今にやむ。そのひよりのやむように、すべてを片づけてしまうのだ。さあ来い来い」という意味をお歌いになって、味方の兵をお招きになりました。

すると大前、小前の宿禰は、手をあげびざをたたいて、歌い踊りながら出て来ました。

「何をそんなにお騒ぎになる。宮人のはかまのすそのひもについた小さな鈴、たとえば

その鈴が落ちたほどの小さなことに、宮人も村の人も、そんなに騒ぐにはおよびますまい」

こういう意味の歌を歌いながら穴穂王のご前に出て来て、

「もしあなたさま、軽皇子さまならわざわざお攻めになりますには及びません。ご同

腹のお兄上をお攻めになつては人が笑います。皇子さまは私がめしとつてさし出します」

と申しあげました。

それで穴穂王は囲みを解いて、ひきあげて待つておいでになりますと、二人の宿禰は、

ちやんと軽皇子をおひきたて申してまいりました。

かるのおうじ
軽皇子には、軽かる大郎女とおつしやるたいそう仲なかのよいご同腹どうふくのお妹さまがおありになりました。大郎女は世にまれなお美しい方で、そのきれいなおからだの光がお召めしもの物までも通して光っていたほどでしたので、またの名を衣通そとおし郎女と呼ばれていらつしやいました。

穴穂王あなほのみこの手にお渡わたされになつた軽皇子は、その仲のよい大郎女のお嘆なげきを思いやつて、

「ああ郎女いらつめよ。ひどく泣くと人が聞いて笑わらいそしる。羽狭はさの山のやまばとのように、こつそりと忍しのび泣きに泣くがよい」という意味の歌をお歌いになりました。

穴穂王あなほのみこは、軽皇子を、そのまま伊予いよへ島流しにしておしまいになりました。そのとき大郎女は、

「どうぞ浜べをお通りになつても、かきがらをお踏ふみになつて、けがをなさらないように、よく気をつけてお歩きくださいまし」という意味の歌を、泣き泣きお兄上にお捧ささげになりました。

大郎女はそのおあとでも、お兄上のことばかり案じつづけていらつしやいましたが、

ついにたまりかねてはるばる伊予までおあとを追っていらつしやいました。

軽皇子かるのおうじはそれはそれはお喜びになつて、大郎女おおいらつめのお手を取りながら、

「ほんとうによく来てくれた。鏡のように輝き、玉のように光っている、きれいなおまえが
いればこそ、大和やまとへも帰りたいともだえていたけれど、おまえがここにいてくれれば、
大和やまともうちもなんであろう」とこういう意味のお歌をお歌いになりました。

まもなくお二人は、その土地で自殺しておしまいになりました。

しかの群むれ、ししの群むれ

一

穴穂王あなほのみこは、おあにいさまの輕皇子かるのおうじを島流しにおしになった後、第二十代の安康あんこうてん

天皇のうとしてお立ちになり、大和やまとの石上いそのかみの穴穂宮あなほのみやへおひき移りになりました。

天皇は弟さまの、大長谷皇子おおはつせのおうじのために、仁徳にんとくてん天皇の皇子おうじで、ちようど大おじさまに

おあたりになる大日下王おおひさかのみことおつしやる方のお妹さまの、若日下王わかひさかのみこという方を、お

嫁よめにもらおうとお思いになりました。

それで根臣ねのおみという者を大日下王おおひさかのみこのところへおつかわしになって、そのおぼしめし

をお伝えになりました。大日下王おおひさかのみこはそれをお聞きになりますと、四たび礼拝をなすつ

たうえ、

「実は私も、万一さういうご大命たいめいがくだるかもわからないと思いましたので、妹は、ふ

だん、外へも出さないようにしていました。まことにおそれ多いことながら、それではおせのままにさしあげますでございましょう」とたいそう喜んでお受けをなさいました。しかしただ言葉ことばだけでご返事を申しあげたのでは失礼だとお考えになって、天皇へお礼のしるしおしぎ、押木の玉かずらというりっぱな髪飾かみかざりりを、若日下王わかくさかのみこから献上品けんじょうひんとしておことづけになりました。

するとお使いの根臣ねのおみは、乱暴らんぼうにも、その玉かずらを途中で自分が盗み取ったうえ、天皇に向かつては、

「おおせをお伝えいたしましたみこが、王はお聞き入れがございせん。おれの妹ともあるものを、あんなやつしきものの敷物にやれるかとおっしゃって、それはそれは、刀の柄つかに手をかけでご立腹になりました」

こう言つて、まるで根のないことをこしらえて、ひどいざん言げんをしました。

天皇は非常にお怒りいかになつて、すぐに人を派はせて大日下王おおくさかのみこを殺しておしまいになりました。そして王のお妃みこの長田大郎女きさききながたのおおいらつめをめしいれて自分の皇后になさいました。

あるとき天皇は、お昼寝ひるねをなさろうとして、お寢床ねどこにおよこたわりになりながら、おそばにいらした皇后に、

「そちはなにか心の中に思っていることはないか」とおたずねになりました。皇后は、「いいえけつしてそんなはずはございません。これほどおてあついお情けをいただいておりますのに、このうえ何を思いましたよう」とお答えになりました。

そのとき、ちょうど御殿ごてんの下には、皇后が先の大日下王おおひさかのみことの間におもうけになった、目弱王まよわのみことおつしやる、七つにおなりになるお子さまが、ひとりで遊んでおいでになりました。

天皇はそれとはご存じないものですから、というつかりと、

「わしはただ一つ、いつも気になってならないことがある。それは目弱まよわが大きくなった後に、あれの父はわしが殺したのだと聞くと、わしに復しゅうをしはしないだろうか、それが心配である」とこうおおせになりました。

目弱王まよわのみこは下でそれをお聞きになって、それではお父上を殺したのは天皇であつたのかとびつくりなさいました。

そのうちに、まもなく天皇はぐつすりお眠ねむりになりました。目弱王まよわのみこはそこをねらつてそつと御殿ごてんへおあがりになり、おまくらもとにあつた太刀たちを抜き放ぬして、いきなり天皇のお首をお切りになりました。そしてすぐにお宮を抜け出して、都夫良意富美つぶらおおみという者のう

ちへ逃げこんでおしまいになりました。

天皇はそのままお息がお絶えになりました。お年は五十六歳でいらつしやいました。

そのときには、弟さまの おおはつせのおうじ 大長谷皇子は、まだ どうはつ 童髪をおゆいになっている一少年でお

いでになりましたが、まよわのみこ 目弱王が天皇をお殺し申したとお聞きになりますと、それはそれ

はお憤りいきどおになって、すぐにお兄上の黒日子王くろひこのみこのところへかけつけておいでになり、

「おあにいさま、たいへんです。天皇をお殺し申したやつがいます。どういたしましょう」

とご相談をなさいました。すると、黒日子王くろひこのみこは天皇のご同腹どうふくのおあにいさまでおあり

になりながら、てんで、びつくりなさらないで平氣にかまえていらつしやいました。大 おおは

長谷皇子つせのおうじはそれをご覧らんになりますと、くわつとお怒りいかになり、

「あなたはなんと たの 頼もしげもない人でしょう。われわれの天皇がお殺されになったの

じやありませんか。そして、それは、またあなたのおあにいさまじやありませんか。それ

を平氣で聞いているとは何ごとです」とおつしやりながら、いきなりえりもとをひつつか

んでひきずり出し、刀を抜くなり、一打ちに打ち殺しておしまいになりました。

皇子はそれからまたつぎのおあにいさまの白日子王しらひこのみこのところへおいでになって、同じ

ように、天皇がお殺されになったことをお告げになりました。白日子王しらひこのみこは天皇のご同腹どうふく

の弟さまでいらつしやいました。それなのに、この方も同じく平氣な顔をして、すましておいでになりました。皇子はまたそのおあにいさまのえり首をつかんでひきずり出して、小治田おはりだという村まで引っぱつていらつしやいました。そしてそこへ穴あなを掘ほつて、その中へまつすぐに立たせたまま、生き埋うめに埋うめておしまいになりました。

王みこはどんどん土をかけられて、腰こしまでお埋められになったとき、両方りようほうのお目の玉が飛び出して、それなり死んでおしまいになりました。

二

おおはつせのおうじ
大長谷皇子はそれから軍勢をひきつれて、目弱王まよわのみこをかくまつている都夫良意富美つぶらおおみの邸やしきをおとり囲みになりました。すると、こちらでもちゃんと手くばりをして待ちかまえておりまして、それツというなり、ちようどあしの花が飛び散ちるように、もうもうと矢やを射い出だしました。

おおはつせのおうじ
大長谷皇子は、その前から、この都夫良の娘むすめの訶良媛からひめという人をお嫁よめにおもらいになることにしていらつしやいました。皇子おうじは今どんどん射向いける矢の中に、矛ほこを突ついてお突

ツ立ちになりながら、

「都夫良よ、訶良媛はこのうちにいるか」と大声でおどなりになりました。

都夫良はそれを聞くと、急いで武器を投げすてて、皇子の御前へ出て来ました。そして

八度伏し拜んで申しあげました。

「娘の訶良媛はお約束のとおり必ずあなたにさしあげます。また五か村の私の領地も、娘

に添えて献^{けんじょう}上^ういたします。ただどうぞ、今しばらくお待ちくださいまし。私がただ今

すぐに娘をさしあげかねますわけは、昔から臣下の者が皇子さま方のお宮へ逃げかくれた

ことは聞いておりますが、貴い皇子さまがしもじもの者のところへお逃れになったためし

はかつて聞きません。私はいかに力いっぱい戦いまして、あなたにお勝ち申すことができ

きないのは十分わきまえております。しかし、目弱王は、私ごとき者をも頼りにしてく

ださって、いやしい私のうちへおはいりくださっているのでございますから、私といたし

ましては、たとえ死んでもお見捨て申すことはできません。娘はどうぞ私が討ち死にをい

たしましたあとで、おめしつれくださいまし」

こう申しあげて御前をさがり、再び戦道具を取って邸にはいって、いっしょうけんめいに戦をいたしました。

そのうちに都夫良はとうとうひどい手傷を負いました。みんなも矢だねがすっかり尽きてしまいました。それで都夫良は目弱王に向かつて、

「私もこのとおりで、もはや戦を続けることができません。いかがいたしましょう」と申しあげました。

お小さな目弱王は、

「それではもうしかたがない。早く私を殺してくれ」とおっしゃいました。都夫良はおおせに従つてすぐに王をお刺し申した上、その刀で自分の首を切つて死んでしまいました。

三

このさわぎが片づくとももなく、ある日、大長谷皇子のところへ、近江の韓袋という者が、そちらの蚊屋野というところに、ししやしかがひじょうにたくさんおりますと申し出ました。

「そのどつさりおりますことと申しますと、群がり集まつた足はちようどすすきの原のすすきのようでございますし、群がつた角は、ちようど枯木の林のようでございます」と韓

袋らぶくろは申しあげました。

皇子おうじは、ようし、とおっしゃって、履り仲ちゆう天皇てんのうの皇子で、ちようどおいとにおあたりになる、忍おし齒はのみこ王とおっしゃるお方とお二人で、すぐに近おうみ江へおくだりになりました。お二人は蚊か屋やの野にお着きになりますと、ごめいめいに別々の飯かり屋をお立てになって、その中へおとまりになりました。

そのあくる朝、忍おし齒はのみこ王は、まだ日も上らないうちにお目ざめになりました。それですたくなのお気もなく、すぐにおうまにめして、大長谷皇子おおはつせのおうじのお飯屋へ出かけておいでになりました。こちらでは、皇子おうじはまだよくおよっていらっしゃいました。王みこは、皇子のおつきの者に向かつて、

「まだお目ざめでないようだね。もう夜よも明けたのだから、早くお出かけになるように申しあげよ」とおっしゃって、そのままおうまをすすめて、りよう場へお出かけになりました。

皇子のおつきの者は、皇子に向かつて、
「ただ今忍おし齒はのみこ王がおいでになりました、これこれとおっしゃいました。なんだかおっしゃることが変ではございませんか。けっしてごゆだんをなさいますな。お身固かためも十分に

なすつてお出かけなさいますように」と悪く疑つてこう申しあげました。それで皇子も、わざわざお召物めしものの下へよろいをお着こみになりました。そして弓矢ゆみやを取つておうまを召めすなり、大急ぎで王みこのあとを追つてお出かけになりました。

皇子はまもなく王に追いついて、お二人でうまを並ならべてお進みになりました。そのうちに皇子はすきまをねらつて、さつと矢をおつがえになり、罪もない忍齒王おしはのみこを、だしぬけに射落いとしておしまいになりました。そして、なお飽あき足たらずに、そのおからだをずたずたに切り刻きざんで、それをうまの飼葉かいばを入れるおけの中へ投げ入れて、土の中へ埋うめておしまいになりました。

四

忍齒王おしはのみこには意富祁王おおけのみこ、袁祁王おけのみこというお二人のお子さまがいらつしやいました。

お二人はお父上がお殺されになつたとお聞きになりました、それでは自分たちも、うかしてはいられないとおぼしめして、急いで大和やまとをお逃にげになりました。

そのお途中でお二人が、山城やましろうの苅羽井かりはいというところでおべんとうをめしあがつており

ますと、そこへ、ちよう役あがりの印に、顔へ入墨をされている、一人の老人が出て来て、お二人が食べかけていらつしやるおべんとうを奪い取りました。お二人は、

「そんなものは惜しくもないけれど、いったいおまえは何者だ」とおたしなめになりました。

「おれは山城でお上のししを飼っているしし飼だ」とその悪者の老人は言いました。

お二人は、それから河内の玖須婆川という川をお渡りになり、とうとう播磨まで逃げのびていらつしやいました。そして固くご身分をかくして、志自牟という者のうちへ下男におやとわれになり、いやしいうし飼、うま飼の仕事をして、お命をつないでいらつしやいました。

とんぼのお歌

一

おほはつせのおうじ
大長谷皇子は、まもなく雄略天皇としてご即位になり、大和の朝倉宮にお移りになりました。皇后には、例の大日下王のお妹さまの若日下王をお立てになりました。

その若日下王が、まだ河内の日下というところにいらしたときに、ある日天皇は、大和からお近道をおとりになり、日下の直越という峠をお越えになって、王のところへおいでになったことがありました。

そのとき天皇は、山の上から四方の村々をお見わたしになりますと、向こうの方に、一軒、むねにかつお木をとりつけているうちがありました。かつお木というのは、天皇のお宮か、神さまのお社かでなければつけないはずの、かつおのような形をした、むねの飾り

です。

天皇はそれをご覧らんになって、

「あの家はだれの家か」とおたずねになりました。

「あれは志幾しきの大県主おおあがたぬしのうちでございます」と、お供の者がお答え申しました。天皇は、

「無礼なやつめ。おのれが家をわしのお宮に似にせて作っている」とお怒いかりになり、

「行つてあの家を焼きはらつて来い」とおっしゃつて、すぐに人をおつかわしになりました。

すると大県主おおあがたぬしはすっかりおそれいってしまいました。

「実は、おろかな私どものことでございますので、ついなんにも存じませんで、うつかりこしらえましたものでございます」と言つて、縮みあがつてお申しわけをしました。そして、そのおわびの印しるしに、一ぴきの白いぬにぬのを着せ、鈴すずの飾かざりをつけて、それを身内みうちの者の一人の、腰佩こしはきという者に綱つなで引かせて、天皇に献けんじょう上じやういたしました。

それで天皇も、そのうちをお焼きはらいになることだけは許しておやりになり、そのま
ま若日下王わかくさかのみこのおうちへお着きになりました。

天皇はお供ともの者をもつて、

「これはただいま途中で手に入れたいぬだ。珍しいめずらいものだから進物しんもつにする」とおっしゃって、さっきの白いぬを若日下王わかぐさかのみこにおくだしになりました。しかし王みこは、

「きよう天皇は、お日さまをお背中せなかになすつておこしになりました。これではお日さまに對しておそれおうございしますので、きようはお目にかかりません。そのうち、私のほうからすぐにまかり出まして、お宮へお仕え申しあげます」

こう言つて、おことわりをなさいました。

天皇はお歸りのお途中、山の上にお立ちになつて、若日下王わかぐさかのみこのことをお慕したいになるお歌をおよみになり、それを王みこへお送りになりました。王みこはそれからまもなくお宮へおあがりになりました。

二

天皇はあるとき、大和やまとの美和川みわがわのほとりへお出ましになりました。そうすると、一人の娘むすめが、その川で着物を洗つておりました。それはほんとうに美しい、かわいらしい娘でし

た。天皇は、

「そちはだれの子か」とおたずねになりました。

わたくしひけたべ

あかいのこ

「私は引田郎の赤猪子と申します者でございます」と娘はお答え申しました。天皇は、

「それでは、いずれわしのお宮へ召し使つてやるから待っていよ」とおっしゃって、そのままお通りすぎになりました。

あかいのこ

赤猪子はいそがしく喜んで、それなりお嫁にも行かないで、一心にご奉公を待つてお

きゆうちゆう

りました。しかし宮中からは、何十年たっても、とうとうお召しがありませんでした。

そのうちに、もうひどいおばあさんになってしまいました。

あかいのこ

赤猪子は、

「これではいよいよお宮へご奉公にあがることができなくなつた。しかしこんなになるまで、いっしょうけんめいにおめしを待つていたことだけは、いちおう申しあげて来たい」
 こう思つて、ある日、いろいろの鳥やお魚や野菜ものをおみやげに持つて、お宮へおうかがいいました。すると天皇は、

ろうば

「そちはなんという老婆だ。どういうことでまいつたのか」とおたずねになりました。赤

あかいのこ
 猪子は、

「私は、いついつの年のこれこれの月に、これこれこういうおおせをこうむりましたもの

でございます。こんにちまでお召しをお待ち申してとうとう何十年という年を過すごしました。もはやこんな老婆ろうばになりましたので、もとよりご奉公ほうこうには堪たえられません、ただ私がどこまでもおおせを守まもっておりましたことだけを申しあげたいと存ぞんじましてわざわざおうかがいいたしました」と申しあげました。天皇てんのうはそれをお聞きになつて、びつくりなさいました。

「私わしはそのことは、もうとつくに忘わすれてしまつていた。これはこれはすまないことをした。かわいそうに」とおつしやつて、二つのお歌をお歌いになり、それでもつて、赤猪子あかいのこのどこまでも正直しょうじきな心根こころねをおほめになり、ご自分のために、とうとう一生お嫁よめにも行かないで過すごしたことをしみじみおあわれみになりました。赤猪子あかいのこは、そのお歌を聞いて、たまりかねて泣なきだしました。その涙なみだで、赤色にすりそめた着物の袖そでがじとじとぬれました。そして泣き泣き歌つて、

「ああああ、これから先はだれにすがつて生きて行いこう。若い女の人たちは、ちようど日ひ下さの入江いりえのはすの花のように輝かがやき誇ほこっている。私わたしもそのとおりの若きでいたら、すぐにもお宮めで召めし使めつていただけようものを」と、こういう意味をお答え申しあげました。

天皇はかずかずのお品物をおくだしになり、そのままおうちへおかえしになりました。

三

またあるとき天皇は、大和の阿岐豆野という野へご獵においでになりました。そして獵場ようばでおいすにおかけになっておりますと、一ぴきのあぶが飛んで来て、お腕うでにくいつきました。すると一ぴきのとんぼが出て来て、たちまちそのあぶを食い殺して飛んで行きました。

天皇はこれをご覧になって、たいそうお喜びになり、

「なるほどこんなふうには天皇のことを思う虫だから、それでこの日本のことをあきつ島と
いうのであらう」という意味をお歌に歌っておほめになりました。とんぼのことを昔の言
葉とんぼではあきつと呼んでおりました。

そのつぎにはまた別のときに、大和の葛城山へお上りになりました。そうすると、ふいに大きな大いのししが飛び出して来ました。天皇はすぐにかぶら矢をおつがえになって、ねらいをたがえず、ぴゅうとお射あてになりました。すると、ししはおそろしく怒り狂つて、うううとうなりながら飛びかかって来ました。それには、さすがの天皇もこわくおなりになって、おそばに立っていたはんのきへ、大急ぎでお逃げのぼりになり、それでも

つて、やつと危い^{あぶな}ところをお助かりになりました。

天皇はそのはんのきの上で、

「ああ、この木のおかげで命びろいをした。ありがたいありがたい」とおつしやる意味を、お歌にお歌いになりました。

四

天皇はその後、また葛城山^{かつらぎやま}におのぼりになりました。そのときお供の人々は、みんな、赤いひものついた、青ずりのしろうぞくをいただいて着ておりました。

すると、向こうの山を、一人のりっぱな人がのぼって行くのがお目にとまりました。その人のお供の者たちも、やはりみんな、赤ひものついた、青ずりの着物を着ていまして、だれが見ても天皇のお行列と寸分^{すんぶん}も違^{ちが}いませんでした。

天皇はおどろいて、すぐに人をおつかわしになり、

「日本にはわしを除いて二人の天皇はいないはずだ。それなのに、わしと同じお供を従えて行くそちは、いったい何者だ」と、きびしくお問いつめになりました。すると向こうか

らも、そのおたずねと同じようなことを問いかえました。

天皇はくわつとお怒りになり、まづ先に矢をぬいておつがえになりました。お供の者も残らず一度に矢をつがえました。そうすると、向こうでも負けていないで、みんなそろつて矢をつがえました。天皇は、

「さあ、それでは名を名乗れ。お互いに名乗り合つたうで矢を放とう」とお言い送りになりました。向こうからは、

「それではこちらの名まえもあかそう。私は悪いことにもただ一言、いいことにも一言だけお告げをくだす、葛城山の一言主神だ」とお答えがありました。天皇はそれをお聞きになると、びつくりなすつて、

「これはこれはおそれおい、大神がご神体をお現わしになったとは思ひもかけなかつた」とおつしやつて、大急ぎで太刀や弓矢をはじめ、お供の者一同の青ずりの着物をもすつかりおぬがせになり、それをみんな、伏し拝んで、大神へご献上になりました。すると大神は手を打つてお喜びになり、その献上物をすつかりお受けいれになりました。それから天皇がご還幸になるときには、大神はわざわざ山をおりて、遠く長谷の山の口までお見送りになりました。

五

天皇はつぎにはまたあるとき、その長谷はつせにあるももえつきという大きな、大けやきの木の下でお酒さかもり宴もよおをお催しになりました。

そのとき伊勢いせの生まれの三重采女みえのうねめという女官じよかんが、天皇におさかずきを捧ささげて、お酒をおつぎ申しました。すると、あいにく、けやきの葉が一つ、そのさかずきの中へ落ちこみました。采女うねめはそれとも気がつかないで、なおどんどんおつぎ申しました。天皇はふと、その木の葉をご覧らんになりますと、たちまちむツとお怒りいかになって、いきなり采女うねめをつかみ伏ふせておしまいになり、お刀をおぬきになつて、首を切ろうとなさいました。采女うねめは、

「あッ」と怖おそれちぢかんで、

「どうぞ命いのちだけはお許しくださいまし。申しあげたいことがございます」と言いながら、つぎのような意味の、長い歌を歌いました。

「このお宮は、朝日も夕日もよくさし入る、はればれとしたよいお宮である。堅かたい地伏ぢふくの上に立てられた、がっしりした大きなお宮である。お宮のそとは大きなけやきの木がそ

びえたっている。その大木たいぼくの上の枝えだは天をおおっている。中ほどの枝は東の国においかぶさり、下の枝はそのあとの地方をすっかりおおっている。上の枝のこずえの葉は、落ちて中の枝にかかり、中の枝の落ちた葉は下の枝にふりかかる。下の枝の葉は采女うねめが捧ささげたおさかずきの中へ落ち浮うかんだ。

それを見ると、大昔おおむかし、天地がはじめてできたときに、この世界が浮き油のように浮かんでいたときのありさまが思い出される。また、神さまが、大海たいかいのまん中へこの日本の島を作りお浮かべになった、そのときのありさまにもよく似にている。ほんとは尊とうとくもめでたいことである。これはきつと、後の世までも話し伝えるに相違さういない」

采女うねめはこう言いつて、昔むかしからの言い伝えを引いておもしろく歌いあげました。天皇はこの歌うねめに免めんじて、采女うねめの罪を許しておやりになりました。すると皇后もたいそうお喜びになつて、

「この大和やまとの高市郡たかいちごおりの高いところに、大きく茂しげつた広葉ひろはのつばきが咲さいている。今、天皇は、そのつばきの葉と同じように、大きなお寛ひろい、そして、その花と同じように美しくおやさしいお心で、采女うねめをお許ゆるしくださいました。さあ、この貴とうとい天皇にお酒をおつぎ申しあげよ。このありがたいお情けは、みんなが後の世まで永ながく語り伝えるであろう」と、こ

ういう意味のお歌をお歌いになりました。

それについて天皇も楽しくお歌をお歌いになり、みんなでにぎやかにお酒盛さかもりをなさいました。

采女うねめは罪を許されたばかりでなく、そのうえに、さまざまのおくだし物をいただいて、大喜びに喜びました。

天皇はしまいに、おん年百二十四歳でおかくれになりました。

うし飼^{かい}、うま飼^{かい}

一

雄略^{ゆうりやくてんのう}天皇のおあとには、お子さまの清寧^{せいねいてんのう}天皇がお立ちになりました。天皇はしまいまで皇后をお迎えにならず、お子さまも一人もいらつしやいませんでした。

ですから天皇がおくれになると、おあとをお継^つぎになるお方がいらつしやらないので、みんなはたいそう当惑^{とうわく}して、これまでのどの天皇かのお血筋^{ちすじ}の方をいっしやうけんめいにお探^{さが}し申しました。すると、さきに大長谷皇子^{おおはつせのおうじ}にお殺^{ころ}されになった、忍^{おし}齒^{はのみこ}王^わのお妹^{いもうと}さまで忍海郎女^{おしぬみのいらつめ}、またのお名まえを飯豊王^{いはいとよのみこ}とおつしやる方が、大和^{やまと}の葛城^{かつらぎ}の角^つ刺^さ宮^{のみや}というお宮においでになりました。それで、このお方にともかく一時政^{まじりごと}をおとりになつていただきました。みんなは、例^{れい}の忍^{おし}齒^{はのみこ}王^わのお子さまの意富^{いおほ}祁^{おけ}、袁^{おけ}祁^{おけ}のお二人が、播磨^{はりま}の国でうし飼^{かい}、うま飼^{かい}になつて、生きながらえておいでになるといふことはちつとも

知らないでいました。

その後まもなく、その播磨はりまの国へ、山部連小楯やまべのむらじおだてという人が国造くにのみやつこになつて行きました。するとその地方の志自牟しじむという者が新築しんちくしたおうちでお酒盛さかもりをしました。そのとき小楯おだてをはじめ、よばれた人たちも、お酒がまわるにつれて、みんなで代わる代わる立つて舞まいを舞いました。しまいにはかまどのそばで火をたいていたきようだい二人の火たきの子供にも舞えと言いました。

すると弟のほうの子は、兄の子に向かつて、おまえさきにお舞いと言いました。兄は弟に向かつて、おまえから舞えと言いました。みんなは、そんないやしい小やつこどもが、人なみに、もつともらしくゆずり合うのをおもしろがつて、やんやと笑わらいました。

そのうちに、とうとう兄のほうがさきに舞いました。弟はそのあとに舞い出そうとするときに、まず大声でつぎのような歌を歌つて自分たちきようだいの身の上をうちあけました。

「男らしい大きな男が、太刀たちのつかに赤い飾かざりをつけ、太刀のおには赤いきれをつけて、いかにも人目を引く姿すがたをしていても、深くおい茂しげったたけやぶの後ろにはいれば、隠かくれて目にも見えない」と、こう歌いだして、たけやぶという言葉ことばを引き出した後、

「そんなたけやぶの大きなたけを割って、それを並べてこしらえた、八絃琴は、それはそれは調子がよく整って申し分がない。今から五代前の履仲天皇は、ちょうどその琴のしらべと同じように、どこまでもりっぱに天下をお治めになったお方である。その皇子に忍齒王とおつしやる方がいらした。みんなの人々よ、われわれ二人は、その忍齒王の子であるぞ」と歌いました。

小楯はそれを聞くとびつくりして、床からころがり落ちてしまいました。そして大あわてにあわてて、さつそくみんなを残らず追い出したうえ、意外などころでお見出し申した、意富祁、袁祁のお二人を左右のおひざにお抱え申しながら、お二人の今日までのご辛苦をお察し申しあげて、ほろほろと涙を流して泣きました。

小楯はそれから急いでみんなを集めて、仮のお宮をつくり、お二人をその中にお移し申しました。そして、すぐに大和へ早うまの使いを立てて、おんおぼ上の飯豊王にご進申しあげました。飯豊王はそれをお聞きになると、大喜びにお喜びになり、すぐにお二人をお呼びのぼせになりました。

お二人は、角刺つのさしのお宮でだんだんにご成人せいじんになりました。

あるとき袁祁王おけのみこは、歌がきといつて、男や女がおおぜいいっしょに集まって、歌を歌いかわす催しもよおへおでかけになりました。

そのとき菟田首うたのおびとという人の娘で、王みこがかねがねお嫁よめにもらおうと思つておいでになる、大魚おうおという美しい女の人も来あわせておりました。するとそのころ、臣下の中でおそろしく幅はばをきかせていた志毘臣しびのおみというものが、その大魚おうおの手を取りながら、袁祁王おけのみこにあてつけて、

「ああ、おかしやおかしや、お宮の屋根がゆがんでしまった」と歌いだし、そのあとの歌のむすびを王みこにさし向けました。王みこは、すぐにそれをお受けになつて、

「それは大工だいこくがへただからゆがんだのだ」とお歌いになりました。すると志毘しびは重かさねて、
「いや、どんなに王みこがあせられても、わしがゆいめぐらした、八重やえのしばがきの中へはいれまい。大魚おうおとわしとの仲なかをじやますることはできまい」と歌いかけました。王みこはさすがず、

「潮しほの流れの上の、波の荒あらいところにしびが泳いでいる。しびのそばにはしびの妻がつい

ている。ばかなしびよ」とお歌いになりました。

そうすると志毘はむつと怒つて、

「王のゆつたしばがきなぞは、いかに堅固にゆいまわしてあろうとも、おれがたちまち切り破つて見せる。焼き払つて見せてやる」と歌いました。王はどこまでも負けないで、

「あはは、しびよ。そちは魚だ。いかにいばつても、そちを突きに来る海人にはかなうまい。そんなにこわいものがいては悲しかろう」とお歌いになりました。

王は、そんなにして、とうとう夜があけるまで歌い争つておひきあげになりました。そして、お宮へお帰りになるとすぐに、お兄上の意富祁王とご相談なさいました。志毘はひとりでつけあがつて、われわれをもまるで踏みつけている。われわれのお宮に仕えている者も、朝はお宮へ来るけれど、それからさきは昼じゅう志毘の家に集まってこびいつている。あんなやつは後々のために早く討ち亡してしまわなければいけない。志毘は今ごろは疲れて寝入っているにちがいない。門には番人もいまい、襲うのは今だとお二人でご決心になりました。そしてすぐに軍勢を集めて志毘の家をお取り囲みになり、目あての志毘を難なく切り殺しておしまになりました。

三

お二人はもはや、お年の上でも十分おひとり立ちで天下をお治めになることがおできになるので、じゆんじよ順序からいつて、お兄上のおおけのみこ意富祁王が、まず第一にご即位そくゐになるのがほんとうでした。しかし、みこと命は弟さまに向かつて、

「二人が志し自じ牟むのうち^{うず}にいたときに、もしそなたが名まえを名乗らなかつたら、二人ともあのままあそこに埋うずもれていなければならなかつたはずであつた。お互たがいにこんなになつたのもみんなそなたのお手柄てがらである。それで、私は兄に生まれてはいるけれど、どうかそなたからさきに天下を治めておくれ」とおっしゃいました。おけのみこ袁祁王はそのことだけはどこまでもご辞退じたいになりましたが、お兄上がどうしてもお聞きいれにならないので、とうとうしかたなしに、第一にお位におつきになりました。後にけんそうてんのう顕宗天皇と申しあげるのがすなわちこの天皇でいらつしやいます。

天皇はそれといつしよにやまと大和の近ちか飛あす鳥かの宮みやへお移りになり、いしきのみこ石木王という方のお子さまのなにわのみこ難波王とおっしゃる方を、皇后にお迎えになりました。

天皇は、お父上のおしほのみこ忍齒王のご遺骨いこつをおさがし申そうとおぼしめして、いろいろ、ご苦

心をなさいました。すると、近江おうみから一人の卑いやしい老婆ろうばがのぼって来て、

「王みこのお骨こつをお埋うめ申したところは私がちゃんと存じております。おそれながら、王みこには、ゆりの根ねのようにお重かさなりになったお歯はがおありになりました。そのお歯はをご覧らんになりませば、王みこのお骨こつということはすぐにお見分けがつかます」と申しあげました。天皇はさっそく近江おうみの蚊屋野かやのへおくだりになって、土地の人民におおせつけになって、老婆ろうばの指さす場所をお掘ほらせになり、たしかにお父上のご遺骨をお見出しになりました。それで蚊屋野かやのの東の山にみささぎを作ってお葬ほうむりになり、さきに、お父上たちに獵をおすすめ申しあげた、あの韓からん袋ぶくろの子孫をお墓守はかもりにご任命になりました。

天皇はそれから還御かんぎよの後、さきの老婆ろうばをおめしのぼせになりました、

「そちは大事な場所をよく見届みとどけておいてくれた」とおほめになり、置目老嫗おきめのおみなという名をおくだしになりました。そして、とうぶんそのまま宮中きゆうちゆうへおとどめになって、おてあつくおもてなしになった後、改めてお宮の近くの村へお住ませになり、毎日一度はかならずおそばへめして、やさしくお言葉ことばをかけておやりになりました。天皇はそのためにわざわざお宮の戸のところへ大きな鈴すずをおかけになり、置目おきめをおめしになるときは、その鈴をお鳴らしになりました。

後には置目は、

「私もたいそう年をとりましたので、生まれた村へ帰りたくなりました」と申しあげました。

天皇は置目のおねがいをお許しになり、それではもうあすからそなたを見ることもできないのかとおつしやる意味の、お別れの歌をお歌いになりながら、わざわざ見送りまでしておやりになりました。

つぎに天皇は、昔お兄上とお二人で大和からお逃げになる途中で、おべんとうを奪い取った、あのしし飼の老人をおさがし出しになつて大和の飛鳥川の川原で死刑にお行ないになりました。その悪者の老人は志米須というところに住んでおりました。天皇はなおその上の刑罰として、その老人の一族の者たちのひぎの筋を断ち切らせておしまいになりました。これらの者たちは、その後大和へのぼるのに、いつもびっこを引いて出て来ました。

天皇は、お父上をお殺しになった雄略^{ゆうりやくてんのう}天皇を、深くお恨み^{うら}になりました、せめてそのみ霊^{たま}に向かつて復しゆうをしようというおぼしめしから、人をやって、河内^{かわち}の多治比^{たじひ}というところにある、天皇のみささぎをこわさせようとなさいました。

するとお兄上の意富^{おおけのみこ}祁王^{みこ}が、

「天皇のみささぎをこわすためなら、ほかのものをやってはいけません。私が自分で行っておぼしめしどおりこわして来ます」とご奏^{そうじょう}上^{じょう}になりました。天皇は、

「それではあなたがおいになるがよい」とお許しになりました。意富^{おおけのみこ}祁王^{みこ}は急いでお出かけになりました。そしてまもなくお帰りになって、

「ちゃんとこわしてまいりました」とおっしゃいました。

しかし、そのお帰りがあんまりお早いので、天皇は変だとおぼしめし、

「いったいどんなふうにおこわしになったのです」とおたずねになりました。するとお兄上は、

「実はみささぎの土を少しだけ掘り^ほかえしてまいりました」とお答えになりました。天皇は、それをお聞きになって、

「それはまたどういうわけでしょう。お父上の復しゆうをするのに、土を少し掘って帰ら

ただけでは飽^あきたりないではありませんか。なぜみささぎをすっかりこわして来てくだらないのです」とおっしゃいました。お兄上は、

「そのおおせはいちおうごもつとです。しかし、相手の方はいくら父上のかたきとはいえ、一方はわれわれのおじであり、またわれわれの天皇の一人でいらっしやるお方です。私たちがただ父上のかたきということだけ考えて天皇ともある方のみささぎをこわしたとなりますと、後の世の人から必ずそしりを受けます。ただかたきはどこまでも報いねばならないので、その印^{しるし}に土を少し掘^ほつて来たのです。このくらいの恥^{はじ}を与えたのならば、後^こ世^{うせい}だれにもはばかりことはありませんまいから」

こう言つて、そのわけをお話しになりました。すると天皇も、

「なるほどそれは道理である。あなたのなさつたとおりでよろしい」とおっしゃつてご満足になりました。

天皇は八年の間天下をお治めになつた後、おん年三十八歳でおかくれになりました。天皇はお子さまが一人もおありになりませんでした。それでおあとにはお兄上の意^{おおけのみこ}富^ふ祁^き王^{わう}が仁^{にん}賢^{けん}天皇^{てんのう}としてご即位^{そくゐ}になりました。

天皇は^{やまと}大和の^{いそのかみ}石上^のの^{ひろたかのみや}広高宮へお移りになり、皇后には^{ゆうりやくてんのう}雄略天皇のお子さま

の春日大郎女とおつしやる方をお立てになりました。

天皇のおつぎには、皇子おうじ小長谷こはつせのわかさぎ若雀命のみことが武烈天皇ぶれつてんのうとしてお位におつきになりました。そのおあとには、継体けいたい、安閑あんかん、宣化せんか、欽明きんめい、敏達びたつ、用明ようめい、崇峻すしゅん、推古すいこの諸天皇しよてんのうがつぎつぎにお位におのぼりになりました。

青空文庫情報

底本：「古事記物語」角川文庫、角川書店

1955（昭和30）年1月20日初版発行

1968（昭和43）年8月10日31版発行

1980（昭和55）年9月30日改版19刷

初出：女神の死「赤い鳥」赤い鳥社

1919（大正8）年7月

天の岩屋「赤い鳥」赤い鳥社

1919（大正8）年8月

八俣の大蛇「赤い鳥」赤い鳥社

1919（大正8）年9月

むかでの室、へびの室「赤い鳥」赤い鳥社

1919（大正8）年10月

きじのお使い「赤い鳥」赤い鳥社

1919（大正8）年11月

笠沙のお宮「赤い鳥」赤い鳥社

1919（大正8）年12月

満潮の玉、干潮の玉「古事記物語上巻」赤い鳥社

1920（大正9）年12月

八咫鳥「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年1月

赤い盾、黒い盾「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年2月

おしの皇子「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年3月

白い鳥「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年4月

朝鮮征伐「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年5月

赤い玉「古事記物語下巻」赤い鳥社

1920（大正9）年12月

宇治の渡し「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年6月

難波のお宮「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年7月

大鈴小鈴「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年8月

しかの群、ししの群「赤い鳥」赤い鳥社

1920（大正9）年9月

とんぼのお歌「古事記物語下巻」赤い鳥社

1920（大正9）年12月

うし飼、うま飼「古事記物語下巻」赤い鳥社

1920（大正9）年12月

※「八俣の大蛇」の初出時の表題は「赤い猪」です。

※「八咫鳥」の初出時の表題は「毒の大熊」です。

※「朝鮮征伐」の初出時の表題は「神功皇后」です。

※「白日子王」に対するルビの「しろひこのみこ」と「しらひこのみこ」の混在は、底本通りです。

入力：Jupiter

校正：鈴木厚司

2001年11月19日公開

2014年8月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

古事記物語

鈴木三重吉

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>